

---

# 彼女たちの一歩

まつちい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女たちの一歩

### 【NZコード】

N5494P

### 【作者名】

まつちい

### 【あらすじ】

高校三年生 春

周りは徐々に受験モードへ変化していく。

その中、まだバレー部は夏の大会に向けて練習を続けている。

バレー部のメンバーは六人。ぎりぎりだ。

誰が抜けることも、急けることも許されない。

進路、受験、恋愛。

その荒波の中で、家族や自分自身とも戦つていかなければならぬ。

かといって、そのどちらも逃げることは出来ないのだ。  
立ち向かおう。しかし、子供に何ができるのだ。

それでも、彼女達は精一杯戦った。

その記録を、ここに残そう。

これを、すべての戦う高校生に捧ぐ。

## 【あらわしフライクションです】

# 1 プロローグ

## — プロローグ —

一面に真っ青な空が広がる。道を歩きながら空を見上げると、その視界には悠々と咲き誇った桜の花びらが入る。肌を撫でるように吹く風は、温かくて眠気を誘う。少なくとも日本にいる限り、人間が何をしなくとも四つの季節は巡る。元気がなくとも眠っていても泣いていても変わることはない。梅雨という半ば中途半端な季節も仲間にいれなければその数は五つになる。世界のうちで、こんなにも季節を多く体験できる場所は、南国や極寒の地に比べれば恵まれている。季節が変わることで気分も変わる。しかし、すでに持っているものに満足をしていると、大抵それが有り難いことだとは気づかない。ふとした瞬間に、季節は次に移り変わっていて、さらに気が付いた時にはまた同じ季節がやってきているのだから。幸せを感じる暇もなく、人は日常の生活に忙殺されている。幾分余裕のある人間だと、季節を食らうことを探味とする。つまり、季節の食べ物を味わい、スポーツに勤しむのだ。ただ、そのためには心身と金銭の余裕が必要になる。どこにでもいる高校三年生、伊藤千夏にはそのどちらの余裕もなかった。

人は歳を追う毎に一年が早く感じるようになるという。年齢を分母にした数が一年を体感するようになるというのは、あながち間違いでないだろう。小学生よりは中学生、中学生よりは高校生になつてからのほうが時間は早く過ぎている、気がする。これがもう十年、二十年経つたら……どうなつてしまつのだ。そんなことを千夏は漠然と考えた。道に転がる石ころを蹴ると、溜め息を吐く。今でさえ早過ぎるほどなのだ。それはよく言えば充実している、ということなのかもしれない。友達と笑い、部活をして、そこそこ勉強に励む。それで今までは充分だった。しかし、千夏は満足していくても周囲は待ってくれない。そう、季節が必ず廻るようだ。いや、季節

がきちんと巡るからこそ、待ってくれないのだ。

千夏には、恐怖の歳が始まるつとしていた。決して逃げることの出来ない、進路を選ぶという魔の時間が……。全てを飲み込む津波のようにやつてくる。どうしても、気が重くなるのを堪えきれず、千夏は通りすがる人間にもハツ当たりしそうになる気分を必死で押さえ込んだ。。

「千夏っ！」

千夏は、突如背中に衝撃を受けて振り返ると、そこにいたのは早川香織だつた。千夏が

所属するバレー部のメンバーだ。一年生の四月、初めての部活参加の日に出会つた二人は、

すぐに息統合した。喧嘩をすることもなく丸一年、ほとんど同じ時を過ごしてきた。すら

りと長い手足を持つ色白の香織とは対照的に、千夏は背も低く肌の色も黒い。そんな香織に千夏は憧れていたが、嫉妬心は不思議とまったくなかつた。それよりも、彼女の美しさ

に目が奪われるといふほつが正しいだろう。スパイクを打つ時のジヤンプする姿勢や、着

地した後に自分の打つたボールがどこに決まったのかを追う視線の鋭さも、すべてが凜々しいのだ。彼女が走つたコートの中には、自然と風が起つる気がした。しかし、千夏が嫉

妬心を抱かないのは、なによりも香織が千夏の存在を認めていくれるというのが大きい。ほんの小さなことでも、香織は千夏の言葉に感嘆の声を漏らすことがある。それが、千

夏には嬉しかつた。そんな色白の彼女は、今日も自分専用のバレー

ボールを、両手でしつ

かりと持つている。それをふざけて千夏の背中に当つたのは明白だつたが、それでも込み

上がつてくるのは笑いだつた。

「もー。やめてよオ。今ね、考え方していたんだから

千夏は、背中にボールのせいで汚れがついていないかを確認しよう

としたが、首が回る

はずもない。何度も首を無理に捻つていると、香織がペロッと舌を出して謝る。

「『めんね。千夏の背中を見ていたら、スパイク打ちなくなっちゃつて』

そう言つて、千夏の背中を軽く叩ぐ。汚れはついていないだろうが、謝罪の意味がこもつているのだろう。さらつと謝つたが、香織なら本当にここでスパイクを打ちかねないと内心ぞつとする。すると、香織が千夏の顔を覗き込んで言つた。

「それで？ 考えていたつて、何を？ こんな朝からよく頭が回るわね。お弁当のこと？」

二人が並んで歩くこの学校までの大通りは、この時間には生徒も少ない。たまに歩いている人たちも、ほとんどが駅まで向かうサラリーマンだ。今まで着込んでいたマフラー やコートを脱ぎ去つた彼らは、この季節少しだけ颯爽として見える。

「そうそう。今日のお弁当は焼きそばなの……つて、違うつて」

今時の女子高生より、若干長めのスカートを翻すと、千夏は空を仰いだ。ガードレール

に守られたこの歩道は、安全で気が抜ける。数センチ横の道には、朝から車が猛スピード

で走り抜けていく。そのせいで、一人の声も大きめだ。千夏が見上げた青い空の額に今度

は枝から落ちた桜の花びらがひとつひら加わつた。そのうちの一枚が、千夏の額に舞い降り

て来る。風がなくとも、花びらは散る。木は、花を付けたときは一瞬の誇りを得るだろう。しかし、しばらくすれば飽きてしまうのではないか。自分を飾るだけのそれに嫌

気がさし、イメージチョンジを狙つて花を散らす。そして人々がそれを見上げることで、

再び優越感を得る。千夏は、今の自分の気分を桜に馬鹿にされたような気さえした。何を

悩んでいるの、私はこんなに綺麗なのに。いつも言われているように、花びらを指で摘むと、

道へただ落とす。その花びらひとつでさえ、季節を焦つている気がした。もっと咲いて

いればいいのに……。そう話しかけたくなる。隣を歩く香織は、手元のボールが汚れていな

いか確認することに精一杯で、そんな小さな出来事には気がつかなかつたようだ。長い足で、

しかし千夏の足取りと変わらぬ早さで、学校までの道のりをゆっくりと歩く。

「じゃあ、何よ？」

やつと香織が顔を上げた時、突風が吹き抜けた。それが、香織の顔にも挑戦的に向かう。

春は、時たまこんな風が吹く。地面の砂を巻き上げ、花びらを思い切り散らす。それでも

冬と違つて暖かいそれは、心地よい。夏の湿氣が来るまでの、ひとときの安らぎ。もう冬

が懐かしくはならない。春を迎える気持でいっぱいになるのだ。ふはっと息を吐き出

した香織は、悩みなどなぞそういうほど清々しい笑顔だった。

「すつごい風！ ねえ、この通りや、去年よりもいっぱい桜が咲いている気がしない？」

二人が歩いているここは、高校の通学路だ。大通りで交通量も多いが、電車通学で駅から歩くほとんどの生徒がここを通り、八時頃には女子生徒で溢れか

える。しかし、早朝の

部活動に参加するこの一人が通る時間には、生徒の姿など見かけないことがない。今も、

千夏達のほんの五十メートル先に一人歩いている姿が見えるだけだ。それも、くるぶしま

であり、そのようなスカートの丈だ。香織が、風で舞つた長い髪を右手で整えるのと同時に、千

夏はその短いショートカットの髪を左右に軽く振つた。そうするだけで、いつでも髪型は

元通りだ。ドライヤーをして乾かすのも簡単だし、なにより走つていて邪魔にならない。その髪から、一枚の花びらが地面上に落ちる。その落ちた花びらを無意識にも踏まない

ように、千夏は大股に足を開いた。そして桜にも気遣う自分が、情けなくて笑える。

「ねえ、じつして歩いていると、向こうの方から津波が来る気がしない？」

千夏は顔を上げると、まっすぐに続く道を見て言つた。このまつすぐ続く道は、千夏の

高校を通り過ぎた後も延々と続いている。どの地域に続いているのか知つても、実際

に歩いたことはない。それだけで、その先で何が起こっているのか分からぬ気がした。千夏は、時々こうした不思議なことを言つてしまつ。考えていることが、つい口から漏

れてしまうのだ。千夏は「冗談ではなく、真剣だ。しかし、共感を得られることはほとんど

ない。自分の頭の中には映像が広がっているのに、變つていいね、の一言で片づけられて

しまう。親には、外で変なことを口走るなとまで言われた。それで、香織は決して笑

わない。ボールを胸に抱え、少し考えるようこまつすぐ前を見た後、同じようにはじめに

返す。

「津波が？ 向こうから来るの？ こんな街に？」

広がる道の先に、海はない。言つてみれば、海は駅の反対側だ。それは千夏も分かって

いる。それでも、この道を歩いていると、たまに津波に襲われる気がするのだ。SF映画のワンシーンにあるように。マンションよりも高い波が、突如現れる。それから逃れる人間が一斉に自分のほうに走つてくるのだ。それでも次々に飲み込まれていく。その高い波の恐怖に驚きながらも、どこかその水の青さに見とれるのだ。

「うん。そう。ほら、空と地上の境界線があるでしょう？ ま、ほとんど車と建物で見えないけどさ。あそこからどんどん迫つてくるの。それで早くて逃げられないの。どうする？」「どうするって。うーん、大丈夫だよ。そんなことないから。でも、もしもあつたら私は必死で泳ぐかどこかに逃げ込むかな。千夏は？ あ、こんなちはーーー！」

香織は、千夏の回答を求めながら、通り沿いにある交番前に立つ警官に笑つて挨拶をした。こうこうことをさらりと出来るのも、香織の特権だと千夏は思う。警官も、慣れたような仕草で額に右手を当てて敬礼のポーズを取る。それに満足したように、香織は微笑んだ。千夏の答えを急かすように、ブレザーの袖を引っ張る。千夏は、揺すぶられる腕をそのままに、じつと道路を見つめた。こんな天気だからかもしれない。一日学校をサボつて、どこまでも歩いていくたくなる。休日ではなく、あくまでも学校を休んで行くことに意義があるのだ。

「あたしは……、ただ立つていると思つ」

「え？ 逃げないの？」

「香織さ、アントン・チホーホフの書いた『手帖』って読んだことある？」

千夏が、体操服しか入っていない軽い鞄を、腕から肩に掛け替えて言う。

「ううん。知らない。千夏、海外の本まで読むんだ」

「たまにね。でね、その人……ロシアの劇作家なのだけど。その本に書いているのよ。『ひょっとしたらこの宇宙は、何かの怪物の歯の中にあるかもしだね』ってね」

「つまり、千夏は、その本の作者の考えが正しいと思うつてこと?」

香織は、必死で理解しようとしているように、右手の人差し指をこめかみに当てる。胸にはボールを抱えているのもおかしな姿だ。

「正しいかまでは分からぬ。違う、馬鹿みたいだつて言う人の方がほとんどだとは思う。でも、当たつているかもしない。つまり

ね、」

香織が、とうとう呻き声を上げたので、千夏ははつきりと叫ぶ。このきつい朝の練習が始まる貴重な時間に頭を悩ますほど、これは重要な問題ではないのだ。

「もしも、よ。それが正解だつた場合。宇宙の中に地球がある。地球も歯の一部なのよ。人間なんて、歯の間に挟まる肉の筋みたいなもの。邪魔で気にはなるけど、歯を磨くまで取るのを我慢しようかくらこの些細なものなのよ。だから、定期的に怪獣が歯を磨くと、何かが起こる。地震もハリケーンも竜巻も。あれは地球が怒つているんじやなくて、怪獣が生活の一部を行つているだけなの」

「……結論は?」

「だから、ここで津波が来たとしてもそれは怪獣の涎くらいでしかないのよ。人間が、歯の間に挟まる一部である限り、逃げられない。そうでしょう? 歯磨きをしていい間、考える? あー今日は海苔が挟まつていた。肉が銀歯に詰まつたつて。考えないでしょ? 人間なんてそれくらいちつぽけなもの。津波が来ても逃げられないのよ……」

千夏が言い終えると、命がいったよに香織がボールを叩いた。そして千夏を横目で眺める。

「千夏の話つて面白いけど、抽象的なのよね。まるでクイズを出されているみたいな。大丈夫。本物の津波に襲われたら恐らく命は

ないけど、受験くらいじゃ死なないから」「

並んで歩いていた二人の、千夏の足が止まる。それに気づいて、香織も止まり振り返った。香織は正論だ。こんなところに津波が来るわけもない。千夏の考えを笑わないが、同調することもない。ただ、訂正をするだけだ。妄想を中止する、と言つべきだらうか。千夏は、それでも前を見ては目を細めた。もしも、今ここに津波が来て、全てを飲み込んでくれたらどれだけ楽だらう、と。しばらくは、街の復興で忙しいだらうし、学校どころではなくなるだらう。そう考へていると、隣で香織が大きくため息を吐いた。

「千夏。逃げたいのも分かるけど、まずは頑張るよ。ね？」

頭脳明晰な彼女には、千夏の考えなどお見通しなのだ。この世界が今だけ無くなれば、受験などという面倒くさい問題から逃げられるのに。すると、今度はとんつと音がした。

千夏が横を見ると、香織がバレー ボールを地面に着いたのだ。バスケットボールよりも軽くて白いそれは一旦地面に着くと、すぐに香織の手に吸い込まれるようにして戻った。香織はその感触を確かめるように十本の指でしっかりと包むと、次に空中に放りあげた。桜の花の近くまで行つて、落ちてきたそれを額の前に構えた手で跳ね返す。オーバーストの練習だ。このオーバーストと、両腕を前方にまっすぐ伸ばして組むアンダーストは、バレー ボールの基本だ。しかし、その基本を歩道とはいえ、一般道路を歩きながらやつてのけるのだから遅しい。いつしかこの光景にも違和感は無くなつた。香織は電車の中でもボールを抱え、駅からのこの道（必ず交番の前を過ぎると）これを始める。それも肩に鞄をかけ、まして靴はロー ファーであることも、香織の技術の高さを物語る。車道にボールを出したことはないのだが、時々それ違うサラリーマンが異様なものを見る目つきで香織を凝視することはあつた。だが、千夏にとつてこれは生活の一部で、朝一番にこれを見ないと、なんだか一日が狂うのだ。ぽーん、ぽーんとボールが跳ね上がっては落ちるのを見て、千夏は頭が冴えてくるのを感じた。

「やうだよね、頑張るしかないよね」

そう言つて、香織の顔を見る。

ピピーっ！

突如、背後から車の騒音に交じつて聞こえた笛の音に驚いて、千夏が振り向くと、先程

香織が挨拶した警官が、胸にぶらさがつた銀色の笛を口に咥えていた。両手を大きく頭上で振つている。しかし、それは友愛を示すものとはほど遠く、顔が怒りに満ちている。

「か……っ、香織っ！！」

千夏が、香織の顔を見上げる。春の陽光に眩しそうに目を細めた香織は、すぐにボール

を胸に納めた。まるでペットのようだ、そのボールは素直だ。香織は何事もなかつたかの

ようになぐりと振りかえると、さわやかに一礼した。香織の髪の毛がふわりと揺れ、千夏の頬をくすぐつて逃げた。なんと……図太い神経を持ち合わせているのだねつ。

桜は、駅から歩道沿いにずっと並んでいる。電車通学をしている生徒は、最寄りの駅で

ある稻毛駅から学校まで、春はお花見をしながら通えるのだ。一人の通う高校は、県内屈指の進学校であり、公立で唯一の女子校である。社会に出てからも評判がいいらしく、創立百周年を過ぎてもなお、衰退することのない伝統ある高校だ。繁華街とまではいかなくとも、そこそこ遊ぶ場所もある上に、交通の便も良い。部活動も盛んで、生徒同士の上下関係も悪くない。そんな話を前提に、毎年受験生は張り切つて校門をくぐるのだ。

千夏もそうであった。偶々倍率が低い年だったとはいえ、合格した時は安堵感で涙が溢れた。それから丸一年の月日、かたときも休むことなくこの道を通つた。カラオケ屋の併設されるゲームセンターを過ぎ、交差点を渡り、ドーナツ屋を偵察する。そこらには珍

しいほど近代的なガラス張りの図書館を通り、公園を過ぎると交番がある。ファミリーレストランのチエーン店からの匂いに鼻をひくつかせていると、すぐに校門が見えるのだ。

校門前にあるコンビニに立ち寄らなければ、無駄な小銭をはたくこともない。それがなかなか難しいのだが……。登校時間は、同じ道をまるで蟻が行列を組むように女子生徒が進む。友達同士で歩き、スピードもそれぞれだ。笑っては右に傾き、じゃれては左に動く。従つて、登校時刻の三十分前からは、千夏の高校の制服一色に通りが埋まる。地元では、別名女子校通りと呼ばれるほど有名なのだ。

それだけ聞けばさも輝かしい道路の気がするが、実際はそうではない。生徒にとつてはとてもなく面倒な通りなのだ。そして三年生になつたこの春、千夏にとつてそれはあまりにも当たり前の光景になつてしまつていた。そしてその原因が、今日も現れる。

「おいつ！ 伊藤千夏！ なんでそんなにスカートが短いんだ！」

二人がコンビニへの誘惑を断ち切り校門に入ると、その陰から生徒指導の阿部が、はち

きれんばかりの腹を揺らしてひょっこり現れた。今日も白いシャツに赤い蝶ネクタイをし

ている。そう、この通りは教師の目が光つているのだ。時々あちこちの角に、教師は校則を守らない生徒を見つけるために立つてゐる。特にこの阿部は、生徒の前に不意に現れる

ことを特技としている。それをストレス発散や暇つぶしにしているのだと噂になるほどだ。こうして校門で現れるならまだマシで、時には店を出ると立つてしたり、駅の改札を入ろうとすると肩を叩かれたりする。これに驚いて悲鳴を上げようものなら、奴の思う壺だ。口の端をにんまり上げて喜ぶ顔が、千夏の瞳に映る。たいていこの時間は教師も登校中なので、千夏も安心していた。千夏のスカート丈は、優に膝の上に

位置する。阿部からすれば、あり得ない短さだろう。

「……直します」

千夏が、腹辺りで何重にも巻いている制服のスカートをくるくると落としている。それはすっぽりと膝を覆い隠す長さになつた。一昔前の不良のようだ。

ふ、と隣の香織が吹き出す。千夏がちらつと睨むのと、阿倍の怒声は同時だつた。

「早川も！ スカートが短い上に、なんだ、その髪は！ お前はまた染めたのか？ お前達は反省文だからな！ あ……、おいつ、ボールを持つてくるなど言つていいだら！」

阿部が口を開いた途端、香織は一目散に走り出した。その背中に向かつて叫ぶ阿部の声

はだんだんと大声になり、田の前にいた千夏の耳が裂けそうなほどだ。阿倍の前で、小走り

くなつてスカートを下ろす自分に嫌気が差し、出遅れた千夏も後を追うように走りだす。阿部は、今度は千夏に向つて怒鳴り始めたが、振り返る勇気はなかつた。その顔を見れ

ば、足が竦んでしまうに違ひない。足元でスカートがバサバサと抗議の声を上げる。この

ままでは足に絡まつて転んでしまうほどだ。校舎を通り抜け、体育馆へ向かう角を曲がつ

た千夏は、いきなり目の前に現れた香織の姿を見て急ブレーキをかけた。彼女は、走つた

のに息が乱れることもなく、塀に寄りかかつて待つていた。彼女のスカートが、膝下に直される事はない。

「ちょっとー！ 置いていかないでよ」

半ば泣きつくように、千夏が香織の肩に手を置き寄りかかる。走つ

たことよりも、怒り

の矛先を向けられたことで息が上がってしまった。部活の練習をする  
前から、どつと疲れて

しまった。

「あいつ、怒っていた？」

対照的に、香織はけろっとしたものだ。千夏が、阿部の顔を思い出して真剣に頷いたのを見ても、ただ小さく肩を竦めただけだった。そして小さな口を、さらに小さくすぼめる。

「反省文だって。ロマン・ロランの言つとおり。生とは、休戦のないひとつの戦いだね。

はああ……」

「本当に千夏は文学少女だよね。でも、何言つているの。戦いなんてまだこれからよ。早く

く行かなくちゃ！ 朝練、遅れるよ」

そう言つて歩き出した香織は、言葉とは裏腹に再びオーバーストをしながらだった。

校門を入り、校舎の裏側に体育館がある。そしてその脇に様々な部室が集まる建物通称

「F1（エフワン）」が建っているのだ。名前の由来は定かではないが、一説によると一つのファミリーひとつらしに。つまり、共同住宅のようなものなのだ。一階から一階まで、全部で十個の部屋がある。体育館やグラウンドを使用する部活が一部屋ずつ割り振られている。茶色い壁の外観は古く、塗料もとじるどじる剥がれている。中に入ればコンクリートがむき出しじで、家賃月額二万円ほどで住めそうな建物だ。火事を起こさないよう火は使用出来ないが、共同のトイレスシャワーの個室が数個あるのでなかなか快適だ。しかし、その快適な空間を得るにも、一年以上の我慢が必要とされる。下級生は部屋に入れて貰えないのだ。一番上の学年になつて初めて、その楽園は引き継がれる。上級生がいる間、下級生は廊下にゴザを

敷き、その上に荷物を置き着替えを済ます。上級生が引退した直後の夏から、一年間しかその楽園にはいられないのだ。下級生の間は仕事も多い。上級生より早めに登校し、体育指導室からF1の鍵を貰う。鍵を開けたらすぐに着替え、体育館へ移動だ。体育館へ行つたら、今度は倉庫の鍵を開ける。体育館はほぼハーフコートで使われる。その組み合わせは決まっていて、バレーとバスケットが同時に用うのでボールが行き来出来ないよう間に隔らなくてはならない。それを仕切るのが、巨大なカーテンのような網だ。右から左に引っ張るだけなので簡単だが、そのネットを準備して初めて、バレー コートの作成に入る。最初に床一面を雑巾がけする。端から端まで全てだ。一本の鉄のポールを倉庫から運び、穴にはめ込み立てる。その間を繋ぐようにネットを張る。それも緩んでいると、あとで多方面から大目玉を食らう。顧問は勿論、上級生、試合の時なら相手の学校からも非難されてしまう。その作業一つ一つが、簡単なようで実は面倒くさいものなのだ。それを全て、上級生が来る頃に全てを終わらせていいないと、また怒られるのだから堪らない。

そして一年以上乗り越えてやっと、千夏と香織も楽園を手に入れた。それを手に入れた日、メンバー全員で争うように部室に走った。誰がどの位置に座るのかを決め、ジュースで乾杯した。そんなことを覚えているだろうか、と千夏はF1を見上げながら考えた。

体育館の前を一人が通ると、すでに新一年生となつた後輩が、準備を終えているようだつた。少なくとも彼女達に部室を明け渡す日は近い。後輩もそれが分かっている。指折り世代交代の日を待ち望んでいるかもしけない。しかし、まだ千夏達の天下だ。後輩が準備をしていても焦らなくて平氣なのが、先輩の特權だ。考えてみれば、小さな社会だ。上が言うことに下が従つ。この世界は、そうして回つてゐるのだ。権力には叶わない。戦国時代とは異なり、謀反も出来ない。

「千夏！ 香織！」

最初の呼びかけは少し離れているのに、香織の名はすぐ側に聞こ

えた。と、すぐに二人の脇に自転車が止められる。乗っているのは同じく、部活のメンバーの松吉美香だ。猛スピードで追いかけてきたようだ。母親のお下がりだというその自転車の籠は、前部分が脆くもへこんでいる。この前見た時はそんな傷などなかつたはずだが、おっちょこちょいの美香のことだ。電柱にでも突つ込んだのだろうと考えて、千夏は小さく笑つた。

「おはよ。美香」

香織が、まだトスを続けながら言う。美香のカジュアルな服装は、遠くから見てもすぐに見分けられる。制服の上に羽織ったパークーの色は、今日は派手なオレンジだ。原色すぎて制服には似合わない氣もするが、なぜか美香が着るとしつくり収まるのだ。いつごろからか、美香は派手なパークーを着て登校するようになつた。大きめのパークーに、お団子にまとめた頭が彼女の溌剌さを表している。時々、身体をクネクネとタコのように動かしては、周りの笑いを誘う。その彼女も、自転車を降りた途端に高い声で騒ぎ始めた。

「ちょっと、香織！　さつき阿部に怒られたでしょー！　そのスカート短いって。あたしが自転車で通つた時、とばっちり食つたよ。パークーは校則違反じゃないのに怒られた！」

香織は、それでもトスを止めるではない。そう、と一言呟いただけで、部室にまっすぐ進んでいく。F1の入り口である鉄の扉を千夏が開けると、そこは人でいっぱいだった。反対側のコートを使用するバスケット部の部員が多いのも一つの原因だが、なによりも休日は時間によつて使用する部活が異なる中、平日の朝の練習では一斉に全部活が活動をする。始める時間も寸分違わず、終わる時間もほぼ同時だ。その分騒がしくなるのは当然のことだつた。しかし、クラスが離れていると会えない友達とも話せるし、あわよくばおいしい情報を手に入れることもできる。それは、教師の教壇の上でおならをしたという笑い話や、他クラスでやつた小テスト情報など数知れず。大人達の監視である視線から逃れられる、唯一であり最大の隠れ家とでも言える。

千夏が扉を開けた瞬間、中に溜まっていた熱気と笑い声が、固まりとなつて外へ飛び出してきた。それは朝の当り前の風景であり、理由もなく心弾む空氣だ。バレー部の部室は、一番突き当たりにある。中の廊下も土足なので、三人は固まつてそのまま人ごみを突つ切る。あらうことか、香織はF1の中でもトスを続けている。練習心が旺盛だと言えばその通りだが、年中こうしてボールをトスしていると、千夏は彼女が何かに取り憑かれているのではないかと心配になる時もあるくらいだ。そしてもう一つ、あんなに長い間上を向き続けていて、首が痛くならないのかという疑問もあった。

「おはよー」「まーす」

この中は、全部活動の後輩含めて同じ住人だ。たとえ学年が違つても、毎日会うと一ヶ月もすれば顔と名前も一致するようになる。後輩が困つていれば、違う部活でも声をかけるし、大事な場面では怒ることもある。千夏達も、そうして育てられたのだ。それを代々素直に受け入れるのだから、質のいい生徒が多いのだらう。というよりも、いわゆる体育会系に合わないと分かるのは、運動よりも前にこの礼儀作法や上下の関わりだ。無理だと悟つた者は、二ヶ月待たずには大抵は辞めてしまうのだ。日々にかけられる挨拶に返事を返しながら、三人は廊下を進む。他の部活の後輩も、香織の歩きながら行うトスを見て、もう驚くことはない。F1の朝ではこれが普通なのだ。するりと香織を避けると、彼女たちは外へ飛び出していく。

「おはよー」

三人の先頭にいた美香が、部室のドアを開ける。入口の鉄扉とは違い、それは一般の家庭の外に面した窓ガラスと同じ造りのドアだ。下半分は曇りガラスがはめられているが、上部分は廊下から中が丸見えになる。そのため、どの部活もその上半分が隠れるようにカーテンを内部に付けている。ただ、バレー部のそのカーテンがいつから付いているのかは誰も知らず、洗つたことがないというのも不気味な話だ。おそらく、想像しがたいほどの目に見えない汚れに塗れているはずだが、一切誰もそれを指摘しない。案外、女子校などそ

んなものである。女子校はとても小綺麗で清楚だといつイメージを持つ男子高校生には、決して見せられない代物だ。

「おはよー。つて、美香のパーカー今日も凄い！ 相変わらず派手ね～。それに香水、ちょっと強くなつてない？」

美香が、カーテンを捲つてその場で靴を脱ぐと、部室の中にいる者が声をかけた。住人たちが集まつているのだ。入つてすぐに靴を脱ぐスペースがあり、そこにはすでに三足が置かれていた。

「香水？ そんなことないつて。いい匂いでしょ。若菜は敏感すぎるんだよ。ん？ イウ～？」

美香は鞄を床に放ると、五畳ほどの部屋の一一番奥の定位置についた。その途中、声を掛け

けてきた、荒山若菜の頭を軽く叩く。パーカーを脱ぐと、その匂いを嗅ぎながら後ろを歩

いてきた千夏に声を掛ける。

「若菜、正解。ちょっと美香の香水きついよ。美香が通ると数メートルは匂いが残つてい

るもん。ひょっとしてマーキングでもしているつもり？」

千夏も靴を脱ぎ、部室に上がる。美香の隣に座つてから、靴下を部

活用のものに履き替

えた。普段は学校指定の黒いハイソックスだが、今度は膝まであるバー用の白いハイソックスだ。赤い絨毯が敷かれている床は、カーテン同様まともに掃除をされたことがない。

素足で長時間座つていようのなら、その夜は必ず足が痒くなつてしまふ。

「あれ？ 香織は？」

若菜が姿の見えない香織を田で捲すと、彼女はカーテンの下から現れた。それも、膝建ちでトスを続けていく。ここまでもぐると神業だ。メンバーにも呆れ顔が混じっている。

「九十五……、九十六……、九十七。ああっ！！」

靴を脱ぎながらのトスは、本人の意向には反して失敗に終わった。

「もつっ！ あと二回だったのに。今日はついてないかもな」

意氣消沈し始めた香織と、パーカーの匂いを嗅ぎ続ける美香に挟まれて、千夏は黙々とジャージに着替えていく。

「香織。そのスカートの長さだと捕まつたでしょ？ 阿部、あたしが十五分前に校門過ぎ

た時もいたよ。いきなり田の前に飛び出して来て、自転車で轢きそうになつたよ。生徒を

驚かすのもいいけど、滑稽で仕方ないよ」

千夏の前に胡座を搔いて座る秋田京子が、床に並べられたクッキーを頬張りながら聞い

た。バレー部内で一番長身の彼女は、その体型と整つた顔でモデルの仕事をこなしている。

常にお菓子が床に散乱しているこの、一番の原因であるくせに決して太ることがないのが不思議だ。周りが一の腕を見せ合つて小言をいうのを横目で眺めながら、京子はケーキをホールで平らげたりする。朝ご飯を食べてから来ているにも関わらず、朝練の前にはこうしてお菓子を食すのが日常となつている。

「おしい！ 阿部を失う機会だつたのに。……大体厳しすぎるのは、この学校。何？ このスカート丈」

香織は京子を一瞥すると、自身のスカートを限界まで下ろした。くるぶし近くまであるスカートを見て、ため息が漏れる。

「違うでしょ。香織が逃げるから、怒られるんだよ！」

千夏がハーフパンツを穿きながら言つと、横から美香が割り込んでくる。

「違うよ。一人共いけないんだよ。あたしのパーカーまで怒られたんだから」

美香も、文句を言つていてる割には着替えを終えている。ハーフパンツもこの時期になれば寒さを感じない。

「なんでもいいけど、阿部、あれストレス溜まっているんじゃない？」

若菜が、膝にサポーターを装着しながら言った。ちょうど膝小僧の位置がすり切れて、中の綿が見えていた。それだけ転んでいるのだ。若菜のその綿と、自分も同じように穴の開いたサポーターを見比べ、千夏はどうしてここまでバレーをしているのかを考えた。なんのためにあんなに転んでいるのだろうか。一度考え始めて答えのないループに引きずり込まれそうになつたところを、メンバーの言葉で我に返る。

「そういうば、去年の進学率ってことん悪かつたみたいじゃない。かわいい先輩多かったのにね」

京子の隣で綺麗に正座をして、鏡を見ながら田にコンタクトを入れている小笠原祥子が言った。のんびり屋の祥子は、一番乗りで部室へ来ても最後まで準備をしている。今日も、まだ着替えさえ済ませていない。そのゆつたりとした動作は、千夏にも見習うべきところがあつた。コートの中でも決して焦ることがない。人のミスを責めることもしない。戦闘意欲はあるのかと、時々聞きたくなることがある。それでも彼女なりに戦っているのは分かる。なにより、勝つことよりもメンバーの精神に気を遣うところはさすがだ。

「綺麗で合格率悪いって言うのが一番困るんだよね。だって、綺麗でも勉強出来れば文句は言われないわけだしょ？ おかげで下の学年の締め付けきつくなるつちゅうの。嫌になる」

若菜は、いつもはつくりと物事を言つ。嫌な物は嫌。腹が立てば全面に怒りを出す。それが、部内ではいいスペイスとなつているのも事実だ。

「だよね！ だからこのパーカーも怒られるの！ そんなに派手じゃないよね？」

千夏は、美香がそう言いながら絡めてくる腕をさりげなくかわした。一瞬にやっと笑つ

た美香が、自分のポケットに入っていたハンドタオルを手に取つて

構えた。

「覚悟！」

千夏もそれを見て、反射的に手に持っていたタオルを構える。

「ういん！」

独特の効果音を口にして、美香がタオルを竹刀のようすに千夏に振り下ろす。それを、千夏が、自分のタオルの両端を掴んで受け止める。タオルを小刀のように見立てた戦いだ。

その脇で、京子は未だお菓子に伸ばす手を緩めることはない。千夏と美香の戦いも、最近では誰も止めることがない。春休みに一人で見に行つたアメリカのSF映画で、主人公が使つていた剣の真似をするのが流行になつていて。意外と激しいその動きに、二人の息が上がる。

「ほら！ 早く行かないと怒られるよ！」

最後にはとうとう噴火した若菜の一撃で、誰もが首を縮めた。京子は食べるのを止め、

香織はスカートの皺を伸ばすのを止めた。祥子はそそくさと着替えを済ませ、千夏と美香もタオルをポケットに戻す。このメンバーで、こんなことを何田、いや何ヶ月繰り返してきただろう。今しか出来ないから……。そんなことは考えていない。ここが心地良い。誰もがそれしか思つていない。

メンバーがF-1を出ると、すでに他の部活は朝練を開始していた。体育館からも、隣のバスケ部が走る足音とかけ声が規則正しく聞こえてくる。

「あーあ。ヒゲ、いないといいね」

香織が体育館を見てため息を吐く。時間に遅れたら、後輩は何も言

わすとも顧問の怒り

を買う。小言どころか、余計な練習メニューが増えかねない。こつしてまた一日が始まる。部活が終わるのは夏だ。それまで受験勉強などやる暇はない。考えることは山ほどあるのに、悩む時間もないのだ。楽しい時間は早く過ぎるも、辛い時間はじわじわと浸食する。やはりこの一年だけは、千夏はゆっくりと過ぎていく気がした。

## 2 第一次戦争

入学式が無事に終わり、もう一度雨が降れば桜が全て散つてしまふと天気予報が告げた

頃。千夏が通う稻毛女子高校では、新入生歓迎会が行われようとしていた。文化祭同様、新入生歓迎会もこの学校の大事なイベントの一つだ。運動部は、夏休み直前に開催される総合体育大会まで部活はある。しかし、文化部はほぼこの新入生歓迎会の発表で活動終了となる。

参加するのは主に演劇部、吹奏楽部、ミュージカル部、他にも琴部や茶華道部である。普段目立つて見せる場のない文化部、そして演劇部とミュージカル部は、ここが最後であり最大の見せ場なのだ。特にミュージカル部の気合いは一塩で、宝塚並の化粧の技と歌唱力を發揮する。バレー部が使用する時、体育館の舞台上で練習している彼女たちの発声は、運動部より大きい声で歌う。そんなミュージカル部は、運動部にとっての最大の敵だった。せっかくバレー部に入ろうと入部してきた新入生まで、ミュージカル部の演技に魅了されてしまうのだ。おかげで、上級生は見学に来る生徒までもを必死に追い回して、集めなければならなくなる。確かに、ウエディングドレス同等の姿でスポットライトを浴びたいと思うのは仕方がないかもしれない。それに加えて、男役の三年生が綺麗ならばなおさら新入生が騒ぐのはお決まりの行事だ。千夏も、一年生の時に初めて一番前のパイプ椅子に座つてステージを見上げた時は、バレーのことなど一瞬頭から吹つ飛んだ。ミュージカル部に見学へも行つた。今では、なぜバレー部を選んだのかは覚えていない。しかし、千夏はこれでよかつたと確信している。不満があるとすれば、自分たちもこの時期に部活を終えたいということだけだ。

「おい。伊藤」

そんな歓迎会が行われる体育館に向かう途中、千夏は廊下を歩いて

いると聞き慣れた声

に呼び止められた。しかし、振り返るのも面倒くさい。相手も内容も、もう言われなくて

も分かつていい。隣を歩いていた美香は、名前を呼ばれなかつたのを良いことに、そそく

さと先に消えて行く。その背中を恨めしい目で追いかける。あれでは、この間の香織を同じではないかと顔をしかめた。

「おい！ 伊藤！ こっちへ来い！」

仕方なく肩を落として振りかえると、案の定やけにいたのは腹の出した阿部だった。得意

そうに蝶ネクタイを整える。大きな鼻をひくつかせているのは、奴の癖だ。まるで怒る材料となる獲物を、匂いで見つけているようだ。周りの生徒が、自分は関わりたくないとばかりに千夏の脇を通り過ぎていく。その中に、京子の姿もあつた。祥子と並んで歩いていたが、その手にはしっかりとジャムパンが握られている。京子の方が校則違反だ。千夏が文句を言つようと、唇を尖らせて京子に視線を投げても、阿倍の獲物はすでに決まつたらしい。一切他の人間を見ようとはしない。

「すいません」

阿部が怒る前に、千夏が頭を下げる。どうしても、身体がこの男を拒否してしまう。早

くこの場から立ち去りたかった。周囲にどう思われるかとか、恥ずかしいからとかではない。胃がきゅっと悲鳴を上げるほど、嫌悪感が体中を走るのだ。しかし、そんなに世の中は甘くはないようだ。

「なんだ。何が悪いんだ？ 言つてみろ」

千夏は頭を下げたまま、顔だけを上に向ける。上目づかいを通り越して、ほぼ白目にな

つてしまいそうだ。それでも千夏は、自分の姿を復習してみた。どこが悪いというのだ。

スカートは限界まで下げている。髪の毛も香織と違つて染めてないし、短いので結びよ

うもない。ネクタイも緩んでいない。マニキュアだつて、部内で禁止されておりしてない

い。他に思い当たることなどない。ほぼ白田になりそうな状態でもう一度、阿部を見上げ

る。香織のようにならと出来たら……こつもやつゆづ。しかし、実際に行動に移せないで

終わるのだ。頭の中で想像して、ああ出来たらどんなに気持ちがいいだろうと考えるだけ。

結局、腹に一物を抱えたまま。

「さあ……」

無意識に口から飛び出した言葉に、千夏はすぐに後悔した。

「校章だっ！」

やはりミスは犯していた。千夏が自分の胸元を見ると、そこににあるはずの校章バッジが

消えている。冬服ならばブレザー、夏服ならベストの胸元に付けることが義務づけられて

いる。自分が間違つていたにも関わらず、反抗心から言い返した。それが今度は恐怖へと

形を変えた。右手で、あるはずのポイントを押さえ、思い切り首を横に振る。安倍の睨み

つけてくる瞳を、もう見上げる事は出来ない。ただ何度も何度も首を振る。言葉はすでに消えてしまった。阿部は、何も言わずに無言の圧力をかけてくる。

電気を飛ばして攻撃してきているのではないかと思つほど、脳天が痺ってきた。このまま許して貰えるのだろう

うか。一瞬過ぎたその考え方、すぐにいつも消される。

「反省文だな」

そう言って立ち去る阿倍の姿を、最早千夏は呆然と見つめることしかできなかつた。反

省文はA4の紙一枚だ。どうしてその行動を取つてしまつたのか、理由と次回改善策につ

いて述べなければならない。教師陣は、それが大学に入つてからのレポートの練習にもなる

ると言う。一行少ないだけでもやり直しだ。しかし、それでは大学に行かない者達にとつ

てなんの練習になるのだ、と千夏は思う。大学へ行くことを前提として学校全体は回つて

いるのに、今を楽しめ、学べと言つ。どちらが正しいのか何が悪いのか。それを決めるも、

ここにいる限りは教師なのだ。  
千夏が人混みに紛れながら体育館前に移動していくと、そこにいたのはジャムパンを持つ

つていた京子の姿だつた。今度の教師は阿部ではなく、バレー部顧問の通称・ヒゲだつた。五十前後であろうこの男は、公立高校では珍しく十年もこの学校に赴任している。鼻の

下に有意義に伸びた髭は、いつも誇らしげに右と左へ器用に分かれている。髭の手には、

京子のパンが握られている。京子はそれを恨めしそうに見ていたが、千夏の姿に気づくと、

瞬時に泣きそうな顔へと変化した。おそらく京子も反省文だ。さつきのお返しだとばかり

に、千夏は含み笑いだけを残して京子の脇を素通りする。

体育館の中は、まだ春だというのにむしとした暑さで覆われていた。新入生に対しての

祝辞や案内は、すでに入学式で済ませてある。この新入生歓迎会の

内容は九十五パーセン

トが部活の関係だ。席も唯一自由に座れる時間であり、バレー部のメンバーも当たり前のように一番後ろの列に固まっていた。千夏の姿を見かけた若菜が手を振っているのが見え

た。窓も全てが閉じられ、暗幕のカーテンが引かれているのでその中はほぼ真っ暗だ。今

だけ、友達を捜すことや移動のために半分ほど電気が付けられる。若菜の隣で笑つている美香に向かつて唇を尖らせながら近寄ると、千夏はその隣の空席に腰掛けた。

「まあ怒られていたんだって？」千夏

若菜が、美香の隣から声を掛けた。その声に心配の色はなく、呆れを含んでいたのに反

論したくなる。

「だつて！ あたしは悪くないのに。色々なことに細かすぎるんだよ、あいつ。美香は逃げるし」

当のその美香は、両手で耳を塞いで聞こえない振りだ。その姿を見て、一瞬吹き出しそうになる。美香の頬を軽く抓つていると、千夏の前の席に座つていた人物が振り返った。

「千夏さ。なんかしたんじやないの？」絶対阿部に睨まれていてるよ」茶色の長い髪が、カーテンの隙間からうすら入る光で輝いている。「香織……。ねえ、ちゃんとこの間の反省文書いた？」

当たり前でしょ、とばかりに香織は肩を竦めた。上手くこなしてい

る彼女を見て、また

胃がきゅっと縮む。ため息が漏れた。

「そりゃ、京子が体育館の外にいた？」

香織の隣に座る、祥子も振り返る。こうしてバレー部で固まる時、

大体三人ずつ一列で

並ぶことにしている。そうすれば、六人で一列に並ぶよりみんなで顔を見て話せるからだ。

「ああ。なんか入り口のところでヒゲに捕まっていたよ。ジャムパン、あの子なんで持つていたの？ しかもあんな分かりやすくて」

千夏が言つと、ふふふ、と祥子は笑つた。その間延びした笑い方に、自分で笑みが漏

れる。何何？と聞くと祥子が答えた。

「この歓迎会、案外長いでしょう？ 途中でお腹がなると恥ずかしいから、鳴りそうになつたら食べるんだってー」

京子らしいではないか。京子も怒られてはいるのだから、よしとするか。この敷地の中で

は、怒られて初めて同罪なのだ。

「でも、そんなにお腹が減るのも凄いよね。朝練の前にお菓子食べてさ、休み時間の度に

お弁当つまむんでしょう？ お皿には購買でまたパンを買って、夕方の部活の前にまたお

菓子を買いにコンビニに行くじゃない。それで、部活終わって一日の残りのお菓子を平ら

げる。家へ帰つて、ちゃんと夕飯食べるつていうんだから驚きよ」

若菜が、先程千夏に対してのと全く同じ口調で言つた。片手を使って京子の食事の回数

を数えている。

「つうん、それだけじゃないよ。寝る前にも少し食べるつて言つていたよ」

香織が、鋭く指摘する。若菜は、口をあんぐりあけながら指を一本増やした。

「ひえー。それで暇があればモテルだもんなー。羨ましいー！」

美香はそう言いながらブレザーのポケットから小瓶に入れた香水を取り出し、手首に吹きかけた。シユツと小さな音がしたあと、暗がりに霧が舞う。すぐに鼻を甘い匂いが掠めた。

「美香。こんな密閉空間ではやめてよ。……まあ、七月の京子の誕生日にはとりあえずありつたけの食べ物をあげようよ。そうすれば、あんな風にジャムパン持つてわざわざヒゲに怒られなくて済むよ」

香織が言うと、隣で祥子が再びふふふ、と笑みを漏らした。

「あたしが思うこと、お腹の問題だけじゃないと思つた」

「え？ 何、どうこいつこと？」

千夏が祥子に身を乗り出した時だつた。千夏の頭に重みが加わつた。

「何の話をしているの？」

その声に、千夏が首を上に向けると、やけにパンを取り返した京子の姿があつた。顎

を千夏の頭に乗せたようだ。先程見せた泣き顔は、どうやらその場限りのものだつたらし

い。笑顔でその袋を破こうとしている。

「あ、なんだ。取り返せたんだ」

千夏が京子の手に取つたパンを指さすと同時に、その袋は破かれ

た。空気の破裂音で、

前に座つていた数人が一瞬振り返る。京子は、前の列にいる祥子の隣に座ると、ジャムをたっぷりとお腹に入れて膨らんだそれにかぶりついた。手でちぎつて食べるような上品ではない。しかし長い足を組むと、それだけで様になつて見えた。

「ヒゲがね、すぐに食べちゃえつてさ。すぐだと意味ないんだけどな

「えー！ 反省文は？」

京子の全く罪の意識のない言葉に、千夏が食いついた。

「ううん。書かなくていいって。で、何の話をしていたの？」

「そんな。……オスカー・ワイルドによれば、世界はひどい配役の舞台だつて話をしていたよ。」

「たのよ。」

千夏は、自分が書くことになつたことで、一旦忘れたはずの怒りが再燃してきた。

誰もが自分だけに厳しくしている気がしてしまつ。しかも、よくよく思い出せば、校章をはずしたのはおそらく母親なのだ。千夏は、悔しくて両足で床をばたばた蹴つた。

「あー、千夏うるさい！ 美香！ 香水臭い！」

若菜がまた文句を言つ。

「世界はひどい配役つて今からの舞台のことへ 千夏の文学世界のこと？」

口をモグモグさせながら京子が言つ。

「後半の方」

千夏が黙っていると、香織がすかさず答える。なぜか腑に落ちない気持ちを胸に抱え周りを見る。校則に対しても文句を言つている者、これからのお出し物にすでに興奮している者。隣同士の席でじやれ合う者や、眠っている者までいる。顔の上にタオルをかけていること自体、この会に参加する気がないのは明白である。しかし視界の隅では、数人が参考書に目を落としているのを見逃さなかつた。こういうところで差が付くのだろうか……。ふと過ぎた考えの怖さに、千夏はそれを振り払うように頭を小さく振つた。しかし、千夏はただ部活のメンバーと楽しく絡んでいることが無性に不安で仕方がなかつた。そして、静かに電気は消された。

\*

「あー。今日は楽しかったね」

春とはいえ、夜になるとまだ少しだけ肌寒い。いくらタオルで汗を拭き取っても、風が吹くと特に背中がひんやりする。このせいで風邪を引くこともあるくらいだ。部活が終わり、駅までの道を千夏は香織と一緒に並んで歩いていた。いつもより早い時間に部活は終つたので、同じ時間の電車に乗るには歩くスピードもゆっくりで大丈夫だ。余裕があるからといってどこかの店に寄つて買い物をするも、その電車を逃す恐れがあるので、まっすぐ駅に向かうのが二人の中で暗黙の了解となつていて。

「うん。でも見た？ A組の平野さん。あんな暗い体育館の中で、ずっと参考書を見ていたんだよ」

今日行われた新入生歓迎会は大盛況だった。バレー部は観覧する側なので楽だったが、いつのまにか夢中になり私語をすることもなかつた。特にミュー・ジカル部は圧巻で、当分千夏達は新入部員集めるに走り回る日々を送るはめになるだろう。それでも、普段座っている机と椅子から離れる平日を送れるというのは、浮き足立つものだつた。普段眠くなる時間も、あつという間に過ぎていく。それを好む者と好まない者。一通り生まれるのも仕方のないことだ。香織の言葉に千夏も頷く。

「見たよ。あの子いつもそういうじゃない？ セツカく勉強しなくていい日なのに。だからあんな虫眼鏡みたいに厚い眼鏡しているんだよ」千夏が、自分の目の回りに親指と人差し指で眼鏡に似せた輪を作る。朝は、ほとんどオーバーストスをして歩く香織も、部活後にそんな気力はないようだ。帰る時間も常に真つ暗だ。街灯の明かりだけでボールを追うよりも、おしゃべりに花を咲かせた方が得である。

「でもさー。文化部は、これでみんな終わりなんだよね」

ふと、千夏が放つた言葉で沈黙が流れた。今日で学年のほぼ三分の一は部活を終えることになるだろう。残り三分の一が部活を続けても、ほとんどが四月には大会を済ませるのが通例だ。最後まで残

るのは、バスケ部とバレー部。こんな事実を、入部するときは考えたこともなかつた。もちろん上級生が言うわけがない。千夏達も、ただでさえ文化部に取られがちな新入生を確保するために、いいことしか言わないのだ。暗闇とともに、妙な圧迫感が訪れる。受験勉強に励めという教師。上がらない成績。知らぬ間に過ぎていく日々。半年後のことを考えるだけで、吐き気がしそうだ。進路なんて、誰も教えてはくれない。自分で選ぶしかないのだ。正解もないのにどうやつて選べといふのだ。間違つたら、失敗したらと考えるだけで怖くなる。なぜ怖いのだろうか。親を悲しませる。教師の冷たい視線に合う。違うだろう。そこで人生が終わつてしまつ錯覚に捕らわれるのだ。そして、自分のふがいなさを知るのが怖いのだ。いきなり学年が上がつたからと言つて、将来何をするかなど決められる訳がないではないか。今でさえ、想像するだけで膝が震える。

「ねえ、あたしの後ろに何かいない？」膝らへん

おかしなその沈黙を壊すように、千夏が言つた。一瞬顔をしかめた香織も、ボールを右手で抱えると、くるりと回つて千夏の後ろを確かめた。膝を曲げてかがむ。じつとその位置を見つめた後、千夏に向き直つて言つた。

「何もないよ？ なんで？」

香織は、素早く周囲にも目を走らせる。ここには大通りとはいえる女子生徒が多いことが災いして不審者は頻繁に出るようだ。香織がボールを構える。彼女なら誰かに向かつてその場ですぐスパイクを打つことくらい厭わないだろう。

「ううん。なんかね。膝ががくがくするの。もしかしたら、何かが膝を掴んで無理矢理動かしているのかと思って」

千夏の言葉を聞いた香織は、一瞬目を見開くと、すぐに大きな声を上げて笑つた。冗談だと分かつたのだ。

「何かつて。膝を触る奴がいたら間違いなく変態だよ。それにすぐ気づくつて！」

「そうかなあ？」

千夏は、想像以上に香織が笑ってくれたことに安心した。空気が元のように柔らかく和む。

「ねえ、たとえば。膝のところにいたとしたら何だと想つ?」

香織がそう言つた時、稻毛駅が見えてきた。この時間になると、背広姿のサラリーマンが酔つて駅をうろついている。

「そうだなあ。たとえばね、いつでも。お腹を空かせたりとか。この靴下を噛んりして、つぶらな瞳で見上げてくるの。あー絶対なんか買つてあげちゃうな」

「ふーん。他には?」

香織は、本当にしあわせを探すように、辺りに視線を走らせる。

「うーん。怖いけど、おじさんの幽霊とか。おねーちゃん、助けてくれ……とかといって膝にしがみついてくるの。髪がほとんどなくて顔もしわくちゃで、目も飛び出しているの。口から血とか垂らしながら……」

「あー！　いい、いい！　もう言わなくていい！」

香織は怖い話が苦手だ。しかし、苦手なだけで嫌いなわけではないと千夏は信じてこる。

学校で合宿をすると、一番に肝試しをやるひとつ言つ始めるのも香織だ。そしていつの間にか姿を消してしまつ。

「もー。今日の夜寝られないかも……。いないよね？　本当に」千夏に靈感などあるはずがない。しかし、責任は取るべきだと思った。これで眠れない

と、明日の朝一番に反撃にあつはずだ。

「うん、いない」

そう言つと、若干香織も落ち着きを取り戻したようだ。ほつと息を

吐き、長い髪を撫で

つけた。部活の時には一本に束ねているその髪には、朝にはない結構  
んだ跡が残っている。

それが彼女に言わせると、鼻毛が出ているより気になるものらしい。  
駅に入ると、同じ制服を着た女子が、集団で笑いながら千夏達を追  
い越していった。部

活だったのだろうが、見たことの無い顔だ。駅では、夜も同じ制服  
を見るることは少ない。

運動部は他の生徒より時間がずれている上に、自転車通学の割合が  
高いのだ。改札口を

入り、エスカレーターを昇る。彼女達と千夏は同じ制服を着ている  
のに、見た目では同じ高校とは分からぬほどの差だ。彼女達が二  
年生なのはネクタイの色で分かる。学年が上がる毎に変わるものでは、  
千夏達は最後の青を付けている。彼女達は赤だ。帰りは、検査をさ  
れることもないので、千夏達バレー部は思い切り今時の女子高生に  
変身する。流行の靴下に履き替え、スカートの裾を短くする。香織  
は、電車に乗るというだけで軽く化粧をするときまであるほどだ。  
電車で恥ずかしい思いをしたくない、という気持ちは千夏にも理解  
できた。学校にいるとその世界に染まってしまう。女子校ゆえに、  
それが居心地よく感じられる時も多々ある。しかし、それだけでは  
外の世界に向かっていけはしない。この世代だからこそ、周りから  
遅れを取る、それだけで恥ずかしいことだった。一定の位置を保た  
なければならぬ。それがプライドであり、羞恥心だった。それな  
のに、前を歩く後輩は、スカートも学校にいるときと同じ長さなの  
だ。膝下三十センチはあるだろうか。あんなもので歩いていて恥ず  
かしくないのかと聞きたくなってしまつ。彼女たちを見て、自分た  
ちまでださく見えてしまいそうだ。案の定、ホームに上がった途端、  
同じ駅を使用している他の学校の女子生徒が後輩を指さして笑つて  
いる。そのあとに続いた千夏達にも視線を投げてきた。自分たちの  
高校は好きだ。しかし、それと今は別問題だ。恥ずかしいという感

情も、千夏には劣等感を巻き起こすストレスでしかなかつた。香織も気づいたようだ。まっすぐに前を見ながら、小声で言つた。

「やつぱり……なんとなく最悪だね」

しかし、香織の聲音にはどこか客観的な響きがあつた。本当に今 の状況を悲しんでいい訳ではなく、他人を哀れんでいるような感じ。「うちの高校ださいからね。何かもが阿倍のせいよ。でも、こんなときはシェイクスピアの言葉を思い出すのよ。今が最悪の状態だと思える間は、まだ最悪の状態ではないってね」

千夏が言うと、香織がふっと頬を緩ませた。他校の女子生徒に挑戦するように、ボールを地面につく。しかし、それも駅に電車を知らせるアナウンスが流れ、駅員がやつて来るのを見ると手を止めた。再びボールを胸に抱え、香織が聞く。

「千夏はさ、なりたいものとかあるの？」

歓迎会の間中、千夏はそればかり考えていたのだ。最近では、教師がホームルームや授業の合間に自分の体験談を語る。どれも、誇らしげに。それを羨ましく思う一方で、ばからしくなる。教師になつてているのだから、成功者の話に決まつているのだ。どれだけ安定しているかの問題ではなく、社会的地位を守つていてのことだ。千夏はその話を聞く度に無意味に思えた。成功者の話だけを聞いていて、いざ失敗した時にどうすればいいのだろう。それならば、失敗した時の対処法を伝授して欲しかつた。何事も心構えが必要だ。しかし、周りに同じ考えのものはいないようだつた。教師の話をメモにしたり、熱心な生徒は同じ大学への進学も希望した。千夏は分からなかつた。自分は何をしたいのだろう。どう進むべきなのだろう。どんな価値があるのだろう。香織の言つた言葉に、思わず全てを見透かされていたようで驚く。瞬きを繰り返しながら、首を横に振つた。

「ううん。特にないから困っちゃうんだよね」

答えた瞬間、サラリーマンらしき集団がホームに駆け上がつてきた。十人ほどのその集団は、電車が来ていないことに対する喜びの歓声を

上がる。彼らも酔っているようだ。しかし、少なくとも、自分の進むべき道をすでに見つけている人間達だ。迷っているのかもしれない。満足はしていないかもしれない。それでも、踏み出している大人だ。

「そつか。じゃあさ、前から思っていたんだけど。そういう空想癖つていうか……。あ、勿論いい意味でね。そういう文学的な力を伸ばせる大学に進んだら面白いと思つよ」

香織は、いつも千夏のことを聞いてくれる。千夏は、自分で分析するよりも、香織のほうが自分を知っているような感覚に捕らわれた。

「そうなのかな。自分でも何がしたいのか、向いているのか分からなくて。でも、考えてみるよ」

千夏が言うと同時に、ホームに電車が滑り込んできた。その勢いで、風が巻き起こる。結局はいつもの電車である。香織はここから東京方面へ上り、千夏は千葉方面へと下る。電車の中から出てきた人が、ちらつと香織に目を遣るのを千夏は見た。彼女がボールを持つているからではない。それだけ、香織は一目を引くのだ。香織を見た人物が、自分を見ないことに千夏は以前から焦燥感が起つた。時たま五人に一人ほどが千夏を見たとしても、それは香織と比べる値踏みの視線でしかないのだ。卑屈な感情が沸き上がるのをぐつと堪えると、千夏はもう一度大きく頷いた。

「ありがと。また明日ね！」

逃げるようにして電車に飛び乗りホームを振り返ると、香織は手を振っている。同じよう

うに振り返し、開いている座席に座るとすぐに向かいにも電車がやつて来た。人混みに紛れ、香織の姿が見えなくなる。もう一度その姿を見ることなく、千夏の電車は静かにホームを発車した。髪を撫でると、千夏にはじつと疲れが押し寄せた。

この快速電車で三十分。

しばらくは寝ることに決める。香織の顔と先ほどのアドバイスが脳裏に蘇った。まだ進路など考えていない。その前に勉強も出来ていない。スタートライコンにたつてもいないので、方向を決めることが可能なのだろうか。……あの子は、なりたいものがあるのかな。その答えを探せぬまま、千夏は心地よい揺れとともに、眠りについた。

千夏が家に着くと、すでに家族は食事を終えたところだった。玄関のドアを開けた時から、カレーの匂いが鼻をくすぐった。京子と同じように、たとえ帰りに買い食いをしても夕飯は食べられるだろう。しかし、同じように太らないわけではない。よつて我慢して帰つてくると、家の台所に座る時には飢え死にしそうなほど空腹なのだ。今日も玄関で靴を脱ぎリビングへ行くと、食事を終えた父親がソファで新聞を読んでいた。母親は食器を洗つている。

「ただいま」

その背中に声を掛けると、母親は顔だけ振り返つて言った。

「遅かったわね。早く食べちゃいなさい」

「うん。カレーだ。チーズ入れて」

鞄を床に放り投げ、制服のまま椅子に座る。どうせすぐにお風呂に入るので、この方が

効率がいいのだ。テーブルに置いてあるスプーンを持ち、ご飯が出てくるのをじっと待つ。

「なんだお前、部活はいつまでやつているんだ?」

背中から聞こえたその声に、千夏は聞こえない振りをした。今春高校を卒業した一つ上の兄は、驚くほど秀才だった。高卒の父、短大卒の母から生まれたとは思えないほどの

その出来映えに、両親は躍起になつて英才教育をした。それが間違つていたとは思わない。

しかし、千夏は自分がどこにでもいる標準の子供だと思っている。

しかし、両親の中で

は兄も千夏も子供なのだ。子供、イコール同じといつ考へだ。兄は

自分たちの右の肺、千

夏は左の肺、そんな感じ。代わりも効かないし、大事なもの。それでいて、一つとも同じ

動きをして当たり前だと思つてゐる節がある。いつからか、千夏はそんな父親と距離を置くようになつた。

父親の方からこうして声を掛けでは来るが、返答をしなければ再び同じ事を聞かれるこ

とはない。それで良かつた。千夏なりの小さな主張だつたのだ。兄と自分は別々なのだ、

と。兄は決して反抗もしないし、聞かれたことに忠実に答える。それが邪魔でさえあつた。

なぜなら、千夏が両親に返事をしないと兄が怒るので。そんな兄も大学近くに下宿するた

め、この家を出ていった。これからは自由にテレビを見られる。文句を言われないだろう

と喜んだが、その時までは考へてもいなかつたのだ。これからは、両親の目が自分だけに

集中するのだということを。両親の田はある意味では広がり、一方では狭まつた。兄を通

して大きな広い世界を見る夢を抱き、田の前の千夏に今度は焦点を定めたのだ。家族全体

の歯車は、違う回り方を始めた。しかし、個々の関連性は変わらないと思つていたのだ。

それも甘かつたようだ。

今日も同じように父親はもう何も聞いてこないと思つた。しかし、母親が意味ありげに

千夏の後方へ視線を投げたのだ。それに気づいたが、振り返ること

などしない。

「おかーさん、あたしの制服いじつたでしょ」

田の前に出された湯気の上がるカレーをスプーンですくいながら、千夏は言った。テーブルの下では、右足の親指を器用に使い、左足の靴下を脱がせる。くるくると丸まつたそれが床に落ちた。次に反対もやる。靴を履いて蒸っていた足が、呪縛を取り払われて爽快感に浸る。固まつたその指を、順番に曲げて骨をならす。行儀がいいとは言えないが、気持ちがいいのだ。床に落ちた靴下を、千夏は廊下へ向かつて勢いよく蹴飛ばした。それは吹っ飛んでぱらぱらな位置に落ち着いたが、それでも見事な空中飛行だつた。軽くそれらを一警すると、カレーをまた一口含む。

「いじつたつて……。アイロンをかけたのよ。千夏、あなた学校でブレザーをどう置いているの。背中が皺になっちゃつていたじやない」

母親は、洗つた食器を今度は布巾で拭き始めた。そして、渋い顔をしたかと思うと、汚い靴下を拾いに廊下へ行く。戻つてくると一旦手を洗い、今度は冷蔵庫からサラダを出してくれた。それを、同じスプーンでつつきながら、千夏は声を荒げた。

「もー！ 校章取つたでしょーー！ 今日生徒指導の阿部に怒られたんだからねーーー」

思い出した怒りを込めて、スプーンでサラダの皿の端を叩く。レタスの上に乗つっていた小エビが、逃げるようにテーブルの上に跳ねた。それを手で拾い、口に放り込む。

「あら、付けなかつたかしら。『めんなさいね』

首を傾げてとぼけるような仕草をとつたのが、千夏の癪に障つた。スプーンをテーブルの上に放り投げる。今度は両手でテーブルを叩いた。ここまですることは初めてだつたが、じつと座つて話していると、発狂しそうなほどに苛々した。とにかく、ぶつける相手が欲しかったのだ。

「もう！ 勝手に触らないでよー！ 阿部に怒られるのは、あたしな

んだから。やるなら最後まで確認してよー！」

千夏の怒りを受け取った母親も負けではない。皿を両手で持つたまま立ち止まつた。しかし千夏と異なるのは、その声はどこまでも冷静だ。意識的に怒りを静めているのだ。それが千夏の言葉をより過激にさせた。

「それなら、あのシワシワなブレザーで学校へ行くの？ 電車に乗るの？ みつともない。触られたくないのだったら、自分で言われる前にやりなさい」

「なにそれ！ 賴んでないのに勝手にやつておいてその言いぐせー。頭に来た！ もういい……。一度と触らないで！」

千夏は半ば叫びながら皿を持ち、口にそのまま付けてカレーを流し込む。……これはいつものことだ。言い合ひをして、しばらくすればお互い……少なくとも千夏のほうはそのことを忘れ、また綺麗に整えられたブレザーを着て学校へ行くのだ。何を言つても家なら許される、そんな安心感が千夏にはあった。

「……千夏。部活は、いつまで、やるんだ」

先ほどよりもゆっくりと、しかし少しだけ大きくなつた声で父親は言つ。千夏がやつと振り返ると、父親は新聞から顔を出し、まつすぐに彼女の背中を見ていた。こんなことは初めてだ。眼鏡の奥で光る目に真剣さを感じたが、部活がいつ終わるかなど母親が知つてゐる。あとで母親に聞いてくれ、とばかりに千夏は無言でテーブルに向き直つた。サラダに乗つた最後のトマトに手を伸ばした時だつた。

「父親が聞いているのになんて答えない！」

家が揺れた……気がした。爆音がリビングに響き、一瞬、確かに身体が浮いたのだ。それが驚いて自ら飛び上がつたのかは、千夏にも分からなかつた。ただもう一度、そろりとリビングを振り返ると、そこには顔を真つ赤にして立ち上がりつてゐる父親の姿があつた。

部活を終え、外に出た時は別の意味で背筋が冷えた。飲み込んだばかりのカレーが逆流してきそうだ。慌てて喉をぐつと閉じてそ

れを押し戻すと、千夏は小さく咳払いをした。「おいつ！　聞いているのか！」

今度は、確かに揺れた。間違いない。千夏は、思わずリビングの電気を見上げた。部屋の中央、テーブルの真上にぶら下がる花の形をした洒落た電気の傘が微かに揺れている。改めて、ぶるつと身体が震える。

「お父さんっ」

母親が止めに入ろうとしたが、父親は最早制御不能だ。一直線に千夏に向かってくると、その顔に新聞を投げつけた。千夏は自分の顔を庇つたが、新聞の先が鼻に刺さった。

「お前は、帰ってきて、何をした？　すぐそこに座り、靴下を放り投げ、ただただ飯を食べるのか！」

父親は、少しづつ顔まで近づけてくる。一言言葉を発する度に、頬や額に唾が飛んで来たが拭う余裕はなかつた。父親は叫ぶだけでも足りないのか、もう一度手に取つた新聞を床に投げつけ、側に置かれていた雑誌をテーブルに叩きつけた。カレーの皿にそれが当たり、皿が吹っ飛んだ。殴られる……本当にそう思つた。身体が縮こまる。しかし、父親の声は、今度は押し殺したように低く小さかつた。

「それで、聞かれたことにも答えられないのか。校章がなくて怒られただと？　玄関を出る前に、自分で確かめる。アイロンくらいかける。弁当も作らず、食器も洗わず、何をしているんだ」

「ごめんなさい……。そう謝るべきなのに、千夏の口からはその一言がどうしても出てこない。開いた口が塞がらないとは言つけれど、なぜ誰も閉まつた口が開かないとは使わないのだろうか。父親の怒りの形相を見上げ、そんなことをぼんやり考える。千夏の口は、まさに開くことを怯えていた。父親の視線を避けるように思い切り顎を引き、胸の辺りを凝視した。頭なら殴られてもいい。そんな決意を込めていた。しかし、父親は思いに反して何もしなかつた。それだけではなく何も言わないのだ。ただ、鋭い視線だけを感じる。じつ

と見下ろされたるくらいなら、こつそ一発殴つて終わりにしてくれ。そう思つた。一度そう思つと、今度は不思議なくらい冷静になれた。

口が開く。

「……殴りたいなら殴れば?」

「ごめんなさい、その一言があんなにも口の中でも凝固してしまったのに、樋突く言葉は簡単に飛び出してきた。心中だけで言つたつもりだった。しかし、目の前に立つ父親の顔が一瞬ぐにやりと変形したのを見て、千夏はそこで初めて声にしていたことに気づいた。

咄嗟に両手で口を押さえて母親を見ると、肩を震わせ首を激しく左右に振つている。それ

を見て、さらには血の気が引く。何を言われたのか吸収するのに時間がかかった父親に、血の巡りが戻つたようだ。その大きな口がゆつくりと開かれた。千夏は、耳を塞ぎたい衝動に駆られたが我慢した。

「なんだとおおおお！」

もしも、ここが千夏の家ではなく山だったなら、間違いなく木霊が返つて来ただろう。

怒鳴り声が続くかに見えたが、その次に父の口から出たのは冷静静な声だった。

「母さん、明日から弁当を作らなくていい。洗濯もするな。余計なことを一切止めるんだ」

怒鳴られたほうがマジだった。事態がどんどん悪化していく。何か、父の機嫌を取れるものが転がっているのではないかと家中に目を走らせたが、綺麗に整頓されたリビングに

そんなものは見あたらなかつた。それだけ言つと、父親はじつと千夏を見下ろした。

阿部だ……。この家にも阿部がいる。父親も阿部と変わらない。嫌がらせをするために

怒っている。そう思つと、普段学校で抱えている鬱憤まで吹き出し

そうになつた。ただ、それを口にする勇気はもつなかつた。阿部に言えないのと同じだ。

「なんだ、その田は。……はあ、お兄ちゃんはもつと素直でいい子

だった」

父親の口から漏れたその言葉は、千夏の限界を飛び越えた。一気に瞳に膜が張る。昔か

ら、あんたはそやつて兄妹を比べてきた。そんなにお兄ちゃんが大事なら、いますぐ東

京へ行つてしまえ。田で訴えよつとしたが、それは涙で一杯になつた。目玉を上に上げて

堪えようとしてもすぐに溢れてくる。反論出来ないことも兄と比べられることも、今の状況に不安を感じていることを分かつてもりえないのも、全てに苛々して悔しかつた。

「……もういい

諦めるように呟くと、千夏は残りのご飯も放り出して廊下へ飛び出した。あれほど心地

よかつた床の冷たさも、今では足を冷やす意地悪な家でしかなかつた。母親の引き留める

声と、それを制止する父親の声が追いかけてくる。床に投げてあつた鞄を胸に抱え、出来

るだけ反抗心を見せよつと、階段を大きな足音を出して駆け上がつた。一階に上がつてすぐ手前の部屋に駆け込むと、勢いよくドアを閉める。しかし、そこで鳴つた音など、先ほ

どの父親の怒鳴り声に比べれば大した物ではなかつた。

「あたしは悪くないのに……」

千夏は、あふれ出した涙を拭つゝもせずに、ただ床に倒れ込んだ。

### 3 第一次戦争

「で？ どうしてそれで今、髪が濡れているわけ？」

香織は、朝練前に部室で髪を乾かす千夏に聞いた。すでに、他の部員は一足先に体育館へ向かた。香織と千夏だけが残された部室には、相変わらず生徒の声があちこちから聞こえてくる。それが学校のいとこりでもあり、迷惑な点もある。朝、一番乗りだった千夏の髪の毛は今も濡れていた。他のメンバーを体育館へ促すと、香織はすぐに口を開いた。

昨夜、駅で別れた時には笑っていた千夏の顔は消えている。その代わり、普段より二

倍に腫れた瞼と濡れた髪だ。何かあつたに決まっている。

「だからね、お父さんと喧嘩したの。あの人にきなり怒鳴つてさ。あたしが何をしたの？」

腹が立つたから、一階に上がつて朝まで一度も下りなかつたの。何度も部屋の外からお

母さんが呼んだけど、無視。おかげでお風呂に入れなかつたつてわけ。朝もすぐ飛び出

して來た」

「それで、ここでシャワーを浴びたのね？ ……大人しく謝れば？」

香織は、相変わらず自分専用のボールを胸に抱きながらさらりと言つた。タオルで頭をこねくり回していた千夏が、素つ頓狂な悲鳴を上げる。

「嫌！ お弁当だつてどうにでも出来るし、洗濯だつて機械がやつてくれるもん。文句

を言われないんだつたらそれくらこやつてやるわよ。それで、我が家

家の阿部を見返しちゃるわ」

「我が家阿部つてお父さんのこと？ あ、そういえば千夏、反省

文は書いたの？」

「……あ、忘れていた。でももひいいや、行こうよ。腹の立つことばかり思い出したくない。今は来る者はなんでも来いつて気分」  
千夏は、ほとんど乾いた髪をふるふると左右に振ると、部室のドアを開いた。香織が頷くのを見て、すぐに出していく。香織は、そんな千夏の後ろ姿を見て羨ましくなった。そんな風に喧嘩を出来る家族の元に生まれたかった。喧嘩をしてみたくて教師にふっかけるも、それはなんなくかわされてしまう。本氣で言い合える親が欲しかった。香織は、部室を出る時、自分の鞄の中に目を遣った。刑事になるための参考書。香織もまた、進むべき道に迷う女子高生だ。  
体育館へ香織が行くと、すでにスパイク練習が始まっていた。脇でスクワットをしている千夏に駆け寄り、無言で同じことをする。  
「そういえばさ、昨日駅で帰り聞けなかつたんだけど。香織は？夢、あるの？」

スクワットをやるといつもそうだ。膝が痺れるように痛む。香織は冷却スプレーに伸ばしていた手の動きを一瞬止めた。千夏を見ると、彼女は腫れた瞳を擦っている。何かを考えて発した言葉ではないようだ。スプレー缶を取り、力強く振る。仲間内ではふざけて力クテルを作るよう振る時もあるが、朝からそんな元気はない。蓋を開けると、膝に吹きつける。一瞬顔をしかめるほどの冷たさが襲うが、徐々にそれが快感へと変わる。小さな白い円を作り、すぐに溶けてなくなる。

「あるよ」

香織は一言だけ告げると、スパイクを打つ列に加わった。レフトアタッカー、つまりチームの中で最大の攻撃力としての役割を担う香織は、夢がある。誰にも言ったことがない。

学校面において香織は周りの人間より不満が少ないだろう思つてゐる。確かに、教師はうるさい。髪を染めれば追いかけてくるし、スカートを短くすれば反省文だ。面倒臭くもあるが、毛嫌いするほどの憎悪は沸いてなかつた。上手くかわそうと思えば出来るし、な

により学校でくらい怒られてもよかつた。香織には、それよりも大きな問題があるのだから。

「香織。香織！」

何度目かに名前を呼ばれてはつとする。ネット際中央にいるセッターがあげたボールは、数メートル上空をレフトへ綺麗に円を描いていた。気づいた時にはボールは床に落ち、中央へ転がる。それを後輩がすぐに拾ってくれた。出遅れたことでタイミングを失ったのだ。

試合だつたら、これで一点失う致命的なミスだ。

「すいません！ もう一本お願ひします！」

たとえ同級生でも練習中は同志だ。ミス一本も試合で頼つて貰うためには重大な過失になる。走り込む構えの姿勢になると、後ろに並ぶ京子が声を掛けてきた。

「どうしたの？ 大丈夫？」

香織は軽く片手を上げてみせると、次に上がったボールへ足を大きく踏み出した。右足、

左足を交互に出す。イチ・二・サンで踏み切る。両手で身体をより上へと持ち上げ、思い

切りジャンプする。ジャンプと同時に、右手を後方へ引くようにして振り上げ、ネットの

上有あるボールを目がけてスwingする。振り上げる時に曲げていた肘を、振り下ろす

瞬間に真っ直ぐ伸ばす。引き締めた掌で、狙いを定めてボールを打つ。打つときは顎を

引き、目だけがその行方を追う。しかし、ボールがどんな反応をするのかは、掌に当たつ

た瞬間に分かる。レフトから打つボールは、大体が向かいコートの右端を攻める。それより有効なのが向かつて左のサイドラインぎりぎりに打つことだ。ブロックも止めにくく上

に、相手レシーブの死角になりやすいのだ。その攻撃には高度な手首の返し方と、身体の捻りが必要になる。今、香織が打ったボールは、相手コートのレフト側へ飛んだ。それも

回転速度を増したまま、宙を突き抜ける。床にバウンドすることなく壁へと突っ込んだ。

周りでボール拾いをしている数人の部員から小さな悲鳴が上がった。

「ごめん！」

香織はネットの下部分をくぐり、壁に当たりバウンドして戻ってきたボールを拾う。ス

パイク一つでも、精神の状態はプレーに反映する。今のは失敗だ。しかし、もう身体が覚えている。スパイクで飛ぶあの瞬間が心地いい。まるで鳥になったようだ。手が羽になつたように舞い、ボールを打つ。手にしつかりと収まった感触、コートに降り立つた時に決まるボールの音。周りのかけ声。試合だと、相手のレシーバー自分が打ったボールを拾えなかつた時、堪らない優越感が襲う。自分の周りに集まるメンバー。喜びの感情。自然と声は大きくなる。

周りの部員は文句を言つ。休みのない練習日。休憩のない練習時間。指導が細かい顧問。

そのどれもが、香織にとっては問題ではなかつた。むしろ、休みなどないほうが暇にならなくていい。口うるさく教えてくれる顧問は有り難かつた。家には、そんな風に香織を指導してくれる人物がないのだから。

「危ない！」

またもや複数の声に香織がコートを見ると、京子がスパイクを打つ直後だった。そのボールは、一瞬で香織の顔の目の前に飛んできた。バレーの中で一番の欠点だが、香織は瞬発力が低い方だ。もろにそのボールを顔で受け止めると、呻き声が漏れた。周囲の後輩も息を飲んだ。香織の顔に直撃したボールは、まるで怒られるとでも思つたかのように打つた人間の元へ跳ね返つていつた。京子がそれ

を拾い上げる。

「ごめん！ 香織、大丈夫！？」

細身の割に、京子が打つバイクも上等だ。香織の顔中が痛むが、直撃した口当たりは酷く、しばらく呂律も回らない気がした。

「だいじょうぶ」

かろうじてそれだけ言つと、少しだけ微笑んで香織は「一トを出した。やはり胸に何かが支えていると、どこかでミスをする。バイクを上手く打てないだけでなく、注意力も散漫だ。香織はため息を吐くと、壁に寄りかかるようにして座り込んだ。舌で唇を舐めると、微かに血の味がする。

「溜め息なんて吐いてどうしたの。さっきのバイク凄かつたね」香織が顔を上げると、隣に若菜が腰を下ろした。もう疲れたのか、膝にはめていたサポートをくるぶしへ下ろす。

「あたしにも悩みはあるんだよね」

「香織に？ あ、そういうえば。さっきの千夏は何だったの？」

香織が若菜の視線を追うと、そこには千夏がいた。バイクを打とうと飛び上ったジャンプは、小さいくせに香織よりも高さがある。彼女お気に入りのタオルが、千夏のポケットから少し出ている。部室で、千夏の瞼の腫れには誰もが気づいた。しかし、ただ黙つて髪を拭き続ける彼女に、誰も声をかけられなかつたのだ。だからと言つて無関心なわけではない。むしろその逆だ。こうして誰かが一人に聞き、本人に気づかぬうちに全員に知れ渡る。

「んー、なんか親と喧嘩したみたい。その話題触れないほうがいいよ」

「うん。みんな分かつていいよ。あの子、また？ 今までお兄ちゃんと喧嘩していたのが、今度は親になつたというだけか。本だけ読んでいれば大人しいのに……。中身は野生だからね」

確かに、若菜のそれは一理ある。香織は、若菜のこの力がチームの一本の柱と言つても間違いないと思っている。キャプテンは美香だ。しかし、その理由は美香が小学校からバレー・ボールをしている

ことと、セッターという司令塔に値するポジションについているが故だ。もちろん美香の力も誰もが認めている。ただ、若菜の観察力も明白で、去年は周りの強力な推薦で副キャプテンとなつた。身内だけではなく、敵の観察も鋭いのが持ち味だ。言動が時々場所によつては反感を食らうこともある。しかし部内では、彼女の助言は的確という意味しかない。

「まあね。でも、千夏のあの攻撃力はチームにかかせないから。あと数ヶ月は野生でいてもらわなくちゃ」

「でもそのあと、あの子どうぶり本を読むのかな。勉強しながら」「そうかもね。あの子の鞄は、いつも分厚いファンタジー小説とジャージしか入っていないもんね」

香織は笑いながら、鼻の下に手を当てる。鼻血ほどではないがうつすらと人差し指に血が付いた。少し鼻の中の粘膜が切れたのだ。気持ちだけ顎を上げ、鼻を啜る。

「で？ 香織は何を悩んでいるわけ？」

後頭部を壁にもたれていた香織が、驚きで若菜を凝視した。周りのかけ声が、急に耳に

届かなくなる。飛行機が飛びだつた時の圧迫感を耳の内部に感じる。若菜のまっすぐに見てくる瞳に、思わず怯む。

「何？ 悩んでいるんでしょう？」

悩んでいる。しかし、人に悩み聞かれたことなどなかつた。なぜだが、周りは自分のこ

とを何事も上手くこなす人間だと決めつけ、褒めた。羨ましがられることがあります。それ

ゆえ、弱音を吐くのが怖いと思うときがある。強い子だと思つていたのにと、幻滅された

らどうしようとして不安になる。友達が話を聞いてくれるのは分かつている。しかし、それが

分かつていてからといつて話せるわけではないのだ。若菜は、どん

な反応をするだろうか。  
ごくりと唾を飲み込む。

「先輩！ 危ない！」

その叫び声に一人がコートを見ると、スパイクミスのボールが壁に向かつて剛速球で飛

んできていた。今日は周りの調子も良くないらしい。若菜が反射的に身体をずらすと、それは彼女がいた位置を打ち付け、跳ね返つていく。

「すみません！」

ボールを拾った後輩が、自分が悪いのではないのに頭を下げる。体育馆にいればどこに

ボールが飛んでくるか分からぬ。身体に当たるのなど日常、顔でさえたまにあることだ。それに、今は座っている香織の方に非があると言える。後輩のおかげで、香織の耳に周

りの音が戻ってきた。ふつと息を吐くと、気持ちが落ち着いた。

「悩み？ 大したことじやないよ」

動搖を悟られないように早口で言つ。顔を見られないように、タオルをかぶせた。その

下では、なぜか涙が出そうなのをこらえる香織の顔があった。

「ふーん。ま、何かあつたら言つてよね」

そう言い残して、若菜はコートへと戻つていった。若菜はいつもこうなのだストレート

に胸の中に突っ込んでくる。しかし、相手が受け止めることに悩んでいると、さつと引く。

全てを分かつていて、高見から見物しているような気がするのだ。聞いて貰えればよかつたかな、心の隅でそう思つた。しかし、香織にはまだそんなことが出来なかつた。人の話を聞くことは得意だけれど、人に相談をしたことがない。それを回りも気にしたことはないだろう。いつも、冷静で、事を上手く運ぶようにだけ努力してきた。そう、それが、自分をこんなにも苦しめるなんて知らなかつた。

\*

「早川。昼休み、昼練はいいから職員室に来なさい」

朝練を終えて、六人で固まつて教室への階段を上っていると、脇からすっと顔を出したヒゲが言った。唯一メンバーの中で香織だけ、ヒゲは部活の顧問であり担任だ。顧問は大抵朝練にも来ないし、昼休みの練習でもメニューをこなしているかの確認に時々顔を出す程度だ。夕方の練習だけで手が一杯なのは分かるが、それだけで色々指摘をされると腹が立つ部員も多いようだ。

「香織は大変だねー。ヒゲとクラスでも部活でも顔を合わせるのか」香織の真横を歩く千夏が、嘆くような顔で言つ。まるで、自分が辛いとでも言つよう。

千夏はヒゲに対してもいつも不平を漏らす。今は、ヒゲが立ち去つてから言うだけマシだ。

試合でヒゲに怒鳴られても、周りのメンバーと違つて返事もせずにツンと澄ましている。

どうもバレーに関しては闘争心が旺盛のようだ。その勢いが、阿部に対しても生かされてもいいものにと思うが、本人は言えるはずがない。

「まあね。でも、性格とか色んなことをすでに全部分かっているから楽もあるよ。また

一から自分を説明しなくてもいいでしょ？ 成績がばれるのは嫌だけど、どうせ先生達の間ではすぐに分かるしね」

香織は、部室からも持ってきたボールを階段でついた。このボールを持つていないと何か物足りないので。電車の中でもこれは離さない。考える時や悔しかった時、トスをする

と平常心を保てる。一度、電車が大きく揺れ、ボールが満員電車の中を端から端まで移動

した時は参った。周りに白い田で見られるし、自分の身体の一部を失つたかのような不安感に襲われたのだ。それ以来、数本電車を逃しても満員電車は避けている。弁当は食べる

瞬間まで忘れたことに気がつかない時があるが、ボールがないと手がそわそわする。時々、自分が病気ではないのかと心配になつたこともあるが、生憎そんなものは聞いたことがない。

「あ、それは言えているかも。あたしなんて、今の担任に、お前はどうしてそうクネクネ動くんだったと言われたし！ ひどくない？」

美香が振り返つて、体を海草が海の中で波打つように動いた。なぜか口までがタコのようだ。香織が吹き出しそうになると、祥子が言った。「でも、あたしはクラスでまで怒られたくないかも……」ボールが床を突く音に紛れる声。それでなくとも祥子の声は小さいのだ。

「でもさ、なんだろうね。髪の話つて

京子が、手の中あるチョコレートを頬張りながら言つ。彼女は毎朝、大きな一枚の板チ

ヨコを平らげる。それでも肌が荒れないのが不思議だ。香織は、自分の額の中央に出来たばかりの二キビを指でなぞつた。そして、隠すように前髪を整える。

「あたしも今日確か呼び出されていたよ。進路相談だつて言つていたかな。クラスで出席番号の早いほうから始まつていてるみたいだし」若菜が答える。彼女はいつも先頭を歩く。それは目立つためでも、みんなを引っ張るためにも。周りのメンバーが、話していると異様に歩くのが速いのだ。それは階段も例外ではなかつた。若菜は他のものより三段ほど先を進んでいる。しかし、この始業開始直前

だと、ほとんどの生徒はクラスに入っているので、バレー部の声しか聞こえない。その分廊下によく響く。

「あーあ……。これからはテストテストテスト、か。大学行つてなんか分かるのかな。辛い受験をぐぐり抜ける意味なんてある?」

千夏が吐き捨てるように言つ。昨夜の両親との喧嘩が頭から離れないのだろう。今も、目には軽く濡れたタオルを当てている。

「まあ、なんとかなるよ。あたし専門でもいいし」

そう言つ京子は、チョコレートをあつとこう間に食いつぶしてしまった。

「京子はモデルで生きていけるじゃん。結婚も一番早そうだよね」美香が、香水をまた手に吹きかける。階段にも、美香の匂いが広がつた。その匂いを分散させるように香織は右手を空中に数回振ると、少しだけ咽せて言つた。

「千夏、今の心境を言つてみてよ」

「人間は自由という刑に処せられている。サルトルという人の言葉よ」

メンバーから感嘆の声が上がる。同意をする声や、サルトルという人物についての疑問を唱える者。香織は、それを耳の端で聞きながら、千夏の言葉を噛みしめていた。確かにそうだ。自由であるから、何を職業としても目標に出来る。目標があればあるほど、高ければ高いほど、周りの人達からは認めて貰えるだろう。だが、自由である一方で人は縛られているのだ。一つ一つ小さな世界に属し、足を突つ込み、肩まで浸かる。それに意味などあるのだろうか。だが、それが今自分たちの置かれている状態だ。自由とは、結局名ばかりなのだろう。

「ねー！ サルトルって誰ー！」

階段の最後を上り終え、美香の声が廊下に響いた時だった。

「お前達、早く教室へ行けー！」

階段の目の前は香織の教室だ。一足先に到着したヒゲが、ドアから顔を出して六人に叫ぶ。それまでは強気な発言を繰り返していた彼

女たちも、一瞬身体をびくつかせると、一目散に各自の教室へ走つて散つた。結局は、そんなものである。

進路指導室は、生徒が人生の中で前を向き明るい道を進めるようにと、南に面した部屋にある。その動機はこじつけのようで本当の話だ。しかし、不覚にもその部屋に光が入るのはとてもわずかな朝の時間しかない。というのも、部屋の前にはとても大きな木が何本も植林されているのだ。十数年前の卒業生が、卒業記念に植えたものなので切ることも出来ないのだ。植えた時にはまだ苗木で、ここまで成長することも考えていなかつたようだ。思いの外大きく成長した後に、そんな理由で指導室を入れ替えることも出来なかつた。結局進路指導室は学校で一番暗い場所になつてしまつたのだ。受験シーズン前になると、教師陣がその木を揺すつては早く葉を散らそうとするのだから見物である。大の男が三人ばかりで木を揺らす。枯れればすぐに落ち葉になるのに、それも待てないのだろう。生徒からすれば、受験にも落とされそうで嫌なものである。しかし一日でも早く日の光を入れようとする彼らには、生徒の意見など聞き入れられるはずもなかつた。そして一年中部屋のカーテンが閉められることもない。迷信とも言えるその行動は、一、二年生にとつては笑いぐさだ。それが、三年になると笑えない。一刻も早く木を切つて欲しくなるのが常のようだから、人間など勝手なものだ。

「それで、どうするつもりだ。進路」

相変わらず日の当たらない指導室で、香織はヒゲと向かい合つて座つている。テーブルの上には、数日前に提出した進路調査票が置かれていた。それに目を遣ることなく、香織は言った。他の教師は、昼休みを職員室で過ごすので、ここには一人きりだ。ヒゲも普段は自分の担当する日本史の資料室にいるが、この進路指導室は暗いのを覗けば参考資料は豊富に揃つていて使いやすいのだ。

「この通りです。もう決めています」

香織は、部活にいる時よりも緩んだ顔をしているヒゲに向かってきつぱりと言った。髪

は、鼻の下に生えている自分の髪を撫でつけながら、困ったように言つた。眼鏡の下の小さな垂れた目が、困ったように動くのを見逃さなかつた。

「それは……確かに見ている。しかし、なんだあれば。本気か？  
親御さんはなんと言つているんだ」

進路調査票が配られたのは、新学期が始まつた翌日のことだつた。

入学式の参列を終え、まだ慣れないクラスへと足を踏み入れた時、机にすでに配られていた一枚の紙。香織がそれを記入に迷うことはなかつた。

「いいんです。親には納得して貰います」

希望する大学名と、なりたい職業。なんどぞんざいな質問だと、その時香織は呆れてし

まつた。まるで小学生に聞くかのように、職業の名など書かせるとは。「○」と書いたらどうなるのだ。香織は、その職業に迷うことなく「刑事」と書いた。しかし、大学名は未記入のままだ。勉強もおそらく今、自分の力もハツキリ分からぬのに「○」を狙うと言わても、結局は有名な所しか書けないからだ。そんなものは意味がない。

「納得つて……、どうするんだ。お前の家は、お母さん、いないんだよな？　お父さんが知つたら喜ぶんじゃないのか？」

香織の父親が刑事だと、家庭調査票でヒゲは知つてゐるのだ。しかし、部員の仲間は知らないことだ。知つて欲しくない。

「いえ、父には最後に言います。いつも仕事で家には帰つて来ないし。それに、あまり喜んではくれないと思います。反対されて揉めるよりいいですよ。きっと三者面談にも来ないだろうし」

香織の様子を見たヒゲが、椅子にどっかりと座り腕組みをした。

値踏みをするように香織の顔を見つめるが、それは時間稼ぎに過ぎなかつた。

「分かつた。それじゃあ、これは先生がお父さんに聞いてみよつ。電話、携帯なら出でられるだらう?」

「え? いいです。これはあたしの問題ですから。先生に迷惑はかけません」

半分本当。半分嘘だ。香織は、教師にも頼ることがうまく出来ない。片づけられること

は人の手を煩わせたくないのだ。香織が、驚いて言つ。

「お前、それじゃあなぜ教師がいるんだ。部活はおまけ、こつちが本業だ。まかせとけ…」

…とは言えないが、話が出来ればお父さんの意見も聞いておこう。ここで反抗しても、結果は変わらないだらう。ヒゲの小さな目が、まだ自分を見ている

のを感じて、香織は渋々頷いた。朝、千夏から得た言葉が、香織の脳裏に浮かぶ。それが勝手に口から飛び出した。

「先生。サルトルって知っていますか?」

「サルトル? 僕は日本史の担当だぞ。……あの哲学者のジャン=ポール・サルトルか?」

「よく知りませんが。朝、サルトルの言つた言葉を知つたんです。人間は、自由という刑に処せられているつて」

髭は、驚いたように香織の顔を見つめた後、先を促すように首を傾げた。何が言いたいのか分からぬのだろう。

「それを聞いて考えたんです。自由って何かなつて。あたし達は今、自由に大学や職業を選べと言われていますよね。それって自由なんかつて。サルトルは、自由に生きる道を選ぶほど難しいものはないと言いたいんですね。確かに辛いですよね。どこへ行くにも、何

をするにも自由って却つて決めづらい。確かに、あたし達もそうして進むべき道を自由に選んでいいと言われています。でも、それって結局は見せかけじやないんですか。大きな水槽の中に大人達は子供を飼つていて、進むべき道を自分の都合のいように結局選ばせるんですよ。駄目だと思ったら、自分のいいと思う職業に進ませたり、大学を受けさせる

「お前、水槽の中にいると思うのか？ 常に監視されて、つまり刑事になることも反対されて叶わないと？」

「うちの父親なら……そうです。必ず。あたしは餌を欲しがつて水槽を泳ぎ回る小魚ではないつもりです。でも、所詮そうなんだと思います。サルトルは、自由が刑だと言つている。でも、それって贅沢ですよね。進路も自由に決められない人間からしてみれば。自由に決めると言わても否定されればおしまい。あたしたち子供からすれば、自由と云う監視の元で自らを生かさねばならない束縛の刑ですよ」

香織が、一息にそう言い終えてヒゲの顔を見ると、彼は両目を見開いている。それがなんだか面白くて、香織はヒゲに向かって笑いかけた。髭に言つべきことではないのかもしれない。なんだかスッキリした気持ちで考えた。

「すみませんでした。忘れてください。」

香織は椅子から立ち上がり、耳にかかる髪の毛を後ろへどかした。座つたままのヒゲに浅くお辞儀をする。

「……お前の考えは分かつた。もしかしたら、みんなが思っていることかもしれないが、そこまではつきりと言われたのは初めてだ。俺も、その答えを考えておくよ。あ、それとお前その髪もう少し黒くするんだぞ。阿部先生に俺が甘いと思われる。よし、ついでだから反省文書いておけ」

えーーまたー、と今度こそ大きな反抗を見せる香織に、ヒゲは一枚の紙を放った。受け取り損ねたその紙は、テーブルから滑り落ちて床にひらりと舞つた。仕方なくそれを拾い上げると、香織は振り

返ることなくその部屋を後にした。ドアをぴしゃりと閉めた時、昼休みの終わりを告げるチャイムが、校舎に響いた。

\*

「ただいまーっと

香織は、リビングに入ると、抱えていたバレーボールを床に置いた。ソファに座り、まずはテレビの電源を入れる。テーブルの上に置いたコンビニの袋から、パッケージに包まれたハヤシオムライスを取り出した。暖めて貰ったそれは、ほぼ温度を失っていない。蓋を開けると、ソースのかかった卵からもわっと湯気が上がった。蓋をひっくり返して、袋の上に置く。

「いただきまーす……」

スプーンの包装を破り、オムライスをすくう。通常のあいさつは一人でも自然と口にしてしまうが、言葉が空気の中に溶けた瞬間、静けさが際だつ。返事がないことで虚しくなるので止めようと思うのだが、誰もいないのが分かっていても期待して声に出してしまう。もしかしたら、ひょっこり返事が返ってくるかも知れない、そう考えて。

味つけの濃い米を口に入れると、それはまるやかだがどこか機械的な味がした。何回も噉むことなく飲み込むと、テレビのチャンネルをお笑いの番組に合わせる。それを見て笑えるわけではない。好きな芸人もいない。しかし、部屋のどこかで笑い声があると言うだけで、それがたとえブラウン管の中から聞こえるものでも、寂しさが紛れる気がした。香織はいつも、ご飯をこうして食べる。寂しいという感情も、ほとんどない。寂しくないことが悲しいことだとも思わない。これが一種の自立だと思う時もある。同情を買いたくなくて、周囲に言えないだけだ。高校を卒業して、結婚をして幸せな家庭に恵まれた時、きっとその時になれば話せることだろうと思う。あの時は、大変だったのだと。いつも一人だったのだと。しかし、困っているときには、なかなか周りには言い出せない。きっと、そ

れが近ければ近い存在であるほどに……。心配をかけたくないのも本心だ。だが、幸せに家族と食卓を並んでいる友達に、この悩みは話せない。おそらく分かつては貰えないだろうからだ。話を聞いてはくれても分かつては貰えない。可哀相だと思われたくない。あたしは可哀相ではない。これでいいのだ。耐えられる。何度もそう思つてこの家で眠つただろう……。寂しいと認めた時、その時が負けだ。香織は、搔き込むようにスプーンを口へ運び続けた。

その時だった。玄関の鍵が開けられる音がした。そして、すぐにドアが開けられる。廊下を歩く足音が、香織の耳に違和感をもたらす。もちろん泥棒などではない。しかし、それほどこの家に香織以外の人間が入つてくることがないのだ。香織以外の足音は、家さえも拒絶するかもしれない。

「なんだお前。そんなものを食べて。いつもそんなことをしているんじやないだろうな」

久しぶりに会つたその男が発した香織への言葉は、挨拶でも気遣いの言葉でもなかつた。

指摘。疑心。

「違うつて。今日だけだよ。部活が大変なの。帰つてくるなんて思わなかつた。久しぶり」

しかし、男はそんな香織に返答することなく、向かいのソファにやつて来て腰掛けた。何日間髭を剃つていないのでだろうか。顎の下に生えるそれは、この男を余計老けて見せていく。

男は、一度深く座り、両手を思い切り伸ばす。腰をぐいっと左右に捻ると、最後に大きな息を吐き出した。よれよれの靴下は、親指に穴が開いている。何日もえていない証拠だ。だが、それを洗つて縫つてあげようなどと気持ちは起こらなかつた。

構わず香織はオムライスを口に運ぶ。男がいるのを無視するように、テレビの音量を上げた。部屋中に、テレビの中から聞こえる笑い声が響く。男は、すぐに浅く態勢を起こした。膝の上で、両手を組むと、食べ続ける香織をじっと見つめた。こういう場面が何度も

あつた。だが、決まって男は何も言わないのだ。言いたいことがあるのかも知れないが、それが口から出でてくることはない。それを分かつてゐるので、敢えて香織から口を開くこともない。千夏の家と、こいつらは似てゐるかも知れないと思つ。男親はそうなのだらう。

しかし、今日は違つた。

「……お前、進路を考えているのか」

男がこの話をするのは、香織が覚えてゐる限り一度田だ。一度田は三年前。香織が高校受験の時だつた。

「決めた。だから何？」

香織の答えに満足出来なかつただらう男は、首を左右に振つた。男がこゝに戻つてきたのは、香織が心配だつたからではない。ヒゲが電話をしたのだろう。男の顔を睨み付ける。

よく見れば、その頬はこけている。食事をきちんとしているのだろうか、と気になつたが、聞くことはない。男が香織に聞かないよつて、香織も男に何も聞かないのだ。

「ダメだ」

不意に男の口が開いた。その声は、低くはつきりとしていた。話をするつもりもないだろう威圧的な声。それは香織の中に選択肢として存在していた。そう、ヒゲが父親に話すと言つたあの瞬間から。しかしこつなるのは、もう少し遅いと思つていたのに。

「そう。でも決めた」

視線をテレビに戻したまま、香織が言つ。男が認めてくれるとは思わない。それならば、もう突き通すしかないと思つていた。

「ダメだ」

男は、静かにもう一度繰り返す。それでも、香織が視線を合わせないと、無言でテレビ

のリモコンを持った。すぐに、電源を落とす。笑い声が響いていた部屋に、沈黙が落ちた。

その差が、大きすぎる。香織が飲み込んだハヤシライスがのど元を落ちる音までが聞こえそうだ。それさえも止めたらすぐに気がまづくなってしまつ。ただ、

無心に食べる。

「今日、担任の先生から電話を貰つたよ。お前の部活の顧問らしいな」

だから何？もう一度同じことを、香織は繰り返す。

「刑事は、やめろ」

そう言った時、男の胸ポケットにある携帯が音を鳴らした。ちつと舌打ちをして、男はそれを取り出し、耳に当てる。受話器から男の声が漏れてきたが、何を言つているのかははつきりしなかつた。

「ああ、分かった。すぐ行く。……仕事だ」

電話を切ると、すぐに男はそう言つた。家の物になにひとつ触れることがなく、その場を

後にして。男の消えた家で一人、香織はハヤシライスに口をつけた。一度消えた音を付け

ると、余計に虚しくなるのを分かつていい香織は、再びリモコンに手を伸ばそとは思わ

なかつた。最後の一 口を食べ終える前に、スプーンを置く。どうして、最後の一 口だと

思つと手が止まつてしまつ。無理して口の中に入れると、なぜか吐き気さえ感じる時があるのだ。それがなぜだかは分からない。この一 口を捨てるのこそ勿体ないはずなのに、香

織にとつては食べるのが勿体ないのだ。終わりが来るのが怖いのかもしれない。香織は、

家で一人ご飯を食べると大抵最後は残してしまつ。お昼の弁当でも、誰かに何かを聞かれ

る前にそつと蓋を閉じる。それでも、今の沈んだ気分の理由は分かつていた。

男は今日も帰つては来ないだろう。今日もひこで一人眠るのだろうか。そう思うと、悲

しいといつよりも無性に虚しくなつた。明日の土曜日には、午後から模試が待つてゐる。そのための勉強もしていないが、そんな元気はなかつた。勉強するには体力が必要だ。

こうして一人でいることには慣れている。寂しくないといえば嘘になるが、苦ではない。

それなのに、時々こうして胸が苦しくなる。世界に一人だけ置いてきぼりにされたような、

もし自分が苦しんでいても誰も助けてくれないだろうという不安感。そして、今の自分の

置かれている状況が憎らしくなるのだ。制服を着たまま、香織はもう一度鞄を手にした。使用していないが、家中のあらゆる火の元を確認して回る。これは一種の癖だろう。

確認してから家を出ないと、あとで不安になるのだ。戻つてくるのもバカバカしいので、

香織は嫌と言うほど、元栓が閉まつているのを確認するのだ。

一度、若菜に心配されたことがあつた。戸締まりや火の元の確認を何度もしないと安心できない病氣があるらしい。しかし、香織には自分がそんな病氣ではないと分かっている

ので鼻で笑つてしまつた。彼女は、母親との思い出に浸つていてるだけだ。母親は、出掛け

る前にいつも香織と二人で家中を冒険するように探検した。一番記

憶に残っているのが、

その映像なのだ。

家を出ると、マンションの廊下を走る。香織の住むマンションは、この地域が発展するときには建てられたものだ。築十七年ほどで、ほとんどの戸数は埋まっている。同じ敷地の中に棟が数個並んでおり、かなりの住人が住んでいる。中学のときなどは、一クラスに何人も、このマンションから通う生徒がいたほどだ。ひとつの集団だと言えるだろう。しかし、案外そのつながりは希薄なものだった。一緒に帰るような友達がいたわけでもないし、ご飯をお裾分けし合いつような近所づきあいがない。同じ建物だからといって、ひとつひとつに別の世界があるに過ぎないのだ。そして、香織はその世界でも一人だった。父親は家に寄り付かず、母親は幼少の頃に死んだ。それ以来、香織はあるの小さな箱の中で一人で生きてきたのだ。病気の時も、受験の時もいつも一人だった。しかし、今は逃げ場所を見つけた。

香織は、一度マンションのエントランスを出ると、すぐに隣のマントラーンへと入った。部屋の番号を押すことなく、鍵を差し込みエントランスを開く。エレベーターに乗り込むと、五階を押した。誰に会うこともなく、機械に表示された階数を見上げる。すぐに着き扉が開くと、目の前の部屋に今度は鍵を差し込んだ。カチヤツと音を立てて開いた。

「あれ、何。来たんだ」

香織がノブに手をかけようとすると、内側からドアが開いた。そして中から顔を出したのは、一人の男だった。

「うん。達也、ごめん。寝させて」

男の返事を待たずに、香織は猫のように脇をすり抜け家中へ入った。靴を脱いで、廊下をまっすぐ歩く。家の間取りは香織の家と正反対な位置にあるだけだ。一ヶ月に初めて

来た時から香織は迷わなかつた。ただ、たとえ位置が同じでも、置いてある家具、そして

それぞれの家庭の雰囲気は確かに違う。床に座ると、香織は玄関を振り返つた。

男は、履いていた靴を脱ぎ、やつてくる。

「ちょうどコンビニにでも行こうとしたんだ。まあ、鍵がなくともお前持つていいしな。

親父さん、今日もいなかつたのか？ そんなに忙しい仕事だと大変だな」香織は、リビングのソファに座り、頭をもたれかけながら、横目で男を眺めた。

「いなによ。さっさと帰つてまた出掛けた。どうせ話すこともないし同じ建物に住んでいても、それぞれの生活は違つている。この部屋は、香織の家とは全く違つた匂いがある。優しい、家の匂い。達也はここに一人で住んでいる。それなのに、二人の住人がいるはずの香織の家よりも温かい。

「飯は？」  
男が聞いてきたことに答えず、香織は真顔で見つめ返した。  
「ねえ、達也はどうしてここにいるの？」

香織のその質問に、男は一瞬吹き出した。そして、すぐに香織の表情を見ると、小さな咳払いを一つする。

「なんであつて……。お前、ここ、俺の家なのだけど？」  
「そういう意味じゃないつて分かっているくせに。達也だけ、どうして日本に残つたの？」

いくらいか不審気に香織を眺めたあと、男はいとも簡単な答えを出した。

「お前に会つたためさ」

そして男のまっすぐな気持ちを、香織は簡単にへし折つた。

「そんなのは違うでしょ。達也と会つたのは最近じゃん。達也の

親が海外に行つたのは

去年の話でしょ？」

「冗談に乗らない香織に向かつて、男は肩を竦める。首の後ろを数回指で搔くと、諦めた

ように言つた。

「ばれたか……。俺さ、あんまり話したことなかつたけど、日本の歴史に興味があるんだ

よね。それだけ言つと、おたくっぽいから嫌なのだけどさ」

「日本の歴史？ 確か、達也は文学部だよね？」

「ああ。まあ、残つた理由はそれが主だな。大学を休学するつもりはなかつたし、出来れば大学院にも行きたい。今のところ海外に目は向かなかつた。なにより、日本のことば

本にいなけりや分からぬ。幸い俺は大学生だつたから、一人暮らし出来て有り難い。妹は高校も向こうのに編入しているわ。まあ、大学は戻つてくるみたいだけど」

そう言つと、達也は香織に背を向け台所へ向かう。テーブルの上に置いてあつた急須の蓋を開けると、ポットからお湯を流し込んだ。その湯気は、香織が買ったコンビニのハヤ

シライスより、温かくていい匂いがする。

「そりなんだ。ご両親に反対されたりとかは？」

「いや、家の親は結構放任なのだよ。昔から。……何？ どうしたの、急に」

香織は二ヶ月前に、京子の友達が開いた合コンに参加してこの達也に会つた。高校三年

生と、相手は大学生だつた。香織が進められても頑なにお酒を断り続けると、達也が最後に言つたのだ。

「そんなに眞面目に生きていると、ストレス溜まらない？」

馬鹿にしたようなその一言に、香織は無性に腹が立つた。達也が持つていたグラスを強

引に奪い取ると、それを一気に飲み干した。あとで聞いたところによると、そのカクテル

はノンアルコールだつたらしい。しかし、お酒を飲んでしまつたといふ気持ちが、香織の

気分を悪くさせた。店の中にいると吐き気が起つり、外の空氣を吸うために外へ出た。出

たところでもうずくまつていると、達也が追いかけてきたのだ。気分が悪いと呟つと、達也

が送つてくれると言い始めた。一人だと不安だったので、途中までならと了承した。それ

だけだ。しかし、道のりが自分と同じことになづいた達也の話で、同じマンションの別棟

に住んでいることが発覚したのだ。それから、なんとなくこの家に遊びに行くようになった。

て、なんとなく付き合つようになつた。付き合つかけなど、そんな些細なことで充分

なのだ。共通点があれば、居心地がよく感じられる時もある。それからなんとなく一緒に

いるが、香織は達也のことを何も知らなかつた。

両親が仕事で海外に行つてゐるというだけで、仕事の内容も知らないのだ。しかし、今はそれでいいと思えた。知りたいとも思えないのだ。自分のことを話すのが苦手な分、人から何かを聞き出すのも得意ではなかつた。

話したくなつたら話してくれればいい。話さなければそれまでの存在だ。だからといって、自分からその距離を無理に縮める気はない。

達也を好きかと聞かれたら、分からないと答えるかもしれない。家

族と過ごせない時間を、達也で埋めていると言われても反論は出来ない。しかし、一度手に入れた安息場所を手放すには、手に入れた時の倍以上の勇気がいることを知った。

「香織さ、受験だろ？ どつかの大学に行くの？ 稲毛女子ならほぼ進学だろ？」

偶然にも、達也は同じ稲毛駅にある男子校出身なのだ。駅が反対側なので関わりは全くないが、お互いのレベルや卒業後の進路くらい大体把握出来てしまう。

「んー、引かない？」

香織が、冷蔵庫の中を漁る達也に聞いた。自分をさらけ出して、嫌われるのが一番怖い。

自分に自信があれば、なんでも言えるだろ。評価など関係ない。自分を評価するのは自分だ。それが好きな人だと、余計に気は小さくなってしまうが、そう思うということは、達也のことが好きなのだろうか。香織は言いながらも、自分に問いかけた。

「え？ そんなこと分からない。何？」

達也はこういうところがある。決して安易に物事を肯定的に捉えないのだ。必ず自分で考えて、結果を出す。それがこの一ヶ月で知った、彼の一番いいところだった。

「あのね、あたし刑事になりたいの」

香織のその告白が、達也にどれだけの衝撃をもたらしたのかは、彼の反応で明らかだつた。冷蔵庫から取り出したキャベツを持ったまま振り返つたが、数秒香織を見つめたかと

思うと、それを垂直に落下させたのだ。衝撃で手に力が入らなくなつたのだろう。そんな反応があると、何かやらかしているのかと若干不安になるではないか。

「どう思う?」「

落ちたキャベツに田線を落とした達也に向かって、香織は窺うよう  
に聞いた。

「いや……、驚いた。女の子で刑事って初めて聞いたよ。いや、馬鹿  
にしているわけじゃ

ないんだ。ただ、そういう仕事は危ないから……」

達也はキャベツを拾いつと、まな板を持ってリビングへやってきた。  
普段は台所で料理を  
するようだが、香織がいると彼はリビングのテーブルにまな板を持  
つてきては野菜を切つ  
たりする。

「実はね……。父親がサラリーマンで嘘なの。父親は刑事。だから、  
あんなにも家にいな  
いんだ」

「……そつか」

達也は、ただキャベツを刻む。彼なりに答えを出せないのでいるの  
だろうか。その後、  
包丁がキャベツを同じ大きさの千切りになつていいくのを、香織はた  
だじつと目で追つてい  
た。父親のように反対をするわけでもない。かといって、彼は手を  
叩いて喜んでくれるわ  
けでもない。何も言われないのが、一番苦しかった。自分は自分だ。  
そう頭では分かつて

いるはずなのに、感情が否定されるのを怖がっている。彼の答えを  
聞くのが怖かつた。否  
定されたら諦めるだろうか……。香織は自分に問いかける。結局、  
こんな時も人間は自由

という名の服を着た他人の意見に、所詮左右されているのだ。  
その時だ。鞄に入れてある、香織の携帯が音を立ててなつた。画面  
を見ると、そこには

祥子の名前が表示されていた。

「もしもし？」

香織が出ると、祥子は疲れたように間延びした声で言った。

「あ、香織ー？」「めんねー、明日の模試って、何時までだっけ？  
親に買い物頼まれち

やつて。メールにしようかと思つたんだけど

「お父さん？」

香織が答えると口を開きかけると、横から達也が一言付け加えた。  
送話口を軽く手で

押さえ、首を横に振る。友達、とだけ口を動かした。そして電話に  
送話口を軽く手で

言つ。

「明日の模試ね。五時までつて言つていたよ」

香織が答えると、微妙に電話の向こうに緊張した色が走った。

「香織？ 誰かと一緒に？」

達也と付き合っていることは、部活のメンバーに話している。バレ  
ー部で参加した合図

ンなので隠すこともない。ましてや、達也が香織を送つたことを知  
られていたのだから、

翌日は一日中からかわれるはめになつた。

「あ、うん。達也」

「そりなんだー。はは。お邪魔しましたー。」

香織が答えると、祥子は電話をすぐに切つてしまつた。

#### 4 第三次戦争

電話を切つてしまつたあと、部屋で呆然と佇む祥子に声をかけたのは、母だった。

「祥子。お風呂あんたが最後だから、入つたらすぐに洗つておいてよ」

思わず電話を背中に隠すと、ドアの隙間から部屋に顔を覗かせる母親に曖昧に頷いた。その間から妹達の騒ぎ声が、聞こえてくる。

「あ、そうだ。あんた、明日空いている？」

母親は、ドアを閉めようとした直前に、思い出したように言った。その問いに、一瞬だけ心臓が高鳴った。伏し目がちで、申し訳ない思いを口にする。

「「めんね。明日は練習試合と模試なの」

「そう。それなら仕方ないね。唯の幼稚園のお迎えが早いから頼もうと思つたんだけど」

「あ……ごめん」

母親は、特にそれ以上何も言つことなくドアを閉めた。祥子が忙しいのも分かつていいのだ。香織がいくら長女とはいえ、彼女の責任ではないことも承知しているのだろう。しかし、それでも香織は心苦しかつた。兄弟は下にあと三人居る。高校は公立に入れたからよかつたものの、大学も出来れば国立に入りたいのだ。下に手もお金もかかるこれからを考えると、自分は我が儘を言つてはいけないと分かつている。大学へ行けるだけでも充分だ。自分は間違つてはいない。祥子はそう言い聞かせる。しかしそのためにも、祥子は早く受験勉強をスタートさせたかつた。

今、香織に電話をしたのも、本当は模試の時間を知りたいのではなかつた。そんなものは配布されたプリント見れば分かる。電話をしたのは、明日の練習試合を上手く欠席したかつたからだ。妹の用事を言えば、休めないことはない。総合大会が近いとはいえ、まだ

二ヶ月以上もある。ずっと焦り続けるよりも、今のうちに少しでも進めておきたいのだ。

休むことをキャプテンの美香に言つよりも、香織のほうが得策だと思えた。香織ならば、本当の理由に勘づくだらう。それでいいのだ。美香は、おそらく素直に信じてくれる。若菜に言えば、疑いを口にして叱られるかもしれない。京子と千夏なら、自分たちも休みたいと言い出しかねないだらう。一番の安全策は、キャプテンだ。しかし、それもまた気が引けるのだ。美香は、欠席の連絡を拒絶しない。風邪だと言つても、用事だと言つても同じ事だ。しかし、事実は異なるのだ。用事もなく、風邪も引いていない。そんな風な形で休んでも、結局は集中出来ない気がした。それならば、気づいたとしても口には出さないであらう香織に伝えたかった。いわば、自分が中だけでの共犯者を捜しているともいえるだらう。しかし、その作戦も失敗に終わつたのだ。それに加えて小さな衝撃を連れていた。罰が当たつたのかもしれない。数ヶ月前にあつた合コンで、幸か不幸か祥子も達也に会つた。言つなれば、一目惚れだつた。少し真面目そうに見える外見を作つている黒縁眼鏡も、前髪が少しだけ跳ねているところも、奥一重の瞳も、なにもかもが輝いて見えた。しかし、彼が興味を示したのは、祥子ではなかつた。予想よりも早く、香織は達也とつきあい始めたとバー部で報告した。そこまでは我慢できた。一緒に喜んでいる振りもしてあげられた。しかし、それでも、心のどこかで泣いていた。運動だけでなく全ての生活において言えることかもしれないが、バレーも精神の安定があつて初めて納得のいくプレーが出来る。身体も軽くなるし、思わぬ好プレーにも恵まれる。上手くいけば、また気合いが入る。しかし、逆を言えば、負のスパイラルも一度始まれば尾を引くのだ。ただでさえ、祥子はそれに嵌つていた。足を掬われる、まさにそんな感じだ。藻搔いても藻搔いても、気にしていないはずなのに、どこかでひつかつっている。打つても打つても決まらない。

そして、せつかく忘れていたはずなのに、今の声を聞いて全ては

振り出しに戻つてしまつた。達也だ。香織は達也といつるのだ。時間を確認すると、もう十一時だ。こんな時間まで、二人は一緒なのだ。何をしているかなど想像もしたくなかった。タンスの中からバスタオルを齎づかみすると、祥子は部屋を出た。足下に、幼稚園に通う妹がからみついてくる。頭を撫でてやると、祥子は洗面所のドアを閉めた。一人になりたかった。この家にいると、ゆっくり一人で考える時間もない。どこから音がして、一歩歩けば兄弟が絡んでくる。こうしてお風呂に入るときだけ、ゆっくりと考えることが出来る。なぜ、自分はここにいるのだろう、と。どこもかしこも不満ばかりだ。服を一枚ずつ脱いで、浴室に入る。なぜ、自分がお風呂を洗うのだ。まだ裸になると空気がひんやりと感じじる。なぜ、兄弟のために国立を目指すのだ。もくもくと上がる湯船に、身体を沈めた。目を瞑る。どうして、こんなにも苦しいのだ。

周りの人間は、祥子をおつとりしていると評価する。それが間違つているとは思わない。人よりは、話すスピードも、動く早さも遅いだろう。それが試合で足を引っ張り、落ち込むこともある。しかし、だからと言つて、何も考えていないわけではない。むしろ、ゆっくりしている分、じっくり考えているのだ。周りもよく見える。計算して優しくしているわけではない。恩を売ろうとして人を手伝う訳ではない。しかし、その裏に何もないといえば嘘になる。いつものことだ。隠しているわけでもない。それで、いつも上手くやつてきたのだ。そのためにも、今のこの状態は予定外なのだ。これらどうするべきなのだろう……。祥子は、湯気のたちこめる天井に向かつて大きく息を吐いた。

\*  
「なんでそんなものも取れないんだ！！」

体育館に、ヒゲの怒号が響く。祥子が髭の前の床に転がっている。その周りには何個ものボールが散乱している。それを見守る部員達は、声も出せずに傍観しているか、かろうじて励ます言葉をかけて

いるが、それは祥子の耳には届いていなかつた。翌日、午前中から始まつた練習試合で、やはり祥子の調子はよくなかつた。朝一番に香織の顔を見たときは、笑うことで精一杯だつた。部室に入ると、軽く参考書を眺めている千夏にも焦りを覚えた。そんな中でプレーが上手くいくわけもなく、祥子は散々な結果を迎えていた。試合中にも何度もヒゲの罵声が飛び、その度に祥子の気は滅入つた。祥子だけではない。レギュラー全員の気持ちが全く一つになつていなかつた。結局数回出場した試合はどれも相手チームの勝利で、解散となつていた。

確かに、他の仲間も調子は悪かつた。しかし、メンバー チエンジをされたのは祥子だけだ。しかも後輩とだ。そして今、猛烈なレшиб練習をさせられているのも祥子だけだ。試合が終わつた時は、自分への反省、後悔とともに、安心感が襲つた。

これで模試に向かえる。しかし、甘くはなかつた。ヒゲは祥子を名指しすると、コートの真ん中に立たせた。構える余裕もなく、すぐには力強いスパイクを祥子に打つてきた。反射的に身体はボールを追つたが、追いつける早さではなかつた。床に、腹を打ち付ける。そして、顔を上げた途端、その数センチ手前にボールが落とされた。膝建ちをしていた状態で、すぐにまた滑り込む。突きだした右手の先に、軽くボールは触れ、右の方向へ飛んでいった。それが意地悪ではないのは承知だ。練習試合で祥子が足を引っ張つたのは誰もが口にしないだけで明らかのこと。それでも、この状況は理不尽だつた。

「ねえ、ひどくない？」

「……先輩、がんばれ」

コートの端にボールを追つて突つ込んで行つた時に、後輩の声が、まるで耳元で叫ばれたように響いた。御礼を言つ暇も、余裕もない。コートに戻ろうとするときには、反対の方へ次のボールが投げられる。足が縛れながらも、それを追つて滑り込む。猫がねこじやらしを追つているみたいに両手を出す仕草と、今の自分がシンクロする。

人間は、猫を遊んであげようとしているが猫は必死だ。ヒゲも遊んでいるつもりなのだろうか。こんなにも必死にボールを追っているのに、ちっともボールは上がらない。いつになつたら終わるのだろう。のど元から、血の味が上がってきた。

それから模試までの時間、必死で走るもボールを上げることは出来なかつた。まだ受験まで半年以上はある。いくら模試とはいって教室内の空気はそれなりに穏やかだつた。問題をお互いに出し合つて、生徒もいれば、参考書を開くこともなくただおしゃべりに夢中になつてゐる者もいる。強者は化粧さえ直している。普段よりも教師が少ない今、学校は隙間をぐぐるに適した場所なのだ。このあと遊びにでも行くのだろうか。走り回つた疲れで机に突つ伏しながら、祥子は一番後ろの席からクラスを見渡した。バレー部の中でこの国立クラスにいるのは祥子だけで、必然的に部活のあとみんなとも別れた。着替える暇もなく席に着いたが、それは却つて有り難いことだつた。あんな風に一人だけ練習させられては拷問を受けていたようだつた。そしてなにより、祥子が悪いと分かつてゐるのに、何も言わないチームメイトが腹立たしかつた。祥子が謝ると、大丈夫だと慰めるその口と同じくらい、彼女たちの目は呆れていのよに感じた。そう感じただけかもしれないが。

それでも、祥子にとつてはヒゲの練習よりもその目は心を抉つた。いつそ本音をぶつけてくれと思った。へたくそなら、そう言つてくれたほうがまだよかつた。そしてなにより、選手交代した後輩からのねぎらいの言葉が悔しかつた。机に座つても、落ち着かない。足が痛み、眠気が増す。それでも必死で鉛筆を動かすのだが、面白いくらいに一問を解くのに時間がかかる。数分頭下げてみると、時計を見た時に目を見張る。驚くほど時間が過ぎているのだ。泣きたくなる気持ちを抑えて、紙を見つめた。ぐるぐる頭の中を回る映像は、ヒゲの怒つた顔と周りの視線。自分は部活に必要ないのではないかという猜疑心。代わりもいる。部活にいると、勉強が気になつてうまくいかない。勉強をしていると、部活に身が入つていないと

ようで後悔が残りそうな気がしてしまつ。行き止まりだ。周りのみんなは明るい未来に向かつて歩いているのに、自分だけが暗闇を彷徨つているようだ。どうしたらいのか分からぬ不安と、現状とさえうまく向き合えない自分が喧嘩をする。その整理も出来ずに、時は刻々と流れしていく。それを止めることもできず、未来を夢見ることも叶わない。周りの席に座っている友達が、用紙に迷うことなく答えを記入していく姿を視界の隅に捉えると、自分が情けなくなる。そんな小さなことに悩んでいるうちに、チャイムは試験の終了を告げた。

模試の出来は、最悪だった。この結果が家に届くのかと思つと、祥子は憂鬱だった。

父親はまだしも、母親は下の兄弟の世話をばかりしながらも、祥子の成績だけはきちんと把握したがつた。祥子が変な悪さをしないと踏んでいるのか、生活に対しても怒ることはなかつた。それを肯定するように祥子は大人しく真面目に過ごしていると自分でも思つていた。禁止されたアルバイトもせず、ライブや合コンに行つたことなど片手にも満たない。試験を終え、家に帰れるにも関わらず、祥子は足が向かなかつた。帰れば、この気持ちとじっくり向き合つこともなく、ただひたすらに家事をしなければならないだろう。こんなに気分が沈んだ時に、行く場所がないなんて惨めな話だ。風呂だけで考えるのでは時間が足りない。この気持ちを誰が分かつてくれるだろうか。そして、慰めてくれるだろう。自分を必要としてくれるのだろうか……。教室は、教師達によつて閉められてしまつ。一人でフーストフードの店に入れば、余計に気が滅入りそうだつた。周りの騒音が、鬱陶しい。

そんな時だつた。昇降口を出てとぼとぼと校舎を出て歩いていると、F-1の灯りが見えたのだ。一階の隅の部室に電気が点いている。祥子の学年はすでに引退している部活が多いし、今日は模試だつた。おそらくグラウンドのどこかの部活の一年生がしゃべつているのだ

ろう。F-1の鍵は、顧問が帰るときまでに返せばいいのだ。彼女たちが残っているということは、まだ時間があるのだろう。

鞄の中に入っている携帯が着信を知らせる。それはバイブ音だつたが、確かに振動があった。鞄から取り出して見ると、そこには母親の名前が表示されていた。やはり幼稚園に行けというのだろうか。それとも、早速テストの出来を確かめようとしているのだろうか。今は、誰とも話したくなかった。とくに、責められるのは嫌だ。そつと鞄に戻すと、数秒後にその振動は途絶えた。一人になりたいのに、なぜか寂しかった。誰かに話を聞いて欲しいのに、放つて置いてほしかった。祥子は、F-1のドアを開くと、廊下をまっすぐに進んだ。

一階とは違い、一階には誰もいないようだ。どの部室も静まりかえり、カーテンも閉まっている。鉄筋で出来たその建物は、コンクリートがむき出しだ。汗をかいて戻つてくる時や、みんなでご飯を食べているときには気にならないのに、一人でいるととてもなく拒絶されているような寒さがあった。部室の鍵を開けて中に入った。昨日は最後にここを出たのが祥子だったので、ちょうど部室の鍵を持つていてよかった。靴を脱いで上がると、大の字に寝そべつた。普段は、祥子は一番奥の隅に居て、この部室の汚さに愛想も尽きていた。京子の食べるお菓子は散乱しているし、どことなく美香の香水の匂いが鼻につく。香織はいつもボールをついているし、若菜は指摘ばかりする。千夏はふざけてばかりだ。それでも、そんなメンバーに不快感を持ったことは不思議と一度もなく、隣にいてくれると安心する存在に知らぬ間になっていた。周りの人間をそれほど気にしたことなどなかつた。いるのが当たり前で、文句をいうのも、勝利を喜び合うのも、有り難いと思わなかつた。しかし、祥子はここに来て初めて思った。誰かと話したい、と。

その時だつた。F-1の扉がまた開く音がした。寝転がつていた祥子は、思わず驚きで身体を起こした。ひたひたと歩く靴音。ボールを床に付く音。誰かが近づいてくる。ボールの音は、テニスボール

ほど軽くなく、バスケットボールほど重くはなかつた。もしかして……。祥子が身体を強張らせるど、誰かがそのドアを開けた。上半身がカーテンに隠れ、下半身だけが見える。

「……あれ？」

祥子よりも前に、向こうの人物が驚いた声を上げた。カーテンを上げて部室に入つてき

たのは、香織だつたのだ。試験に集中するためか、長い髪を後ろでひとつにまとめている

香織の試合での調子は決して悪くなかったはずなのに、その顔は曇つていた。

「香織……。どうしたの？ 忘れ物？」

祥子は、慌ててスカートの裾を直しながら言つた。普段着替えるときには下着姿もみせ

ているくせに、なんだか一人で大胆な格好をしているのは恥ずかしかつた。しかし、そんなことをまるで気にしていないかのように香織は入つてくると、いつも定位置に座つた。

祥子が丁寧に座り直したのに対抗するよつこ、胡座を搔いている。目の前にいる祥子には

香織の下着も目に入り思わず目を逸らしてしまつた。

「ううん。そういう訳じゃないの。あたし何かあると、ここにこじりしてゆづくりしてから

帰るんだ」

この数年間、一緒にいて初めて知る事実だつた。香織が帰りたくないくなるようなことを

抱えているとも思わなかつたし、部室に一人で残ることなど考えもしなかつた。祥子がここへ来たのは、気分がどん底にいる気分だつたからだ。もしも、香織がここへよく来ていたならば、それを味わつていたというのか。気づきもしなかつたではないか。

「……香織つて、もつと毎日を楽しんでいるのかと思つていた」

え？」と香織が鞄からノートを出す手を止めて言った。テストの復習でもしようとしているのだろう。こうして彼女は淡々と物事をこなしていると思っていたのだ。不満などひとつも抱えずに。そんなこと、あるはずがないのに。香織の口元に笑みが残る。

「……そんな風に見える？」

香織は、楽しんでいるような、それでいてどこか悲しそうな表情をした。

「「ごめんね。でも……」正直、香織って色んな人に大切にされる感じ。そんな匂いがする。両親に大切にされて、彼氏もいて、部活でも大事なポジションを任されて……」

「そつなく色んなことをこなして、不満がひとつもなくて、何にも悩んでないって？　いつもボールで遊んでいる暇人じゃないのかつて？」

「香織……。あたしそこまで言つて……」

一気にまくし立てるように言つた香織に、祥子がたじろいだ。香織から顔を背けるようにして、その顔の向こうを見る。香織の背中には小さな本棚があり、先輩が残していくつものや自分たちで集めたものが並んでいる。それでも香織の勢いは止まらない。

「教師にたてついて、男と遊んで、周りを冷めた目で見ているって？　そんなわけないじゃない」

二人の間には冷たい空気が流れた。祥子は、そんなに軽く香織を見ているわけではない香織も、祥子が本当にそんなことを思つていないうことなど分かっているはずだ。それなのに、動いた口は止まらなかつた。祥子には、それが試合で上手くプレーできなかつた事が、香織を苛つかせているのだと思った。謝ひつと口を開いた時、香織が再び言つた。

「……ごめん。ちょっとイライラしていた」

香織は、前髪をかき分けるようにして手櫛を通すと、祥子の顔を見た。その声から尖つた響きは消えていた。それでも、今は楽しく話せそうにない。この場所を譲ろうかと考える。しかし、

「なんだかさ、高三で思つたよりも大変だよね。あたしなんて生理が来るだけで腹が立つてくるよ。全てを邪魔されている気分」

自嘲氣味に言つ香織には、この空氣を変えようとしている雰囲気があつた。祥子も、無理に声を出して笑つて頷く。すると、不思議なことに少しだけ空気が柔らかくなつた気がした。少しだけ。香織が、安心したように微笑む。祥子も微笑み返そうとしたその時だつた。二人なら、このあと夕飯を食べて帰つても良い。そこで普段の愚痴を思う存分吐き出せばスッキリするかもしれない。祥子が誘つてみようかと思つた時、足音もなく部屋のドアが開いたのだ。

誰もF-1に入つてきたことに気づかなかつた二人は、驚きで小さな悲鳴を上げた。しかし、もっと驚いたのは、ドアを開けた人物だつた。彼女も、まさかここに人がいるとは思わなかつたのだ。カーテンを開き、そこに立つていたのは、またもやチームメイトの姿だつた。

「きやああつ」

カーテンを持つて、驚いた顔をしていたのは千夏だつた。元から黒めの肌は、なにやら興奮しているようで頬が真つ赤に染まつてゐる。そして、その顔には涙の跡がついていた。

「なに、どうしたの、あんた……」

先に口を開いたのは香織だつた。試合で負けた時、悔しい思いをすれば涙する。それは選手にとつては当たり前の出来事だつたが、普段の生活の中で泣いている姿など見たことがなかつたのだ。泣いているその姿は可哀相だつた。しかし、祥子の胸は弾んだ。初めてマイナスな感情を吐き出しあえる気がしたのだ。聞いてもらうのと、分かつてもらうといつのは別なのだ。今なら、きっと分かり合えると思えた。

「……え？ なんで一人ともここにいるの？ つていうかさ、もう最悪！」

千夏は、目元を手で拭いながら部室に上がつてきた。彼女がどこから泣いてきたのか気になつたが、聞ける雰囲気ではない。香織が

広げていた自分の荷物を引き寄せ、いつもの千夏が座る場所を空ける。そこにどつかりと腰を下ろすと、千夏は言った。

「ねえ、あたしたち受験生だよね？」

香織と祥子は、いきなりのその言葉に思わず顔を見合せたが、頷いた。それを確認して満足そうに千夏も頷き、あとを続ける。「別にや、受験して大学に行かせて貰えるのも有り難いことだし、恵まれている。そんなこと分かっているよ。特別な待遇なんて望んでいない」

「うんうん、と二人も相づちを打つ。

「でもや、親ってなんであんなにもあたし達の気持ちを分かつてくれようとしないわけ？」

香織には、千夏が怒っている理由が分かった。数日前、彼女は両親と喧嘩したと言っていた。それが部活をいつまでやるのかといふ些細な言い合いから発展し、家の態度に拡大したということも。反抗したいわけではない。どこかで自分に非があることも認めてはいるのだ。それでも、大目に見て欲しいというのは甘えか。自分がとても苦しい状態について、精神を安定させるのも一大事だと分かつて貰おうとするのは我が儘なのか。香織は、それが千夏の我が儘だとは思えない。しかし、それならば自分はどうなのだろう。家族に対する文句を言っているわけでも、金銭面の文句を言っているわけでもない。それなのに、なぜ……。どうして、将来選ぶ仕事を否定されなくてはいけないのだろうか。香織が考え込んでいると、千夏が投げやりに言った。

「香織。あたしが、この間親と喧嘩したじゃない？」

祥子にも心当たりはあった。千夏が部屋に早く来て、髪を濡らして沈み込んでいた時だ。

「うん。あ、祥子。この子がドライヤーで使っていたでしょう？　あの日よ」

香織が祥子に向かつて言つと、千夏は思いきり顔をしかめる。そうだった、と呟きながら

ら両手を打った。

「そりなの！ 前の日の夜に喧嘩してね。お父さんがすつごい怒鳴つたわけ。もう殴られ

そうな剣幕で。信じられる？ あたし、女なんだけどー。」  
千夏は、他の部活の生徒がいないのをいいことに、叫んで怒りを吐き出した。それは廊下まで突き抜けるほどだ。祥子は、一階にまで聞こえているのではないかと、若干心配になる。怒られることはないが、ここで喧嘩していると思われても堪らない。

「でも、百歩譲って……。百歩譲って自分の悪い所を見つめ返したのよ。それだけでも進歩でしょ？ 親に謝ろうと思ったの！ だって、家中の空気が悪いのよ。それを親の両方があたしのせいだ、みたいな目で見るの！ 目が、責めているの！」

両親のその目を思い出したのか、千夏は壁の一点をただ睨み付けている。彼女にとっては、今何を見ても敵に見えることだろう。  
「それが、どうしてあんたは怒っているわけ？ 反省したんじやないの？」

香織が、先を促す。促し方としては褒められた言い草ではないが、千夏を現実に引き戻すことには成功したようだ。鞄の中から無造作にしまわれた箱を取り出した。

「これ……買ったのに」

その箱に記載されている名前は、有名なケーキのチヨーン店だ。しかし、その箱はそこかしこが潰れている。千夏は、怒りを吐き出し過ぎた。怒りを通り越して、それは悲しみに変わり涙を零し始めた。  
「これ、買ったんだよ。これを食べて仲直りしようと思ったのに……。試験終わって疲れているのに……。三十分も並んで買ったのに

……」

「うんうん。凄いね。偉いね」

祥子が千夏に近寄ると、その頭を撫でる。意外と彼女の髪質は細く、撫でているのが

気持ちよかつた。しかし、悔しそうに眉をひそめるその千夏の顔は、泣き叫びたいのを必死で堪えているようにしか見えなかつた。

「お父さん達はどうしたの？」

千夏の様子から、神妙に謝る作戦が失敗したのは間違いない。祥子の問いかに、千夏は鼻水を啜る音でまずは答えた。次に、祥子が悪者のように睨みつけたかと思うと、その顔は

ぐしゃりと歪んだ。それは一瞬で出来事だつたはずなのに、祥子の目には千夏の顔が右側からゆづくりと潰れていくように入ローモーションで見えた。

「……いない」

そうして、その箱をすいつと祥子と香織の前に押し出した。香織は、わざと氣にしてい

ない風を裝つて箱を開けた。せつかく買ったのにもつたといない。しかし、千夏を苦しめる

ものなら早く消化してしまつたほうがいいのだ。そのほうが気持ちをおさめるのも早いだ

ろう。香織は、箱の中にある潰れたシュークリームを手に取つた。周りの生地は潰れ、中

からカスタードクリームと生クリームが漏れてベトベトだ。ただ、ケーキでなくよかつた

と思つた。ケーキならこれではすまなかつたはずだ。汚れてしまつた鞄のようにな、千夏の心は荒んでしまうだらう。

「はい。もう食べよ。」

香織は、祥子と千夏に一つずつそれを渡した。箱の中には二個しか入つていない。

「ありがと。一人も気にしないで食べて。でさ、あたしが部活やつていて、今日が模試な

の、親は知っているわけ。普通さ、おいしい夕飯でも作つておいてくれない？ それであ

たしがこれを出して、謝る。仲直り。上出来なシナリオでしょ？

それが、さつきメール

が来たの」

「なんて？」

聞きながら、香織がショークリームにかぶりつぐ。手の端からじま  
れ落ちそうになつた

カスターを舐め取る。

「ちょっと待つてね」

千夏は、汚れた手の指先をティッシュで拭き取ると、ポケットから携帯を取りだした。

床に開いて置くと、人差し指だけでボタンを押し、メールの画面を開いた。

「えっとね。今日はお兄ちゃんのところに行きます。泊まりです。

……それだけ。改め

て見るとまた腹が立つな

千夏から喧嘩の内容を聞いていない祥子にとっては、それほど怒ることなかと一瞬首

を傾げそうになつた。それを行動には移さなかつたものの、顔に表れてしまつたのだろう

香織が困ったように笑つた。

「この間の喧嘩の時ね、お父さんが最後に、お兄ちゃんはそんな子供じゃなかつたって言

つたんだつて。千夏のお兄ちゃん、この春大学生になつたけど、す  
ごいいい大学入つたし

ね」

頬を膨らませながら、千夏が香織を見る。しかし、香織は肩を竦めただけだ。事実でしょ、とばかりに。

「そっか……。そうなんだ。千夏も大変だね」

「そうだよ。だってさ、お兄ちゃんに対してあたしが「コンプレックスを持つてているのは親も知っているんだよ？」その上、その対象物と比べる暴言を吐いて、すぐにそこへ一人で泊まりに行くってどうなのよ！？ あたしは、何！？ 部活もやつちやいけないわけ？ そんなにいい大学に入るべき？……もつやだ。それで、ちょっと拗ねてここに来たの。本当に偶然。一人で家にいるのもなんか嫌だし、話ををして少し落ち着いたのか、千夏は手についたショークリームを舐めた。味は、評判通り最高だ。自分が安定すれば、この場の違和感に気づく。今日の部活は終わったのだ。なぜここに三人も集まつたのだろう。

「あれ？ どうして二人はここにいるの？ あたしは鍵がなかつたから半分諦めていたの。鍵が閉まついたら、廊下の『ござ』の上で休んで帰る？と思つていたんだよ？ まさかこの顔で電車に乗れないし」

千夏が、香織の顔を見る。香織も、最後の一囗を大口で食べ終えると、もぐもぐと口を数回動かした。「じっくん、と喉を鳴らして飲み込むと口を開く。

「私もそう思つていた。でも、試しにドアを開けてみようと思つたの。それに、なんだか気配を感じたというか……。吸い込まれるようになつたつていうか」

香織が、今度は話始めた。

「そうしたら、ドアが開いて中に祥子が座つていたのよ。私も悩みがあつてここにでゆつくり考えようとしていた。……実はね、今まで黙つていたけどうちの親、刑事なの」

この告白は、F-1を揺らすほどの衝撃を与えた。千夏と祥子は、今まで暗かつた空氣を吹き飛ばすように思い切り驚きの悲鳴を上げる。耳が裂けそうになり、香織は両手で耳を塞いだ。

「それにね。うち、お母さんが死んじゃつているんだよね」

次の告白は、今度は部屋の空氣を一気に暗くした。丸一年一緒にい

て、誰にも言えなか

つたのだ。もちろん友達を家に呼んだこともない。同情されるのが、嫌だった。香織に気づかれないように、千夏と祥子が一瞬視線を交わす。経験していな物にはなんと言葉を

かけてあげればいいのか分からぬ。

「私の悩みはまた千夏と違つてさ。比べられる兄弟もいないし、父親は家にほとんどないから自由だし、これって普通は文句ないよね。でもね、だからといつてそれなら私の進む道くらい自分で決めさせて欲しいの。でも、そこだけは譲つてくれない。どうして頭？」

なしに反対されなきやいけないのよ。父親だって同じ」としているくせに。信じられない。

腹が立つ、というか、虚しいよ。反対するというなら、父親は今の仕事に誇りをもつていい

ないんでしょうね

今度は、香織の前で千夏が大きく頷いた。

「何を言つているの！　いいじゃん、かつこいいじゃん！　刑事。女刑事。拳銃もつてさ、犯人を追いつめるの！」

香織はふつと息を吐いて微笑む。その横顔は、祥子から見て同じ歳とは思えないほど大人びていた。普段、香織がどこか同学年より一步先を歩いている感じがするのは、そんなことが由来しているのだろうか。祥子は、黙つて聞きながら考えた。

「千夏。刑事だからといっていつも拳銃を持てるわけでもないし、そんなに凶悪な事件ばっかりあつたら大変でしょう？　刑事なんて言つほど危険じゃないのよ。大事な場面で切り抜けさえすれば。たとえ、もし仕事で死ぬことがあつたとしても……それはそれよ。残される者の気持ちなんて考えていたら、働けない」

「まあねー。そうかもしれないね。いいじゃん、やりたいことをや

るつよ！」

千夏は、さつきまで怒っていたのが嘘のように輝いた顔をした。香織の方へ拳を突き上げているのだから、どうやら気分が盛り上がりしているのは間違いないらしい。しかし、祥子にはそれが小さな問題だった。

「自分のために進路を決めるのって、当たり前だと思う。それに、やりたい仕事を見つけるのも大切なことだと思つ」

祥子が、手の汚れを見つめて言うと、視界の隅で一人が祥子を見つめるのが分かった。意図せずとも、その声はどこか緊張してしまつたようだ。そして多少の嫌悪感を含んでいたのかもしれない。

「……でもさ、香織。結婚したらどうするの？ ううん。それよりも前、刑事になつて彼氏が出来たら心配させても平氣？ もつと前、今よ。今この時、もしも達也くんに嫌だつて言われたら？」

「……達也？」

香織は、意外にも言葉を失つた。いくらか視線を泳がせたあと、いつものように少しだ

け肩を竦める。香織にとっては、達也など今この時を形成する一部分に過ぎないのだろう

か。父親が刑事で、母親がいない。その事実は驚きをもたらしたが、祥子にはただ羨まし

かつた。好きな人が側にいてくれるのに、職業などなんでもいいではないかと思つてしま

う。香織は、何が大事なのか分かつていないので、祥子は、そう思ひながら香織の答えを

待つた。

「……達也ね。分からないよ」

そう言い、考え込む香織に、祥子はどこか虚しくなつた。自分ならば、もしも達也と付き合つたなら、まずは彼の気持ちを先に考えて行動するだろう。それは、毎日の日常においてから、将来に渡るまで。付き合えば、そ

れが当然ではないのか。その考えは育った環境が影響しているものもあるだろ?。普段から相手の顔色を窺い、そしてなにより周りの迷惑にもならず、少しでも役に立てばと思つ祥子なりの考えだつた。

香織はそのあと、頭を悩ませているのか口を開ざした。

「まあ、それじゃあ。香織の問題はそれとして。祥子は何を悩んでいるわけ?」

千夏が、今度は祥子に視点をあてた。まるでカウンセラーにでもなつたように、胸の前でしつかりと腕を組んでいる。祥子は、言葉に詰まる。祥子の問題は、二人と違つてそれほど大きなこととも思えなかつた。ましてや、達也に關してのことと香織に言つわけにいかない。

「実は、あたしそんなに大きな理由があるわけではないの。でも、すべてにおいてバランスがうまく取れないだけ」

「バランス……?」

千夏が繰り返し、香織も祥子をじっと見つめた。

「……うん。バランス。一人の問題と似ているとも言えるけど、一番大したいしたことない仕方ないこと。家も勉強も、……部活も。家、兄弟が下に三人もいるでしょう? 学費がかかるから、出来れば国立に行きたいの。でも、今そんな勉強する時間ないでしょ?」「分かるよ。それだけでストレスだよね。……で?」

千夏は、元気が出てきたようで、食べ終えたシュークリームの箱を丁寧につぶし始めながら聞いた。

「うん。それで、最近は勉強をしていても部活のことが気になつて集中出来ないの。でも、部活に来ると勉強が気になつてしまふの。どっちもつまくやりたいのに。それに……」

祥子は、恋愛の不安定さもうち明けそうになり、慌てて口をつぐんだ。話をすり替える。

「練習……。練習試合ね、今日もめちゃくちゃだつたでしょ。身が入らないの。確かにあたしがへたくそで迷惑をかけた。でも、後輩にチョンジをされた。それなら……、あたしはこの部活にいらない

んじやないかな……つて

話が進んでいくうちに、祥子は涙ぐみ、千夏は目を見開いた。

「何を言つているの……？」

先ほどの様子と一転、千夏の言葉には少しだけ剣があった。千夏は、自分が部活において勉強する時間がないので迷つただけだ。自分の存在価値に悩んだことはなかつた。

しかし、目の前で泣いている祥子は自分が必要ないと悩んでいるというのだ。理解出来ない一方で、それが間違つた判断だというのが千夏には分かる。それを言葉で順番に説明したいのに、怒りの方が先に沸いてきてしまう。それをフォローするように香織が引き継ぐ。「祥子。確かに、あんたの今日のプレーは最悪。足は動かない。声は出ない。相手からの攻撃スパイクも、確実に狙われていた。あれは交換するしかなかつたよ」

香織の指摘は容赦ない。しかし香織のいいところは、あとに救いの言葉も待つている。

「でも、それはよく分かるよ。つまり、祥子は間違つていなって事」

「間違つていない……？」

祥子が首を傾げる。千夏の反応が当たり前だと思つていたので、若干驚いた。

「そうだよ。誰でもこの時期不安になつていてる。受験だけでもよ。

それなのに、うちの部はあと二ヶ月以上は最低でも拘束される。どれも完璧にこなしたくなればなるほど不安になるのよ。適当な人間ならそつはならない。別に祥子が弱いわけでも、へたくそなわけでもない」

「ちょっと、香織。香織だつて分かつていてるでしょ。この子のこの雰囲気がチームを支えてるよ。負けそうでみんながピリピリしている時も、この子がみ

んなを励ましているじ

やない！ いらないわけない。それをこの子はひとつも分かっていない！」

千夏が香織に食つてかかる。それを冷静に領き返すと、香織が言つ。「だから、言つたでしょ。今日は最低だつたけど、間違つていなつて。今は、祥子が自分

分を必要じやないと想ひこんでいるところひとつ、私達が必要だと言つこと。この二つが

正反対の位置にあるかは別問題よ」

「ああ、もういい。香織の言つことはたまにややこしいよ。難しいから簡単に続けて」

千夏が、さじを投げる。それを聞いて香織は笑つた。

「千夏が言つこともたまにややこしいよ。つまりね、ここどころか私達が祥子を必要だよ！」

と言つても変わらないつて事よ」

祥子も、首を傾げる。自分の気持ちさえも、分析など完璧にできないのが普通だ。千夏

が、ぎゅっと目を瞑り最大限に脳を使って絞り出した答えを言つ。

「つまり、こういうことかな。私達にとって祥子は必要だけど、それを自分で認めなけれ

ばいけないってこと？」

香織が、持つっていたボールを千夏に投げた。それを千夏が受け取り、足の上に乗せる。

「正解。そこよ。今千夏が言つたように、祥子は不安になつているの。ううん。これは私達一人にも言えることよ。不満は不安に繋がるし、ストレスはマイナス思考にもなる」

「あたしは、お兄ちゃんと比べられるのを嫌がつてゐる」

「そう。絶対に聞けば親は答えるよ。千夏の両親だつてね。あなたもお兄ちゃんも同じくら大事なの。でも、そのままそつくり信じられる？」

「うーん、信じないわけではないよ。でも、行動は伴っていないと思つた。少なくとも。……今日のことを見てよ！」

また熱くなり始める千夏に、香織は両手で制止をかけた。

「まあまあ。そういうこと。言葉って大事だけれども、言葉だけでは不十分なのよ。結局ね。私だって……まあ同じようなもの。うちは言葉にも辿り着かないだろうけどね」

香織は、大きくため息を吐いた。香織でさえも、不安になるときはたくさんあるのだ。

「じゃあさ、どうしたらいいと思つ？」

千夏が、香織に言つた。

「え？」

香織は、ここまで論じたものの、だからと書いて解決法があるわけではなかつた。千夏の膝からボールを取ると、それを指で回しながら考えた。どうすれば、自分の存在を確認出来るだろう。これから未来へ向かつて歩む道を、確実に選べるだろう。そんな方法、あるのだろうか。

「ねえ、結局はわたしが強くならないといけないのかも……」

祥子が、さらに落ち込んだ声で言つた。香織も頷く。

「確かに、自分で自信を付けないと前には進めないよ。でも、今はその自信の付け方もわからない。そうでしょう？　がむしゃらにボールを追つても、鉛筆を持つても、胸につかえがあつたら集中出来ないよね。打ち込む時は、とことん！……よし。それなら、自信をつけさせてもらえばいいんじゃない？」

香織の言葉に、千夏は驚いた。

「どういふこと？　戦争でもするつもり？」

千夏が言つと、香織はボールを回すのを止めてにやつと笑つた。口角だけが上がっているのを見て、祥子の背筋が寒くなる。

「戦争か……。それもいいかもね」

香織は、片手を顎の下に置いて考え始めた。部屋の中には、食べ終えたシュークリーム

の甘い匂いが広がる。

「ちょっと……。あたし今日凄くむかついていたけど。結構スッキリしたよ。戦争なんて。

そんなこと出来るの？」

千夏は、威勢はいいが、引き際も早い。強気で飛び出す割には、びびつて逃げ帰る試合

もしばしばだ。

「出来るかは分からない。作戦もないけど、とりあえず考えてみるのも面白いね。これもひとつストレス解消よ」

そう言うと、香織は楽しそうにくつくと笑った。釣られて千夏も口だけ笑みを浮かべる。

「だから、千夏が祥子を怒る理由はないの。だって、祥子は間違つていらないんだから」

千夏は、口に浮かんでいた笑みを引っ込め、罰の悪そうな顔をした。小さく謝る。

「いいよ。千夏がそんな風に思つてくれていたのは嬉しかつたし」祥子が大げさに両手を顔の前で振ると、香織は笑つた。そして千夏に向かつて言つ。

「じゃあ、今のこの場面を文学的名言で表してよ。千夏」「はあ？」

香織の言葉に千夏は一瞬たじろいだが、すぐ握り拳を作った右手を突き上げてに言つた。

「『人は得てして自分の不幸に敏感なものである!』かな」

思いの外千夏の声は大きく、演劇部にでも入れそうなほど抑揚の付けられたものだった。

しかし、名言とは知る人ぞ知る、理解出来るからこそ意味のあるものだ。これを二人が

知る由もなかつた。香織がすかさず突っ込む。

「それ、何? 誰の使い回し?」

千夏は高く宙を彷徨う右手を下ろし、苦笑いをした。祥子は今日この部室に来て、何度も首を傾げたことだろう。

「これは日野原重明といつ作家兼お医者さんの言葉よ。まさに今のがたし達。どう？」

「間違つてはいないけど、今のあんた凄い顔をしていたよ」  
声を上げて二人が笑う。そんな彼女たちを、祥子は少しだけ呆れた気持ちで見つめた。

戦争など出来るはずない。やはり自分の悩みが一番大きい気がしてきた、祥子は一人溜め息を吐いた。

## 5 第四次戦争

京子は、お弁当を食べ終えるとすぐ田の当たる教室にやって来た。ここは進路指導室と違つて部屋中に太陽の光が降り注ぐ。廊下を、数人の女子生徒が楽しそうに笑いながら過ぎて行くのが聞こえた。グラウンドからは、昼休みに練習する部活の声が響く。温かい春、光を浴びるだけで瞼が重くなる。しかし、田を開じたところで、頭の上から声が振ってきた。

「おい、お前。練習わぼつているくせに、ここで寝るのは許さないぞ」

京子が、机につきそつになつた頭を上げると、田の前には見慣れた顔があつた。

「せんせえ……。でも眠い。こんなに田の当たつ最高の部屋にいるなんてずるい……」

「あほか！ そんなに眠いなら早く部活へ行け！ お前、昨日の練習で、まだ肘が曲がつていたぞ。スパイクを打つ姿勢はこうだ」

そう、ここはヒゲの担当する日本史の教師がいる資料室だ。日本史を専攻している京子は、月に数回授業の後にこうしてヒゲに補修をしてもらつのだ。特に日本史の点数が著しく悪いので、ヒゲも京子が昼の練習を休んで来ても文句は言わずに教えてくれる。それほど、京子の点数は危険指数なのだ。しかし、実際京子は日本史が苦手な訳ではなかつた。

「はーい」

そう言つて、京子も机に座つたまま腕だけを振り上げる。時々、こづして補修をしているうちに、最後はバレーの補修をしていることもある。だが、それも京子にとつてはをして問題ではなかつた。ただ、ヒゲには問題のようだ。再びスパイクのフォームを練習しかけた京子を横目で眺めると、すぐにヒゲは自分の前に並べていた教科書を閉じたのだ。

「お前。本当に体育館へ行け。今すぐ走つてこい。スパイク五十本だ。夕方の練習までに治せるようにしておけ」

髭は立ち上がると、京子の右腕をそのまま掴んで立たせた。そして二人が並ぶと、モデルをする京子のほうが大きかつた。多少目線を下げる、京子が不満そうに髭を見た。男の目はごま粒のように小さく垂れている。どれくらいの周期で剃っているのかは不明だが、鼻の下の髭は自由にのさばつている。薄い唇に、薄くなりかけている毛髪。人から見れば、ただのオヤジに過ぎない。それでも、京子は食らいついた。

「先生。でも、今度の日本史の成績が悪かつたら、どうしてくれるの？」

京子は、教科書を嫌々胸に抱えながらヒゲに言つた。ヒゲは、左手だけを机の上に置いて言った。

「知らん。お前、もつと勉強しろ。部活終わつて帰つたら、すぐに寝ていいだろ？」「

「もしかして……。見ていいる？ あたしの部屋……」

京子が首を少し縮めて、まるで不審者扱いをするように目を細めてヒゲを見た。それが

癪に障つたのか、ヒゲはさつきよりも大きな声で言つた。

「ほら！ 勉強しないなら早く部活へ行け！」

今度は立ち上がり、京子の背中をぐいぐい押す。そうなつては、もうここに居るわけにはいかなかつた。他の教師は、大体昼休み職員室についてるので資料室は一人だけだ。もしも

誰かに見られたら、京子は怪しまれるだらうか。部活の顧問と部員。日本史の教員と生徒。その間には、数ある他の教科の担任よりも密接な線ができる。多少甘くなるところもあるし、その線があるがゆえに無駄な仕事を任せられることも多い。

それでも、京子にと

つてはそれが嫌なことではなかつたのだ。ここへ来ることが一つの

目的。ここにヒゲに会

うことが、一つの安定剤だったのだ。決して報われることはない、この憐い気持ちのゆく

えはどうなるのだろうか。その答えを貰えぬまま、結局京子は資料室を追いだされてしま

つた。背中すれすれのところでドアを閉められる。京子がその中を振り返り、ドアにはめ

込まれたガラス窓から中を見ると、ヒゲが太陽の光の中をすでに背中を向けて座っていた。

こんな挑戦を繰り返して何になるのだろう。京子がここへ来る目的を、ヒゲは分かつて

いるはずだ。しかし、無言でそれ以上先へ進むことは拒絶する。言葉にしたわけでも、されたわけでもない。それでも、ひとつひとつ、些細な動作で意図してくるのだ。たとえば、今日もそうだ。机の上に乗せた左手はわざとだ。京子に左手の薬指に嵌る指輪を見せるためだ。無言の圧迫。その意味を理解すると、何も言えなくなってしまう。ヒゲはそれを承知であり、それを納得した行動を求めているのだ。京子はこの関係をどうにかしたいと思つてているわけではない。しかし、気持ちだけでも知つて貰いたいと願つてしまつ。それも、報われないのである。

「あれ？ 京子？」

呼ばれた声にびくつと肩を奮わせ振り向くと、廊下の隅から美香が顔を出した。階段を上がってきたのだろう。ジャージ姿で、おだんごに結んだ髪の毛からは何本かが肩に落ちている。昼の練習メニューを終えたのだ。頬は赤く、息も上がっているようだ。

「休むつて聞いたけど、やっぱり日本史かー。苦手なのが受験教科だときつこよねー。あ、一緒に部室行こうよー。ちょっと待つてい

て」

京子の手の中にある教科書に視線を走らせるが、美香は渋い顔をして言った。

「あ、『めんね……』

こうして仲間が頑張っている姿を田の当たりにすると、自分が無駄にさぼっている罪悪感で押し潰されそうになるのだ。しかしこの気持ちを誰かに話すことも出来ず、うち明けたところで分かつては貰えないだろう。気持ち悪がれたらどうしようかと不安になる。

「いいつて！ ちょっとそこにしてね！」

美香はすっと京子の脇を通り抜けると、資料室のドアを二回ノックした。返事が聞こえ

る前にドアを開けると、すっと顔だけ覗かせる。顧問が参加しない朝と昼の練習は、こう

してメニューを終えるとキャプテンが報告に来るのが習慣となつている。それを美香が

今まで長い月日やり続けていたのは知っていた。しかし、こうして手慣れた動作でこなさ

れると、どうにも羨ましくなる。一人の、お決まりの作業になつているのだろう、と。だ

からといって自分がキャプテンに向いていとは思えない。责任感があるわけでも、他人

より声を出すわけでもない。

セッターに上げられたボールを、打つて決めるだけだ。それも、この身長のおかげで。

そんな卑屈に物事を考へていると、美香が資料室から顔を引っ込んだ。美香の報告をす

る声のあとに、ヒゲが何かを言つたがはつきりとは聞こえなかつた。美香が返事を返してドアを閉める。すると、勢いよく京子の方を向いたかと思うと、走つて抱きついてきた。

「うわ！ 美香、あたし制服！ 汗つくじやん！」

京子が身体を離そとすると、それでも美香は腕を掴んできた。

「ヒゲがねー」

その言葉に、一瞬京子の身体が固まる。しかし、次に放たれた言

葉は現実でしかなかつた。

「夕方の練習は、京子に最初スパイク五十本打たせろつてー。きついねー」

最後のあの言葉は、そんなにくだらない内容だつたのだ。思わず、京子はため息を吐く。それを、スパイクを嫌がつてゐるのだと勘違ひした美香は、自分よりも十センチは高いであろう京子の頭に手を伸ばして撫でた。

「大丈夫、おまけしてあげるから。さ、ちょっと部室行こいつ。まだ昼休み少しあるし」

部室を使う時間は、もう残り限られている。自分たちが引退すれば、あの部屋は後輩のものになるのだ。自分たちの簪のように思つていたが、結局は一時的な回し物。そう思つと、なぜかそのあと少しの時間を大事にしたくなる。しかし、美香がこんなにも部室に誘うことは珍しい。

「ねえ、どうしてそんなに部室行きたいの？ 夕方でいいよ。なんかお腹空いたやつた……」

京子は、諦めて自分腕を美香に絡めながら言つた。頭を撫でられたら、少しだけ甘えたくなつた。力が抜けた半身を美香に預け、階段を下る。体育館までは、あと一つ階段を下りるだけだ。

「そう言つと思つた。あのね、千夏が京子のために購買でお菓子を買つてあげていたよ」

その言葉に、京子の目が輝いた。

「早く行こいつー！」

今度は、美香を引つ張るようにして歩く。お菓子があるならば、一刻の時間も無駄には出来ない。全てを腹におさめたいではないか。「でね、なんで部室に行くかつていうと、今面白い話があるわけ」

美香が、先を急ぐ京子の背中に言つた。京子は階段を駆け足で下りると、美香を見上げて眉をひそめた。

「……面白い話？」

「うん。 じじだと誰かに聞かれるから、 部室に行つて話すよ。 多分、 香織が上手く説明してくれるんじゃないかな」

そう言つと、 美香は歩きながら頭のおだんじを整え始めた。

部室では、すでに緊急ミーティングのような雰囲気だった。 とはいっても、 下学年の後輩が

いるわけでもなく、 そこは部活前の談笑とさほど変わらない。 違うことといえば、 メンバーが定位置に制服で座り、 真ん中には一リットルのペットボトル入りジュースと紙コップが並べられている。 誰かの誕生日でもないはずなのに、 こんなにきちんとコップが準備されていることは未だかつてない。

「……何？ どうしたの？」

部室のドアを開けた途端、 四つの顔が自分に集中したのに、 若干京子は驚いた。 その背中を美香がそつと押して中にいた。

「閉めて、閉めて」

二人が入ると、 千夏がドアをしっかりと閉めたことを確認する。 昼の練習を終え、 後片づけをしている他の部活の声が、 廊下から聞こえた。 お菓子を中心に、 円陣を組んで座る。

しかし誰も、 何も話さない。 京子の皿には、 好物のビスケットにチヨコレートが乗つたお

菓子しか見えなかつた。 そつと手を伸ばす。 セツモ美香は、 千夏が買つてくれたといつていたはずだ。 だが、 その手が袋に触れた時、 千夏が言つた。

「……待つて」

京子の手が宙で止まる。 他四人も相手の顔色を窺つかのように顔を見合させていた。

「京子、 これは作戦会議なの。 ただお菓子を食べる集まりじゃないよ」

京子は、何のことか分からぬまま出していた手を引っ込めた。作戦会議。バレーの試合についてだらうか。それならば、余計お菓子を食べながらの方が頭も働くし、体育館の

コートで練習しながらのほうが効率的だ。

「作戦？ 県大のフォーメーションとか？ あたしのスパイクが最近鈍っているのは認め

るよ。とりあえず、夕練もスパイク五十本も入るし」

そう言ってから、京子は美香を確認するように見た。美香は、京子にお構いなしにお菓子だけを見つめていた。なんだ……。なんだというのだ。

「……実はね、京子。最近、ストレスない？ 家に対してもか。学校、受験に対して」

香織が、今まで下げていた視線を京子に合わせて言った。

「ストレス……？」

お菓子にいつ手を伸ばそつかと考えていたが、京子は膝の上で両手をぎゅっと握る。香

織は京子の言葉に頷いた。そして、千夏へと視線を移す。

「そう。ストレスだよ。京子、さつきも日本史を聞きに行っていたんでしよう？ 京子は

モデルもしている。勉強して部活。それだけでも大変でしょう。時間が足りない。それに大人達はすべて完璧にこなせといるやうじゃない。自分たちは何が出来ているのよ。

……とにかく、自分の価値を見いだしして、周りに必要とされていることを確認してみない？

大人達はおしつけるだけでしょ？ あたしたちだつて怒つて、自分の意志を固める意

味を込めて爆発させてみようよ」

千夏が張り切つて一気に言う。彼女の中では、何か一大イベントが

始まりかけているよ

うだ。だが、訳が分からぬ。京子は、困ったように香織を見た。

「そういうこと」

香織も肩を竦めて一言付け足す。京子は、祥子と美香と若菜を見たが、三人とも異論はないようだ。大人達を心配させる……？京子にとつて、なぜそんなことをするのか理解できなかつた。疑問を一つずつ頭の中で整理して口に出す。

「ちょっと待つて……。みんな何を言つてゐるの？ そりや、あたしはモデルも忙しいけど、やれる範囲だから辛くはない。それに高校を出たらもつと自由に出来るようにな

るし今は別にいいの。受験も……、日本史はそつや点数が取れないからあんな補修みたいなことをしているけど。やめよつと思えばヒゲも何も……言わないと思つ」

周りには敢えて言わぬいが、京子が自分から押し掛けているようなものだ。ヒゲは、京子が行かなくとも恐らく心配などはせず、むしろほつとするだらうと考えて少し悲しくなる。

「それに、うちの親は放任主義だし、いい大学に入れとも言われない。将来は不安だけど、悲觀はしていない」

京子は、助けを求めるように美香を見た。部室に連れてきたのはこんなことが理由だ

言うのか。くだらない。今すぐ腰を上げよつとするど、祥子がそれを見破つたのかコップにジュースを注いだ。半ば、京子の手に押しつけるよつとして引く留める。

「え？ ジャあ、京子は毎日に不満はないの？ 」の息苦しくて、  
狭苦しい世界に満足している？」

美香が、初めて意見を述べた。助けを求めるつもりが、押されてしまう。しかし、それは押しつけるようなものではなく、あくまでキャプテンの立場と同じだった。京子の根本的な、心の潜んだ潜在意識を引き出そうとする。美香はセッターだ。周りの人間の技術を

よく見ている。アタッカーがどの位置にボールを貰えばいいスペイクが打てるのかを熟知

し、それを引き出す。自分でも気づかないものを、美香は呼び起こそのだ。それは静かで、

的確だった。京子は渋々頷いた。ジュースを一気に胃へ流し込む。

「んー、ないわけではない。でも、みんなはどんな不満があるの？」  
その問いに、周りが顔を見合せた。これは、京子がここへ来る前にすでに話し合われたことなのだろう。香織が回りに田配せすると、小さな咳払いをしてから話し始めた。千

夏が家で兄弟と比べられる上に、受験のストレスで部活に集中出来ないこと。香織が刑事になりたいのに、父親の反感を得ていること。そして、祥子は国立に行かなればいけないプレッシャーと家族の手伝いに追われている。さらに、部活での存在意義まで見失いか

けていること。一時は愚痴を言つだけでスッキリしたが、若菜と美香に話したら、なにか楽しみながら大人達に反抗する企てに話が発展したことを説明してくれた。香織が、そんなことを言い出すのは京子にとっては意外だった。彼女は、どこか

102

周りとは違つてしらけ

た部分があると踏んでいた。ダメなら諦める。反抗されたら上手く切り抜ける。それが彼女をより大人っぽく見せていくと思つた。しかし、この話をしている時の香織は、真剣な癖にどこか子供っぽかった。おもちゃを取り上げられて泣いている子供のようにも見えたし、それなのに目は輝いていた。香織が全て話しあると、京子は言つた。

「大体分かったよ。ちょっと午後の授業で考えさせて。私には、それが意味のあるようにはまだ思えないの。でも……、みんなが困っているし、何かしてみたい気持ちもあるのは確か。今日の練習が終わったら、私なりの答えを言うよ」

京子は、それだけ言うと我慢できないように菓子の袋を開けた。中のクッキーを口の中

へ放り込む。かみ碎く音が部室の中に響いた。校庭にも響く音で、予鈴のチャイムが鳴った。それぞれが教室に帰らなければならぬ。

固まつて部室を出たが、朝とは違つてそのうちに別れて階段を上るのが常だ。京子が歩いていると、後ろから美香がやつて來た。

「京子！ ねえ、なんとなく部室に連れて来ちゃつたけど、無理はしないでね。何か行動を起して、先生や親にばれて怒られることになると、推薦を希望しているなら内申に響くでしょ。やばいよね」  
参加しないのもあり、ということか。京子は曖昧に頷く。  
「うん。分かっている。でも、私推薦は狙っていないの。だからといつて、あまり張り切つて賛成でもないのよね……」

京子は、校舎までの道を歩きながら、ため息を吐いた。メンバーに言つた言葉は事実だ。そこまで反抗する理由は、今の京子に見当たらないのだ。

「まあ、順調に物事が進んでいるならいいんじゃない。幸せなことだよ」

美香は、綺麗にまとめたお団子頭を、縦に揺らして頷いた。外見が整っているがゆえにモテルが出来ても、そういう才能がない京子には、美香の髪のアレンジ力が羨ましい。じつは、このかを、覗き込むようにして見た。

「といつても、幸せを感じるほどでもないんだけどね。そういうえば、美香は何の問題あるの？」

京子達は、体育館からの渡り廊下を抜け、校舎に入った。北向きであるこの場所は、じめっとしていつもうす寒い。美香は、京子の問いに一瞬顔を曇らせたかに見えたが、次に窓からの光に顔を照らされた時には、その表情はいつもと変わらなかつた。一瞬白目をしてとぼけると、京子の肩に腕を回す。

「まあ、我が家にも色々あるってことよ」

美香の曖昧な返事に京子も深く聞こつとはしなかつた。先ほどの三人の話を聞いただけでもかなりお腹がいっぱいだ。それでも、本当の自分のお腹はまだ幾分余裕がある。京子は、授業が始まるまでにもうひとつお菓子が食べられないかと頭の中で算段してみる。

「でも、京子つて恋愛については不満がないの？」

「え……？」

京子は、驚いて美香を見たが、彼女はもう笑っていた。京子の絡めた腕に、ぎゅっと力が入る。

「……そういえば、最近ヒゲもきついことやらせるよねー。ま、試合が近いし当然だけどさ。あたし達のありがたみも分かつてほしいつて。本当に」

聞き間違いだろうか。京子は、自分の好きな相手を誰かに相談したこともないし、態度には充分気をつけているつもりだ。

「あ、教室着いちゃつた。じゃあ、また放課後ね」

「え？ ちょっと……」

美香が言つたことはどういふことなのだろうか。京子の隠してい

る気持ちを知つていてあんなことを言つたのか。知られてしまつたのかと思つと、急に心臓が高鳴る。さつさと教室に入つていつしまつた美香は、すぐに他の友達と話し始めていて声もかけられない。京子も席につかないと間に合わなくなつてしまつ。しかし、最後に言われた一言は、京子の気持ちを傾けるには十分すぎるものだつた。

\*

午後の授業は、京子にとつて集中できないものになつてしまつた。最後に美香の放つた

言葉を考えれば考へるほど、それは今がチャンスだと思えた。ヒゲにとつて、自分がどれくらい大切なもののなか確かめたかつた。この作戦を実行すれば、何かが変わるものではないか。ヒゲの中で、自分はただの生徒でしかないのは分かつてゐる。もし何も行動を移して貰えないなら、それで諦めがつくと思えたのだ。出した結論、それは香織の意見に対し、賛成するものでしかなかつた。

しかし、京子は放課後に部室へ行つてもメンバーに結論は言わなかつた。スパイクを集中して言られた通りの本数を決めた。肘を伸ばして、腹に力を入れる。何度かやるうちに、癖が一度直つたと自分でも思えた。しかしそう思つても、体調やコンディション次第でまた戻つてしまつ。一瞬の動作は、指導者でないと分からなかつたりもする。ヒゲは、部活が開始されるとすぐに参加した。コートの隅から、自分のフォームを見られると、緊張で身体が固くなつてしまつ。ヒゲは京子のスパイクを見ていたが、何も言わなかつた。褒めてくれない。注意もしてくれない。彼は、いつもそうだ。他のメンバーには、必要以上に指摘することがあつても、京子に対してもミーティングや試合の時でしか注意をしない。呼ぶこともない。どうしても、京子にはそれが許せなかつた。自分が好きな相手に従つているようで、馬鹿らしくなつた。そう思えば思うほど、京子はヒゲを見てしまつ。メンバーは、京子がヒゲのことを睨んでいると見ている者も少なくなかつた。横目でヒゲの目線を確認しながら

ら、京子は今日もスパイクを打つた。そんな気持ちで集中できるはずがなかつた。

練習試終わる頃、京子の気持ちは次第に固まつていた。有り難いことに、誰も京子の答えを聞こうとはしなかつた。ゆつくりと考え手貰おうと氣を遣われてはいるようでもあつた。しかし、それ以上に自分には悩みがないと思われてはいるような氣もした。この悩みは、誰にもうち明けることが出来ない。なにせ陰で、メンバーは口を開けばヒゲの悪口ばかり言つているのだ。そんな中で、京子がヒゲに好意を抱いていると知つたらなんというだろうか。からかわれるだろうか。この計画をやめようとするだろうか。いや、そんなことはないだろう。好きな理由を聞かれるだろうか……。そんなものは京子にも分からなかつた。怒られてばかりで、優しくされたことなど記憶にはない。毎日顔を合わせてはいるのに、交わす言葉も少ない。それなのに、気が付いた時にはヒゲの指輪を田で追つっていた。自分のスパイクを打つ瞬間を見られるのだと思つと緊張した。怪我をして足を見せる時などは、拒絶した。触られたら、平常心を保てるとは思えなかつたのだ。好きになるのに理由はいらない。初めてその言葉が理解できる。様々なことを考へてはいる間に、夕陽は静かに沈んでいった。赤い夕日の光が体育館の床を照らす。そうして気づくと、外はいつのまにか真つ暗になつてはいるのだ。

練習が終わつたあと、静かな作戦会議が行われることとなつた。静まりかえつた部室で、

香織が京子を見つめて言つた。

「じゃあ、京子も賛成つて事でいいのね」

その言葉に、京子はしつかりと頷いた。額に浮かんだ汗を、大きめのタオルで拭う。まだ四月だというのに、気温は上昇を続けてゐる。今年の夏も暑くなりそうだ。そう考へた次には、もう夏にはこの体育館にいないのだと悟つた。高校にいるのに、体育館に通わないことを想像するだけで違和感があつた。

「よかつたよ。これで全員だ。でも、反抗運動つて何をするの？」

まさか窓ガラスを割つたりするわけじゃないよね？」

千夏が、着替え終わった制服のブラウスの袖を捲りながら言つた。その類はうつすらと赤く上氣している。京子は唇に飲み残したジュースを、コップへと注いだ。

「何を言つているの、千夏。そんなことしたら、本当に罪になるつて」

その脇から美香が言つ。美香は、腕に再び香水をかけているが、もう誰も文句を言わなかつた。ただ、若菜の目がちらりとその瓶を追う。一度文句を言おうとしたのか口を開いたが、彼女は諦めたようにな首を振つて閉じた。

「それじゃあ、いつそ勉強をやめようよー。みんなで最悪の点数を取るの。それか、今から部活の合宿をするとかー」

祥子が提案する。彼女の目的は家族であり部活だ。家族に勉強が出来ないことを見せつけ、今の不自由な実態を晒す。その上で、バレーの自信をつけ自分の存在を確かめる。部活での絆を確認出来たら尚更良かつた。技術が向上出来れば文句ない。しかし、それもまたもや美香の反撃を食らつた。

「駄目だよ。そんなの。この作戦のターゲットの中には、ヒゲも含まれているんだよ。合宿なんかしたら思う壺だよ。あたしたちの今の状況は、決して分かつて貰えない」

「そつか……」

祥子は首を縮ませた。なかなか全員の希望通りに行うのは難しいのかもしれない。自分の願いだけではない。この辛い状況を、分かつてもらいたいだけなのだ。それに高校生が、犯罪にかかわらずに悪事を成し遂げるなど限られている。誰もがそう思つた時だつた。

「ねえ、聞いてくれる?」

今までずっと黙つていた若菜が、初めて声を出した。みんなが話している間、ずっと一人考え込んでいたのだ。他の五人は、若菜の次の言葉を待つた。

「あのね、誘拐作戦っていうのはどう?」

若菜が、真剣な顔ではつきりと言ひた。

「……え？ 誘拐作戦？」

最初に言葉が出たのは千夏だった。

「ちょっと……。それは危ないんじゃない？ みんなでどこかへ隠れに行くつてこと？ それだとエスケープになっちゃうよ。……ま、それもいいか」

千夏は結論を焦りがちだ。誰かと話していくも、途中で割つて入りその結末を知りたが

る。それか、勝手に推測する。読書好きの彼女は、必ず最初に本のラストを把握してしま

うらしい。それが一番興奮するところだから、京子には理解できない。

「行くつてどこへ？」

「それはやりすぎかもよ？」

祥子も美香も不安がる。顔を見合させて、苦笑いを浮かべる。

「あたしは食料さえあればどこでもいいよ。つまり金銭面に困らなければね」

京子は、賛成した。むしろせっかく行動を起こすと決めたのなら派手にやつたほうがいい。

「……違うよ。みんなで逃げにしてどこにあるの。学校や部活をさぼつて、いざ帰ってきたら大騒ぎ。退学にはなりたくないからね。どこかへ行つて警察に保護されても恥ずかしいで

しょ

若菜が、みんなの前に人差し指を出す。よく聞きなさい、と顔が言つている。

「この中で、一人の犠牲者を決めるわ」

若菜の言葉で、部室に緊張が走る。

「えつ！ ……犠牲者？」

千夏が悲鳴のような声を上げ、隣に座っている香織に窘められた。

廊下にいる後輩に話

「つまり、一人が誘拐されるの。といつても犯人はいないよ。言つ

を盗み聞きされたら困るのだ。

「つまり、一人が誘拐されるの。といつても犯人はいないよ。言つなれば、残りの五人が

犯人。みんな、やるからには中途半端でいいと思つているの？ 適当に親に反抗して、ま

た押さえつけられるの？ 嫌々部活を続けるの？」

犯人がいないとはいえ、一人が姿を消し、周りは口裏を合わせる。ニユースになるだろ

うか。退学になるだらうか。余計な不安をじょいこむことになつてしまわなか。若菜の提案を、誰もがすぐには肯定できなかつた。

「若菜。そんなことを言つからには、何か考えがあるの？ 若菜はバレーの推薦を貰つんだよね？ 大学の推薦権なくなるかもしれないよ？ それに、誰が犠牲になればいいってこと？」

香織が、的確に問題点を上げていく。ここからは、もうふざけ半分ではない。覚悟を決めなければいけない、という張りつめた空氣に変わっていく。慎重な祥子は、ノートにメモをしようと鞄から紙を出したが、すぐに若菜に止められた。あとで証拠になるものを残すわけにはいかないのだ。

「じゃあ、今から話すね。祥子だけでなく、何もメモをしないで。時間はない。問題点や反論があれば、相談していこう。目標とする日は一週間後。そう、ちょうどゴールデンウィークの初日。そうすれば、少なくとも学校を休まなくて済むわ。勉強や単位に影響を及ぼさない問題はクリア」

「ぐくり、誰もの喉が鳴った。作戦会議の時間も限られているのだ。その中で、精一杯戦わねばならない。若菜が、確認するように頷き、再び口を開いた。

## 6 第五次戦争

「要是は簡単なこと。みんな自分の存在を確かめたり、誰かに心配してほしいのよね？　あ、ここでの反論は今はなし。つまり、まとめるとそういうことなわけ」

若菜の言葉に、千夏が口を開いたのを彼女が見とがめ、先に牽制した。

「で、どうやつたら心配してもらえるか。結果を考えて、その間の方式を並べればいいだけ。それだけ。ザツツ・オール（that is all）。そのためには、身を危険にさらせばいいの」「危険に……？　何をするつもり？」

京子が聞く。

「だから言つたでしょ。誘拐されるの。ただ、危険と言つても実際は違う。危険な振りをするだけ。あとで被害者の振りをして出でくればいいだけよ。ただ、どれだけの責任を負つかは、私にも分からぬ。囮だけではない。周りの人間も同罪よ。これが罪になるかは……、刑事志望の香織にあとで聞いて」

香織が、不安げな顔で頷いた。そんなに危ないことまでやるのか、と言いたげだ。刑事を志望しているからこそ、犯罪に関わるなど命取りだ。先程の千夏に向けて牽制したように、もう一度若菜が全員に片手を上げ、意見を押しとどめた。再び口を開く。

「みんな今朝のホームルームで、何を聞いた？」

「今日？　なんか言つていたつけ？」

千夏が首を傾げる。

「あ、生物の岡田が入院したって」

祥子が言つ。

「あー！　あのハエみたいな顔した小さい男ね。眼鏡かけて、ひ弱そうだしね」

千夏が両手を叩き、思い出したように言つ。

「違う！……中央通りの先で、最近痴漢がよく出るって注意がつたでしょ？」

若菜が、千夏よりやけに大きな声で言ひ。話が進まないことに苛立ちが窺える。

「あー！ あつたあつた！ でも、こいら辺は不審者多いからね」京子が言ひと、千夏が溜め息を吐いて同意した。

「そうそう。この世の中は痴漢に溢れているからね。気持ち悪いけど、仕方がない。男が

いる限りその存在は消せないのよ。あ、女も痴漢になるか。……そ

れなのに、世の中に痴

漢はたくさんいるのに……あたしが痴漢にあつたことがないのは、なぜ？」

「小さくて黒いからじゃない？」

「京子だって、黒くて大きいじゃない！」

「はい！！ 終わり！」

千夏と京子のふざけたじやれ合いに、若菜の渴が飛んだ。その怒号と鋭い睨みに、全員

がすくみ上がる。一同に睨みを聞かせてから、また若菜が話し出す。千夏と京子は無意識に正座になつた。

「つまり、そういうこと。この辺で変質者が出没しているところ」とが重要な。それを

みんなが知っているしね。被害者には、その囮になつて貰つ

「……痴漢に遭うのを待つっていうの？」

祥子が、小さな声で聞く。まさか、自分から被害に遭うのに名乗りを上げる者はいない

だらう。自分がその役をやるとなれば、内容が内容だけに息が詰まる。

「ううん。まさか。それじゃ、本当に危険でしょ？ それを工作するのよ。言つたでしょ。

筋書きはこうよ。囮の誰かは、部活が終わつたあとに襲われる。…

：振りをする。悲鳴を

上げる必要なんかはない。ただ、帰らなければいいの「

「でも、それだと、ただの家出だと思われない？」

美香が聞く。夕方の練習で乱れた髪の毛のおだんごも、お皿の時と同様に再び綺麗にま

とめられている。

「家出だと思われないような物証を残すのよ。つまり、囮は帰る意志だったのに、それが叶わなかつたと見せかけるの」

「……どうやつて？」

再び美香だ。若菜が、美香に向かつて人差し指を立てた。

「家の近所で囮の物を落としておくこと。それが一つ」

そこに、中指も足す。

「一つ目。それに、周りの人間の証言ね。帰つたことと家出するようには見えなかつたこと。それを周りに話すの。だから、一心同体になる」

「それで同罪つてことね。でも、囮は実際には被害に遭わないのだからどこに行くの？ 誰か他の人の家？」

再びの美香の質問に、今度は香織が言つ。

「待つて。みんなの家は、両親必ずいるでしょ？」うちの父親は、普段帰つてこない時が多いから都合がいいけど……。もしその日に限つて返つてきた時、刑事だし都合悪いな」

香織の脳裏には達也の部屋が浮かんだが、それを口には出さなかつた。彼を巻き込むわけにはいかないし、なにより刑事になりたいと言つたばかりだ。その香織がこんな真似をすると知つたら幻滅されるだろう。香織でさえ、まだこの計画に賛成するか迷つていた。刑事になる考えを突き通すために犯す、罪。すると、若菜が言つた。

「違うわよ。ここよ。囮は、一度学校を出て、帰る振りをしてこのF-1の中で一晩過ごすの。合宿をしても校舎に泊まるし、夜はこの建物の鍵も体育館の一階の教科担当室に返さなくてはいけない。も

ちろん、部活を終えた顧問が鍵の返却も確認するはずよ。そして、建物もね。つまり……」

「…………」は、密室になる。密室のここで、一人で過ごすのね」

祥子が呟つ。「ぐぐり、と誰かの喉がまた鳴った。

「そう。それに、ここは運が悪いことに学校の中で唯一電波が悪くて携帯も通じない。それに怪しまれないので、何もしてはいけないのでよ。この中に閉じこめられる。それに我慢しなければならない。窓を開けて逃げるなんて論外よ」

若菜が、重要なことを上げていく。ほとんどが心構えのようなものと、加えて行動パターンだ。周りはそれを頭にたたき込む。

「あとは、教師がどう動くかね。ほとんどバレー部と組になるのはバスケ部。そうなれば、髭だけでなくバスケの顧問、野村にも注意しなくちゃ。ほとんど練習に来ないうちの副顧問と、バスケの副顧問の清原ちゃんは問題ないと呟つ

若菜が、注意すべき教師の名前も確認する。

「じゃあ、あとは誰がその苦痛に耐えられるかって話ね」

千夏が、全員の顔を見回すようにして呟つ。誰もが、他人が名乗りを上げるのを待っている。この光景には、誰にでも覚えがあった。春に学級役員を決める時と同じ空気だ。自分は視線を下にして、被害に遭わないようにする。

「もちろん、ここでやりたい人間がいなかつたらこの案は破棄。違うことをやることにしようよ。あたしは実際なんでもいいの。でも、これはかなり試せる内容だと呟つ

若菜の言葉に、誰もが顔を見合せた。確かにそうだ。

「あの、あたし……。囮をやってもいいよ」

全員の視線が、その声を出した一点に集中した。

「美香……？」

祥子が目を丸くする。自らのストレスを言い始めたのは祥子だけではない。誰もがそれぞれの想いを抱えている。そして、この案を考えたのも美香ではない。それなのに、なぜ美香がやると言い始め

たのか、理解出来なかつた。誰もが、行動を移したくても名乗り出ることが出来ない。心のどこかでは、この案が無くなることを願つていたのかもしれない。何かやつてやりたいが、そこまでは出来ない。愚痴だけで終わりにすればよかつたと、半ば後悔し始めた時だつたのだ。

「……あたし、やるよ。だつてまず危険じやないでしょ。それに、あたしは元々成績悪いから推薦は狙つていない。国立を狙うほど勉強もしなくて平氣だし、内申なんて気にしない。ヒゲに怒られるのも慣れている。それに……あたし、やっぱり頼りないけどキヤブテンだしね」

美香の言葉に、誰もが反対の言葉を言わなかつた。かといつて、すぐに喜んだわけではない。立候補があつた時点で、この計画は動き始めるのだ。より輪郭が確かになつてしまつた。それに、幾分の動搖が走る。沈黙が部屋に流れた。次の言葉を言つてしまえば、戦いの幕は上がるのだ。

「美香。ちょっと聞いて。これは一步間違えば犯罪よ。ううん、あたしたち笑えないことをしようとしている。まず狂言自体は軽犯罪法違反の虚偽申告になるの。誰かを犯人として陥れれば虚偽告訴罪。まあ、どれも警察に言われた場合ね。これで公訴されなければ平気なんだけど……、厳重注意はされるでしょうな。それでも、やるなら、やつてみよう」

香織が、そのあとにもいくつかの刑法を並べたが、所詮それに興味のないものは理解が出来ない。そもそも、それを考えては戦争を起こすことなどできないのだ。罪を被るということは、戦争に負けた時に発生する事態だ。負けるつもりで戦う者はいない。美香がこくりと頷いた。もう部活が終わつてから三十分は経つた。着替えと少しだけ休憩を取るのが常で、もうそろそろ限界だ。これ以上ここにいると、鍵を確認して早く帰りたいヒゲの催促をくらい、あとで注意を引いてしまうだらう。六人は、計画実行を心に誓い合い、その夜、部室をあとにした。誰もが不安に思つていた。しかし、心の

隅ではこれから戦いに次第に胸が弾んでいった。大人達を騙せるのか。そして、自分の存在を確かめられるのか。帰る足取りは、それぞれの想いを抱え、確かに地面を踏みしめていた。

若菜は、一人家路を辿りながら考えた。校門を出ると、美香だけが大通りを左に自転車で向かう。若菜と京子、祥子の三人は大通りを横切つて、まっすぐの道を自転車で進む。しばらく走ると、少し進んだスーパーの角を、京子と祥子が一人が曲がり、若菜が一人になるのだ。その方向には、団地が広がっている。そして、大通りを右に歩いて帰るのが香織と千夏だ。駅まで歩き、電車に乗る。この帰る状況を見れば、囮になるのは美香が一番合っていた。それでも、まさか本人が自分から名乗り出るとは思わなかつた。

自転車を軽快にこぎながら、若菜は思った。美香は自転車とはいえ、いつも一人で登下校する。その分、誰かと会話をしているわけでもないので一眼につきにくいだろう。それに、ホームルームで注意を促された、変質者が出るという場所も、美香の帰る方向なのだ。大げさに伝えてはみたが、実際若菜が考えたこの作戦は大したことなどなかつた。ただ、一日帰らないだけだ。携帯は念のため、若菜が預かるつもりだ。若菜の中には、もう一つの隠れた作戦がある。警察に言つことは全く考えてなどいない。

シナリオは出来ていた。美香から携帯を預かつた若菜は、夜になつて美香の母親の携帯に電話かメールをする。もちろん、美香の携帯だ。そこで、変質者にあつたけど無事であることと、帰り道が心配だから友達の家に泊まると伝える。さて、両親は心配することだろう。そうしてその夜、他のチームの家の者に連絡を取るのだ。みんなには、美香が上手く隠れたようだと報告し、そして各親には美香が行方不明だと伝えるように言つ。そうすれば、親は子供を心配するだろう。

チームメイトの悩みは理解できる。実験のこと。それが部活のせいで勉強出来ないこと。

親に心配してほしいこと。進路を認めて貰えないこと。どれも、気持ちは分かる。しかし、納得は出来ない。そんな小さなことに悩んでいる時間ももったいなかつた。そんな時間があるなら、スパイクの一本でも打ちたい。そして試合に勝ちたかつた。そのためには、メンバーに邪念を払つて貰わなければならないのだ。こんな一般的な公立高校の部活で、大学にスポーツ推薦で行こうという若菜が、周りとは違つていたのかもしれない。中学の頃から始めたバレーで、若菜はすぐに上達した。持ち前のジャンプ力と、瞬時にこなす判断力がバレーに向いていたのだ。高校受験をするときにも、強豪高校からスカウトの話はあった。しかし、学年の中でも上位の学力を持つていた若菜は、バレーだけで高校生活を無駄にはしたくなかった。ある程度の学力をさらにつけ、いざ大学を受験するときにもう一度考えようと思っていた。そして、その心が決まりつつあるのだ。大学では、バレーをさらに続けて強いチームでレギュラーになりたいと思うし、それなりの実力があるはずだ。試合でも、スパイクの決定権はほぼ香織と若菜にある。それが重みでもあり、嬉しいことでもあつた。そして、推薦を貰うためにも、今、結果を残さねばならないのだ。そうしなければ、すべてが水の泡になつてしまふのだ。部室でそれぞれが今の不満を話している間、若菜はそのチームメイトに不満を持つた。作戦も、考え抜いたわけではない。ただ、そうすれば親に心配してもらえる。彼女たちの気も済むと思つた。これでいいのだ。いいはずだ。若菜の頭の中は、すでにこれから計画よりも、試合での反省点ばかりが浮かんでいた。

「ゴールデンウイーク初日前夜、その夜がやつて來た。何度かの簡単な打ち合わせを経て、

六人は今部室の中で円陣を組んでいた。それぞれの人間の右手同士が、親指と小指で繋がれる。いつもの試合前の円陣の組み方と、なにひとつ変わらない。

「それじゃあ、美香はここに残ること。今日も自転車で来ててくれたよね？ 自転車は置いておこう。今日は歩いて帰ったことにするのよ。……よし。美香の鞄は、あたしが向こうの公園に行つて置いておくから。誰かに気づかれたら、それでよし。もし明日の朝まで置き去りだつたら、あたしが拾いに行く。もしも警察に届けられたら、明日の朝、被害に遭つた顔をして出でればいい。一晩監禁されていた、と言つてね」

若菜の声に、美香が頷く。その決心した瞳とは違い、彼女の右手は微かに震えていた。一人の手が震え、それは静かに伝染する。美香は、囮になることで他のだれよりも緊張していたが、誰よりも若菜と綿密な相談をしていた。携帯の電波がないこともあり、全て若菜に預けることになつていて。美香は、ここにいればいいだけだと、自分に言い聞かせた。

「よし、大丈夫ね。ほとんど大事なのは、みんな明日よ。千夏と京子は、明日の朝出来るだけ早く来て、この子を救出してあげて頂戴。警察に言われて騒ぎになつたら、あたしが一人に連絡するから、その時は発見した美香に付き添つている振りをしてね。それで、ちょっと制服にドロとか付けて……」

不満そうに、美香が唇をすぼめた。

「分かつた。制服を汚すのが嫌ならジャージでもいいから。とりあえず、必ず誘拐された風に裝つて、先生のところへ連れて行つて」「了解」

「まかせて」

京子と千夏の声が重なる。

「あ、くれぐれも京子は、朝お菓子を食べないよ!」。緊張感がなくなるからね」

若菜の指摘に、京子がもう一度わかつたよ、と呟いた。

「それと。その時に、二人も変な人間をこの建物の近くで見て、襲われそうになつたとでも言えば尚更上出来」

それに、一人が頷く。

「だけど、それも自然に怪しまれない程度にね。……香織は、お父さんが帰つてきた場合、さりげなく美香が家に帰つていないことだけ伝える。変な事件に巻き込まれたかもしれない、とね。帰らなかつた場合は、香織にまかせる。」のデモ活動をどう結果に残し、普段の不満解消に繋げるか、それは自分次第よ。失敗しても、成功しても文句いいつこなし。晴れてこれから試合に専念するの。いい?」

誰もが、こくりと頷いた。

「……あの、あたしは?」

祥子が若菜に向かつて言つ。

「祥子。祥子は、言つたでしょ。兄弟もいるし、普段通りにして。でも、家がここから一

番近いでしょ。あたしが美香の家に連絡を取つたあと、すぐに祥子に連絡をする。その時は、慌てる。家族に、それを言つ。きっと両親も祥子を心配するよ。その時に大学受験への不満も話しもしちゃえぱいよ。部活に関しては、あたしは頑張れしか言えない。

祥子が必要なのは、言つても言わなくても同じ。自分でけりをつけなきや」

「……分かつている。でも、家族が騒いで、警察とかに行つたら…

…」

「大丈夫よ。そのために、香織の父親の名前を使わせてもらひつ。

祥子が、もし親に警察

のことを言われても、香織の家の親が刑事だから大丈夫って言ひつ。

親は、自分の子供が

被害に遭つたらつて思うわ。普段、毎日子供が戻つてくる有り難さが分かるわよ」

「うちの親は、大丈夫かな……」

美香が弱音を吐きかけた。しかし、すぐにそこに若菜が声をかける。

「大丈夫。美香が変態に襲われたことも、ヒゲや香織の父親がいてくれるから大丈夫って

言うよ。明日無事に帰るつていえば大丈夫。ま、その反応を見たいつていうのもみんなあるんじやない？」美香の親には、それなりの心配。周りの親には、

被害者が出たことで自分

分の娘が危険にさらされるかもしれないという心配。でも、それぞ

れの親は連絡を取り合

うほど仲良くない。上手く口裏を合わせれば成功出来るの」

全員が、お互いの顔を見合わす。

「これは親に対してのデモよ。それに、ヒゲに対しての。そうでしょう？」大きく言えば、

変質者を逃す警察に対してもよ。……つと、刑事志望の香織、「ごめんね。あなたの未来に

期待している。……つまり、これは誰か一人でも失敗すれば終わり。

バレーの試合と同じ

よ。信じて行動しないと、みんなが自滅だよ。大丈夫。あたしたちはお互いの行動をちゃんと読めるでしょ。高校に入つてからは、家族よりも多くの時間を一緒に過ごしてきた。

ここも一緒に乗り越えられる。誰がボールをレシーブして、トスして、スパイクするか。

同じ事よ。簡単だわ。信じればいいの。メンバーと、自分をね。最後には周りの大人も信じたいじゃない？」

それは演説といつても良かつた。若菜の言葉が、六人全員の円陣の手にも力を込めた。

美香の胸の高鳴りも、徐々に収まつていく。そう、朝までここに居ればいいのだ。仲間を信じて。明日の朝には、千夏と京子が来てくれ、夕方家に帰れば両親が温かく心配してくれるだろう。

「じゃあ、いくよっ！」

一度大きく振り下ろすように下げられた六人の右腕は、次の瞬間に突き上げられた。

美香は、全員が部室をあとにすると、一人部屋の真ん中で座り込んだ。この作戦で、家族がまた一つになることを願っていた。

美香の家族は、少し前から親が離婚するかもしれないと揉めていた。単身赴任の両親

間に、愛情がなくなるのは早かつた。美香が中学の時までは、周囲が驚くほど仲がよかつたのだ。三人で一週間に一度は風呂に入つたりもした。他人には驚かれることがあったが、

それは美香にとって普通のことであった。幸せなことだとも気づかなかつた。それが自分が手から抜け落ちるまでは……。この地元から、父親が転勤の命令を受けたのが三年前。

初めは、母親と二人になることが不安だつた。父親と仲のよかつた美香は、自分が父親と

二人でいるのは幸せだつたが、母親が父親と一人で仲良くしている

と腹を立てる事もある

つた。一種の小さな嫉妬だ。母親からしてみれば、そんなのは子供の甘えでしかなかつた

だろう。しかし、美香にとつては重要な感情だつた。父親がいてこそ、三人で釣り合いが

とれていると感じていた。それに男の人気が家にいないというのも初めてで不安だつた。初

めのうちは、外でした小さな物音にも驚いて、玄関の覗き穴からマ

ンションの廊下を窺つたものだ。週末になると帰つてくる父親に、母親がケーキを焼いているのが好きだつた。

しかし、いつの間にか気づいた時には、父親は帰つてくることが少なくなった。意識を

しなければ、二ヶ月姿を見なくても平気になつてしまつてもいたのだ。それでも不信感など生まれなかつた。数年がたてば転勤など終わると安易に考えていたのだ。まさか、父親が転勤先で愛人を作るとは思つていなかつた。おそらく、母親も。それでも、母親は気丈な素振りを見せていた。母親が事態に気づいてから、美香が気づくまでにはかなりの時間があつたはずだ。その間、母親はおかしな様子を見せたことはなかつた。おそらく、美香が学校へ行つている間に一人思い悩んでいたのだろう。全てが分かつたのが、二ヶ月前だつた。

一人の女からとうとう家に電話がかかつてくるようになつたのだ。それも、一時間おき

に。女は、電話に出た美香に対しても臆することなく悪事をばらした。あの高い声は、し

ばらく美香の耳から離れなかつた。自分が、転勤で來た父親に惚れてしまつたこと。父親

も、母親と離婚してその女と結婚していると思つてゐるといふこと。会社に状況を話せば、

父親の身が危ないから誰にも言つなどいつけ。美香の電話の様子に違和感を持つた母親が受話器を奪い取った。声を荒げるその姿を見て、母親が何度もその女と話したことがあるのだということを感じた。それから、急激に家の中の空氣は冷えていった。テレビを見ても、笑ってはいけない気がした。料理を食べても味がしなかつた。毎日テーブルの上に置かれているお弁当が、日に日に色を失つていった。それでも、美香はそのことを誰にも相談出来なかつた。毎月買う雑誌で、ラッキーカラーを確かめて、いくら派手な色でもそのカラーのパーカーを買った。制服の上にパーカーなら着てもいいことになつていて。私服なら毎日着られないが、それならば文句を言われずに身につけることが出来るのだ。しかし、そんな努力が身を結ぶこともなく、家も弁当も完全に色を失つたある日、父親はひょっこりと家に帰ってきた。

美香が一緒にいるとき、両親が喧嘩や言い合いをすることは決してなかつた。しかし、水面下で着実に事が進行しているのを、美香は知つていた。離婚が決まつた訳ではない。

むしろ、父親が謝罪の言葉を発しているのを聞いた。しかし、そのたびに母親がヒステリックな声を上げるのだ。もう、意味が分からぬほど子供ではないのだ。もうどうすることもできないのだ。諦めかけていたある日、部内でこの騒動が始まつた。千夏と祥子と香織が、模試を終えたあと、偶然この部室に足が向いたというのだ。

そしてそこで、家や学

校へのストレスをぶつけた。自分がだけが、ストレスを持っているわけではないことをそこで初めて知ったのだ。三人は、それから時間が許す限り愚痴を言つたらすつきりしたようだつた。

それを聞いた時、閃いたのだ。戦えるかもしれない、と。すでに愚痴を言ってスッキリ

としたという三人に、何かをしようとしたきつけたのも美香だ。三人は、それなりに話には

乗ってきた。そして、京子を巻き込んだ。

美香は、京子が人知れず恋をしているのを知っていた。他のメンバーやがどれほど気づいているのかしれない。いや、気づいていないだらう。美香が昼の練習メニューを終えて日

本史資料室に行くと、時々京子の姿が廊下にあつた。そして、彼女はじつとその中を見つめているのだ。初めは何をしているのか分からなかつた。ヒゲに怒られたのかと心配した。しかしそうではないと気づいた時、美香は声を掛けることが出来なかつた。京子の泣き

そうなその横顔が、美香の脳裏に蘇る。京子は、普段見せないその瞳で、切なそうに佇む

のだ。その姿を見ると、美香の足はいつも止まつてしまつた。髪に想いを伝えられずにいる京子を、美香は助けてあげたかつた。しかし、出来ることなどないのだ。これは、彼女にとてもきつといいチャンスだつたに違ひない。そうして、京子は話しに食いついた。

予想通りだつた。

それでも、若菜がこの提案を考えるとは思わなかつた。少なからず

意外だった。それで

も、自分がやろうと思ったことに迷いはなかつた。メンバーに言った、キャプテンとしての責任からではない。自分が襲われたと聞いた時、親がどういう反應をするか確かめたか

つたのだ。親が、今友達が被害に遭つたといつだけで驚く余裕がないと思つた。美香の願いは、両親共に心配して駆けつけてくれることだ。もしそれが叶わなくとも、どうにかして家族を元に戻したかった。

これが悪いことだとは分かつてゐる。あとでいくら怒られてもいい。大学など行けなくとも構わない。それでも……、今できることやりたかっただけなのだ。美香は、着ていた制服を脱いだ。

誰かに明かりを見られると困るので、電気を付けることも出来ない。真つ暗の中、本も読めない。携帯も、若菜に預けてしまつたので、メールやゲームも出来ない。窓から差し込む夜の月の光は、少なすぎて抵抗できない。

今日は部活の練習も、この計画が気になつて集中できなかつた。それでも日増しに上が

る気温に、身体から出る汗の量も増えていく。自分の着ていた体操服を、汗ぐさくなる前にビニール袋に入れ、口を結んだ。布団がないので、適当に置いてあつたあるタオルケットを敷いた。まさか、このカーペットの上にそのまま寝転がる勇氣もない。その上に転がると、思いの外身体が疲れていたようだ。足の裏がじんじんする。すぐに眠気はやって

来た。しかし、目を閉じてもなかなか眠りに落ちるのは出来ない。瞼の裏に浮かぶのは、

両親の顔。今、心配してくれているだろうか、という小さな期待が膨らんでいく。ぐだら

ないことだと自分に言い聞かせ、首を横に振る。それから少しして、眠れる、という感覚

があつた。このまま自然に任せてしまおう。わかつたとき、美香のお腹が、きゅるんと悲鳴を上げた。

\*

美香の目が覚めたのは、突然だった。初めはなぜ自分の目が覚めたのかさえ分からなか

った。しかしその瞬間、身体に痛みが走る。眠りに落ちる直前に聞いた腹の虫は、空腹によるものではなかつたのだ。目が覚めた直後、痛みとともに左腹から何かが移動するような音がした。その音とともに感じた不快感は、美香をパニックへ追いやる。こんな事態は想定外だ。携帯もないのに、今が何時かも分からぬ。それでも、美香は痛む左の腹に手を当てて起きあがつた。ここに閉じこめられるということは、助けも呼べないのだ。いや、鍵さえ開ければ外には出られる。しかし、それはこの計画を全て無にすることを意味していた。また、若菜の言葉が蘇る。

「……朝のホームルームで聞いたこと覚えていい? 変質者が出るらしいよ」

そうだった。外では何が起こるのか分からぬ。それに、ここは学校で、住宅ではない。

夜になれば人がいなくなるのだ。言つてみれば、襲われた時には一番危険だとも言えるのだ。それに気づいた途端、余計な冷や汗までもがってきた。美香は、そつと身体を起こすと、トイレに行こうと部室のドアを開けた。廊下は真っ暗で、かすかに土臭さが混じつて

いる。口の中が干上がる割に、余計な唾が奥のほうから出てくる。変質者を理由に、大人をからかおう、いや戦おうとした罰があたつたのだろうか。もうしません、と痛みと引き替えに反省の言葉を漏らす。だから助けてください、と。トイレのドアをそっと開けた。

中には三つの個室のトイレが並んでいる。その前に、洗面台も同じ数だけある。一番手前のトイレに入つたが、個室のドアを閉める時間もなかつた。とりあえず早く用を足したかったのだ。急に、ここでもつと具合が悪くなつたら、という不安に押しつぶされそうになる。しくしくする痛みは、考えてみれば普段の腹痛よりもひどい気がする。明日、京子と千夏が来るまでもつだらうか。いや、それよりも彼女たちよりも先に、誰か他の人が来た時にどう言い訳すればいいのだ。意識がなくなり廊下に転がついたら……。考えれば考えるほど底なし沼だ。次の瞬間には、こんなことやらなければよかつた、と思う。そして、やつたつて意味はないんだ、と叫びたくなる。その感情に答えるように、腹も悲鳴を上げる。美香は、座りながら低く呻いた。後悔で涙が出そうになる。思つたよりも辛い夜になりそうだ。鼻水をすすり上げた、その時だった。

確かに、足音が聞こえたのだ。しかも、すぐ近くで。腹痛に耐えるのに精一杯で、美香は周りに神経を尖らせていなかつたことを後悔した。しかし、その場から立ち上がることも出来ない。……この辺り、最近変質者が多いらしいよ。再び若菜の声が頭を過ぎつた時だつた。顔を上げた美香の視界は、大きな陰にふさがれてしまつたのだった。

\*

部室を出たあと、他のメンバーは計画通りに行動を起こした。若菜は、美香から預かつた携帯を持って公園に向かつた。少しだけ時間を夜にするために、あちこち寄れる限りの店に顔を出した。自分が

被害にあつわけでもないので、姿を見られても構わない。それよりも、変質者の出没する時間に合わせなければならなかつた。そして公園に、高校生の姿を現しておく必要があつたのだ。そして、若菜は公園に着き、自転車から下りた。しかし、それはただの行動に過ぎなかつたのだ。これから一つの結束を固めようと言う時に、まさかまつすぐ家に帰るには流石にメンバーに申し訳なかつた。若菜には、周りの志氣を高め、大人達を煙に巻いたという事実さえ手に入ればいいのだ。そうすれば、少しばかり部活にも身にはいるだろう。若菜は、今度は鞄から美香から預かつた携帯を出した。履歴を押して、母親の番号を探す。

美香の母親の携帯の番号は見あたらない。どこにかけるべきか、確認して置くんだつたと、小さく舌打ちする。ここで、家の者に知らせないと、美香の目的は遂げられないのだ。電話帳を開いて名前を辿つていいくと、そこには自宅と登録された電話番号があつた。ほつと息を吐き、若菜はその番号にかける。しかし、何度かけても留守番電話に繋がつてしまつた。小さくとも証拠を残すのは芳しくなかつたが、こうしていても始まらない。若菜は、留守番電話にメッセージを残すことにした。

「変質者に会つちゃつた。帰るのが怖いから、友達の家に泊まります」

敢えて心配しないで、とは伝えなかつた。電話を切るともう一度ため息を吐く。演技ではなく、緊張して本当に声が震えてしまつた。そのおかげであまり声に見分けはつかないだろう。なによりも、電話の練習は美香と数え切れないほどしてきた。メンバーにも確認してもらい、相当似ていると言われるまでになつた。大丈夫だ。若菜はベンチを立ち上がると、自転車のペダルに足をかけた。あとは家に帰り、メンバーに報告すればいい。一仕事終えた若菜の足取りは、いつもよりも軽かつた。

\*

「千夏ー！」

千夏が、昨夜若菜から電話を貰つた時は、すべてが順調だった。若菜は、美香の家に電

話を入れ、自宅に着いてから連絡てくれた。

千夏は、香織と駅まで歩いている途中、興奮している気持ちとは裏腹に、どこか不安で

会話は弾まなかつた。確認するより計画の順番を確かめあつたが、いつもは何を話して

いるのかさえ忘れてしまつた。それでも家に帰つて報告を貰つた時、親にはすぐに話した。

父親とは、あの一件以来口を利用していなかつた。母親は、翌日弁当を作ってくれなかつ

たものの、その次の日からは滞ることはなかつた。あの一件に触れることもない。ただ、

黙つてしているのだ。はしゃぐわけでもない。ただ、じつと千夏の身の回りのことこなす」

とだけ目標にしていつだつた。そんな両親に、千夏は言いくらい氣もした。しかし、

意を決して事情を説明すると、一人とも顔色を真つ青に変えた。

誘拐、という言葉を想像して警察に行こうとする両親を、美香にも母親がきちんといる

こと、部内の香織の父親が刑事であることを伝えるとやつと落ち着いてくれたのだ。両親

の慌てようは千夏が初めて田にするものだつた。

それで、充分だつた。千夏は、朝起きた両親に、充分注意するようにな言われて飛び出しつけられている。

学校にいる美香にすぐに報告したくて、千夏は「いつもよつ一本早い電車に乗つたのだ。

京子と連絡を取り、F-1で美香を助けることを決めた。そして、駅に着くと走つて校門までやつて来たのだ。

朝少し早いうえに、ゴールデンウイークの初日とあって電車はすいていたし、なにより

も身体が軽い気がした。兄を両親がかわいがるのは当たり前だ。それでも、自分も忘れていないということを確認したかつただけ、今思い返すとただの我が儘だったと思うのだ。

自分の感情さえ満たされれば、全てを受け入れることが出来た。両親に、もっと兄に会いに行けばいいと思えるほどだ。なんと勝手なことだらう。犠牲を追つてくれた美香に感謝の意を込めて、駅前のドーナツ屋で奮発したものを箱で買つた。おそらくお腹もすかせているだろう。

そんな明るい気分をぶち壊したのが、校舎の方から走つてくる京子の姿だつた。その顔

色は悪く、慌てているようだ。校門で待ち合わせしたのに、先に行つてしまつたのか。証言の関係も一人より一人。一緒に行動しなければならないはずだ。

「何、どうしたの？ ねえ、京子はどう。うまくいった？ あたしの家さ、すつごい心配してくれたよ。もう美香に感謝！ これ、ドーナツ買って……」

京子の顔色はやはりおかしい。千夏の顔を見てから、一度ドーナツの箱へ視線を移し、今度は千夏の手を掴んだ。かと思えば、その唇は震えている。

「…………どうしたの？ なんかあった……？」

「これで、何かないはずがない。

「美香…………美香が…………」

京子が言うには、学校へ来てすぐにF-1へと向かつたらしい。昨夜雨は降らなかつたもの、雲は厚く、空には稻妻が走つた。一人でその恐怖に耐える美香が心配だつたようだ。しかし、学校へ来てみれば、そこに美香がいなかつた。美香の体操服は置き去りにされたまま、姿だけが消えているのだ。そして確かに、建物の入り口の鍵も閉まつていたとい

うのだ。

「……はやくつ。早く……みんなに知らせなきや！」

千夏は京子から大体の内容を聞くと、伝染するよつて震え出した手を抑え、携帯の発信

ボタンを押した。それを見て、京子も別の人間に電話をかけ始めた。三十分もしないうち

に、全員が部室に揃つた。

そして、そこにはもう一人、顧問のヒゲもいた。慌てる部員を見てヒゲの方から部室に

来たのだ。美香の消えたF-1に沈黙が落ちる。後輩には連絡をして、至急部活は休みにな

つた。ゴールデンウィーク初日。予定とは大きくはずれた不幸の幕開けだつた。世の中は

浮き足だつて旅行にでも旅立つてゐることだらう。それと正反対の空気に包まれたここは、

誰もが目に涙を溜め、自分たちの犯したこと後悔していた。ヒゲは、部室の入り口に立ち、溢れる怒りをため込んでいるようだつた。

「……どうしてこんなことになつたんだ。お前達。誰がこんなことを考えたんだ。昨日、

確かに鍵は返していたよな？ 閉め忘れたというのか？」

ヒゲが、凄みの聞いた声で言つた。普段、コートの中で聞く怒声のほうがマシだつた。誰

も何も言えずに下を向いている。

千夏は、そんな周りを見回しながら、正直に言おうか迷っていた。  
しかし、なんという

のだ。ヒゲや周りの大人達をからかおうとしていた、とでもいうのか。殴られるどころで

はすまないかもしない。まさか、美香がこんなに忽然と姿を消すなどと考えていなかつたのだ。ヒゲに話したのは、美香が昨夜ここから消えてしまったと

いうことだけだ。

昨夜、最後に見た決意に満ちた顔を思い出す。美香が怖くなつて逃げたのかもしれない

と、最初は京子と千夏で考えた。しかし、美香の家の電話は繋がらない。美香の携帯にかけ、若菜に繋がつたそこで初めて美香が携帯を持つていることを

思い出した。どうしてこんなことに……、と舌打ちしたくなるのをぐつといらえた。

おそらく、みんなの気持ちも大して変わらないだろ？。なにより、千夏の頭の中には両

親の顔が浮かんだ。あんなに心配した顔も、作られたものだと知つたら、本当に呆れ、

嫌われるかも知れない。千夏は、自分の目から涙が一粒零れたのがわかつたが、恐怖で拭くことも出来なかつた。

「お前達。先生方が、この辺は最近変質者が、夕方以降に多いから気を付けるように、そして無駄な行動は慎むようにと注意するのを……聞いていたはずだ。ここで、夜のパーティ

イーでもしようとしていた……のか？」

ヒゲが、一人一人を端から睨み付けていく。

「違います……」

祥子が、小ちな声で呟く。ヒゲの、鼻の下にある本物の髭がぴくりと動いた。

「それじゃあ、合宿でもしようとしていたのか？　え？」  
ヒゲは、もう一度部室の中の人間を見回した。

「違います……」

祥子が同じ言葉を繰り返す。

「じゃあなんだ！　お前達は、何をしたんだ！」

ヒゲの怒鳴り声が響く。周りの部活は、バー部に関係なく始まっているようだつた。

外からは楽しそうな掛け声が聞こえるし、廊下で足音を殺して歩く人の気配を感じる。そ

れもヒゲの怒鳴り声の後、その誰かはそそくさと消えていった。

「……お前達、反省するんだ。自分たちが何をしたのかを。お前達の処分はそれからだ。考えて、答えが出たら言いに来るんだ」

ヒゲはそれだけ言うと、部室のドアを開いた。カーテンを捲ろうとして、一瞬触ることを迷うように手が宙を彷徨う。半ばぐぐるようにして腰を曲げ廊下へ出ると、ぴしゃりとドアを閉めた。中には静寂が広がる。外との世界も、昨日までのじやれあいもストレスも全てが夢のようだ。予定では、すでにヒゲを心配させて煙に巻いているつもりだつた。ここでジュースで乾杯をして、お菓子を平らげていたはずなのに。こんな事態になるとは思わなかつた、その考えしかない。鼻を啜る音が聞こえた方に千夏が目を遣ると、祥子が鼻水をずるずる流して泣いていた。京子は、千夏が買つたドーナツの箱に視線は集中しているが、それも定まってはいなかつた。唇の青さが、彼女の内面を写しだしていた。

「どうしてこんなことに……」

初めて口を開いたのは、そして最も避けたい言葉を言つたのは若菜だつた。キャプテンが不在の今、頼るは彼女なの。

「若菜つ。そういえば……、昨日鞄を公園に置いたんだよね？」

千夏が、掠れる声を絞り出す。横にいる香織も顔を上げた。今ま

では体育座りをして、顔を伏せていたのだ。じつと若菜を見つめている。その視線を避けるように若菜はドアの方を向くと、首を横に振った。横だ。

「え？ 若菜、美香の力モフラーージュのために、公園に鞄を置くつて言つたよね？両親にも、美香のこと伝えるつて言つたよね？」

若菜は視線を逸らしたまま。今や京子と祥子の視線も若菜に注がれている。

「……若菜？」

祥子が、膝建ちになり若菜に近づく。美香を失うかもしれないといふ恐怖に、部内は殺氣立つてゐる。

「ねえ？ なんで黙つているの？ 若菜は、鞄を置いて美香の親を心配させるんだつたよね？」

若菜の片目から涙が零れたが、彼女は咄嗟に脇に顔を背けてみんなに見せないようにしてみた。

「ねえっ！ 言つたじやない！ 大丈夫だつて……。美香はこゝにいるだけだつて！ お

互いを信じればいいんだつて！ 若菜が言つたんだよ……」

祥子が、普段大人しい彼女が、若菜の両肩を掴む。

「なんとか言いなさいよ！ あたしは、昨日の夜に若菜から連絡を貰つて、親に言つたわよ！ 親は心配して、あたしや他の兄弟みんなと一緒に寝てくれた！ 嬉しかつた！ でも、どこかで悔しかつたよ。情けなかつたよ。こんなことでしか愛情を試せないなんて、自分が馬鹿だと思つたよ！ どうしてこんなことになつたつて？ そんなの、あたしが聞きたいわよ！」

「やめなつ！」

祥子の肩が、大きく震えた。彼女を止めたのは、香織の鋭い声だった。

「だつて、若菜が……。大丈夫だつて」

「祥子、とりあえず座つて。いい、初めから考えてみようよ。美香が消えた。おそらく何者かに連れ去られた。でも、なぜ？ 美香は密室にいたのよ。美香が出ない限り外からの進入は不可能なのよ」

香織が順序立てて話していく。

「待つて。そこ違う」

今度は京子の声で、一斉に視線が変わる。

「京子？ どういうこと？」

千夏が、眉を寄せて尋ねる。京子の様子がおかしいのは何かを隠しているからだつたのか。

「ここには密室なんかじゃなかつたのよ」

「え？ ……どういづこと？」

千夏が首を傾げる。思い当たる節はない。

「私、見たのよ。朝一番に来た時、確かにF-1の鍵は閉まつっていた。でも、……トイレの窓が開いていたの」

「え……」

千夏は、京子のあとに来た。そして動転していたこともあり、そんな小さなことには気づかなかつた。

「そこまでは誰も見なかつたでしょ。きっと、変質者はあそこから入ってきたのよ……」

「そんなん……」

千夏も床に崩れた。

「美香……」

祥子の涙も止まらない。

「侵入は可能だつたつてことね。すると、残すは犯人が誰かつてことよね。つまり、きっ

と変質者……その手がかりは田撃証言しかない。あの子がどこにいるのかも分からぬ」

これは確實に警察が入つてくるはず。つちの父親に、ヒゲが連絡を取ると言つていたの。

そのほうが交番を通すより早くて確実だわ」

香織が泣くことはなかつた。それよりも、今なすべきことか分かつてゐる。千夏は、じ

つと香織を見て言った。

「でも、それだと香織が怒られない?」

ふつと微笑むと、香織が返す。

「あたしは普段怒られることもないから。親と顔も会わせないし、たまにはいいかもしない」

千夏に言つ香織の顔を見て、彼女の戦いは始まつていないと分かつた。おそらく昨

夜、香織の父親は帰つてこなかつたのだらう。香織は一人で夜を迎えたのだろうか。大事にされ、心配されたい千夏とは違い、香織は……怒られたいのだ。しかし、そうなると話は別ではないか? 千夏は、困つたような顔で笑う香織を見て考へ

た。美香の血が、ここにあるわけでもない。誘拐されたとしても、何か連絡があるわけで

もない。それならば、美香はどうへいったのだ。考えられるとすれば、美香に頼んで、香

織は家に呼んだのではないか? そうして、騒ぎを起こし、父親に怒られようとしているのではないか? いや、そうすると、メンバーを巻き沿つにすることが分かつてゐるはずだ。

やすやすと怒られる道を辿るだらうか? いや、思い起じせば香織は、この作戦がたとえ成

功しても怒られることを覚悟しろと誓つていなかつただらうか? これも最初から作戦のうちだつたのだろうか? そつ思えば、千夏には、香織の困つたような苦笑いも、自分たちを

嘲つている微笑みにしか見えなくなってきた。香織を信じたいはずの気持ちも揺れる。

「そつか……。でも、香織の父親ならきっと美香を救つてくれるよ」祥子の声が千夏の耳に響く。香織から祥子に視線を移し、考えた。祥子でもあり得ること

ではないか。彼女は確かにメンバーを大事にするタイプだ。それが兄弟を大切にすると

ころとも似ている。しかしそれならば、余計に美香を心配して置っているのかもしない。

朝、美香を早く連れてこようとしてなんらかの事情があつたか。それとも、引っ込みが

つかなくなつて泣いているのか。疑心暗鬼になると、全てが黒く見えてしまつ。京子も、あんなに震えているのは尋常ではない。まさか、何かの恨みがあつて、京子が美香を……？ そう考えて、千夏は大きく息を吐き出した。これでは何も始まらない。そもそもそんなことを考えれば自分も怪しまれるだろう。そういうえば、発案者の若菜は……。千夏が、若菜に顔を向けると、彼女はもう視線をずらしてはいなかつた。

「じめん。これ、あたしのせいだ」

唐突に放つた若葉の声には、後悔しかなかつた。

「どういうこと？」

香織が鋭く突く。

「実は、あたしは、計画は現実のものとしていなかつたの」

「…………どういうこと？」

香織に重なるように、京子が言つた。

「若菜、あんた何をしたの？」

祥子もじつと見つめる。

「何もしていないよ……」

若菜が答えると、今度は香織が怒鳴つた。

「何もしていないわけがないでしょ！」この時点で、あたしたちは、

やっているんだよ！

若菜、どういうつもりでやつたの？ あたしたちに提案したの？」

「……ごめん。本当はあたしなんでもよかつた、みんなが眞面目に部活をやってくれれば

よかつたの……。何も考えなかつたし、何もしていないの。あたしは親にも不満はないし、

受験勉強もしないつもりだし。バレーの学校推薦を狙つてingから早く練習に打ち込んだ

かつた

「なんでもよかつた？」

千夏は驚きで素つ頓狂な声を上げた。そんなのは一言も聞いていい。他の三人も目を

丸くしていた。あんなにも完璧だとthoughtいた計画は、初めから無計画だつたのだ。

「実はね……。でも、それには県大でどうしてもいい成績を残したかった。でも、みんな

は勉強をしたくて、部活に身も入らなくて……。あたし、どうしたらしいのか困つて」

「確かに……。あたしたち、少し部活をないがしろにしていたよね。それが当然だとさえ思つていた」

祥子が呟く。

「でも、あたしも勝手だつた。たきつけよつて」……。みんなが食いつくつて分かつてい

ることを提案した。ごめんね……」

「でもさ、なんで？ 結果はどうなると思つたの？」

京子がまだ聞く。

「変質者の二コースを利用して、誰かが囮になれば、親が心配するだろうと思ったのは本

当なの。そうすればみんなが満足して部活に打ち込んでくれると思

つた。受験の悩みは解

決しないけど、ひとつでも満足できることがあれば、色々なことを頑張れると思った。そ

れに、……」これは勝手なあたしの意見だけど、みんなも何かを望んでいると思ったの。自

分自身や、親に対しても何かを試したがっている。それならば、機会を作ればいいだけ

だと思った。背中を押す人間が必要なのだって

「確かにね」

千夏も頷く。

「それでも、本当にこんなことにするつもりはなかったの。あたしは鞄を公園に置くつも

りもなかつた。美香の『両親にもつまづいて』つもりだつたの。でも電話が繋がらなくて、

結局留守電にした……。あそこの時点で、やめて美香を迎えていけばよかつた……

「やめな。今更後悔しても仕方ないよ」

若菜が後悔の声を滲ませると、香織がきつぱり遮つた。

「なにか、香織に考えがあるの？」

千夏の言葉に、香織がこくりと頷いた。

「だつて、おかしいじゃない。どうして美香はこんなにあつさりと連れ去られたの？ 美香を捜すわ。もちろん、美香が変なことをされる前にね」

香織が言つと、少なからず部室にはほつと息を吐く音が聞こえた。「それでも、あたしはこれをやって、なんだか自分が恥ずかしくなつたよ。それに、なにより、あたしたちは六人いないとダメだよ」祥子の言葉に全員が頷く。そう、美香のぽっかり空いた場所が、違和感を起こすのだ。

全員が、自分の位置について、初めて輪になれる。

「美香……。お母さん、『めん。帰ってきて……』

「祥子。もう泣かないで。香織のお父さんも、何か分かつたりきつと教えてくれるよ」

千夏の励ましで、祥子もかすかに頷いた。

「そうだね。あたしたち、何かが間違っていたんだよ。自分で何かをするのを恐れて、人にして貰おうとしていた。自分の力を生かせない小さな不満を、解決も出来ないんだよ。けりをつけるなら自分で付けなきやね……」

熱くなる京子に、全員の視線が集中した。

「何……？ どうしたの？ 京子」

千夏が声をかける。明らかに、彼女は少しいつもと違っている。京子はみんなの視線が集中したこと、顔を赤らめると、恥ずかしそうにはにかんだ。

「とにかく、ヒゲも言つていったでしょ。」の話は他の部活にまだ話すなって

香織が、その空氣を引き締めるように言つて。全員が頷く。「戦いはまだ終わっていない。」の話が親にいけば、まず怒られる。そこから覚悟するんだよ。今日は部活もない。」の「パール」テンディークは幸せにしめぐるんだよ。絶対に」

そう続けると、香織は部室をひとりあとにした。

香織には、ある考へがあつた。父親に知られるのは構わない。しかし、美香だけは助けたかったのだ。父親へのうそをこんなことで晴らすことはできないと確信した今、むしろきちんと話したかった。携帯を出すと、香織はある番号にかけた。

「あ、達也？ 悪いんだけど今から高校に来てくれない？」

すぐに達也が来てくれる、香織は校庭の中や、校門付近を探つた。それでもなかなか何も発見することは出来ない。当たり前だ。小説やドラマでは探偵や素人の主婦が事件をさりと解決してしまう。そんなこと、普段の生活で起こるはずがないのだ。ただ、才能は生まれ持つた技術であるというのも間違いではないと香織は思っていた。バーーなどのスポーツでも職業でも同じ事だ。これが、自分が進むべき道の確認になるかもしれないのだ。刑事になるには、周りの人間が巻き込まれたとしても、冷静に対処しなければならないのだ。

「香織。呼ばれたから来ただけど、さつきからお前は何をしているの？ 学校の中あちこちうろついて。俺、女子校の中になんていてまずくないの？」

達也が、きょろきょろ辺りを見回しながら言つ。香織は、茂みの裏を確認していた顔を上げると、恥踏みするよつて男を上から下まで見た。

「あたしが今、事件の調査をしてるといつたら、達也は驚く？」

「……え？」

達也は、きょろきょろと見回していた目を香織に定めた。さつきまでは、早くバイトに行かないと言つていたのが嘘のようだ。

「……それ、まじ？」

達也の言葉に、香織は両手についた土を軽く払うと、人差し指を

くこくこくと手前に動かして、達也を呼び寄せた。そつと達也が香織に寄る。身長が高めの香織より、さうに達也の方が高い。腰を屈め、彼女の口元に耳を持つてくる。

「本当よ。実は、友達が事件に巻き込まれたの」

「……はあっ！？」

達也は、香織の耳に向かつて大きく叫んだ。香織はその音量に驚き、飛びずかる。そして、叫ばれた右耳を手で覆うと、顔をしかめた。

「いつた……」「いつた……」

「あ、「めん」「めん。驚くだらう、そんなこと言われたら」

「もー。ここに達也を呼んだのは、話があつたからな」「達也は、急に神妙な顔をする香織に首を傾げた。電話で呼び出されてここに来たものの、

香織の様子はどこか違っていた。梅雨にじつじつと近づくこの季節、じつとりとした湿気

が肌にまとわりつく日もたまにある。やひ、今日またこんな日だった。何かがいつもと違っていた。

「話つて？ 嫌なこと？ 別れたいとか？」

達也は、急に高鳴り始めた心臓に気づかぬ振りをして、わざと明るく聞く。まだ、香織

のことをほとんど知らないといつてもいいだろう。それなのに別れ話か。

何か気に障ることをしただらうか、そう達也が考えた時だった。

「違うよ」

まっすぐに視線を合わせて答える香織に、達也はほつと胸をなで下ろす。気づかれないよ

よつこ、鼻から安心の息を吐き出した。思つたよりも緊張したらしい。息は数秒間溜まつていた。

「……でも達也は、あたしのことを嫌いになるかもしけないよ

高校生、いや女の子特有のいい方だろうか。男は、嫌われないようには死になる。女は、男に嫌われる不安をぶつけ消化しようとすむ。どちらが正しいのかは分からない。それでも、そんな風に気持ちをはき出せる香織を、達也は羨ましくなった。そつと彼女の腕を取り、自分の胸の中に抱きすくめる。ここが、彼女の通り高校だと今は、今はどうでもよかつた。

「ちょっと達也、離してってば」

香織は、両腕で達也の胸を離した。

「ごめんごめん。大丈夫だよ。……その話、聞くよ」

達也は、側の植え込みのある花壇の縁に腰掛けた。

「で？ なんでこんなことをしているの？ 何を探しているのか教えてくれないと、俺も手伝えないじゃん」

達也は、顔を赤くして周囲に目を走らせる香織の顔を覗き込んだ。やはり、場所が悪かった。

顔が見えないほどが都合がよかつた。後悔で歪むその顔を、彼には見られたくなかった。

「実は、あたしも何を探せばいいのか、分からないの」

香織のうち明ける言葉に、達也は声を失つた。それではこの数十分、香織は何をしていたというのだ。

「え？ この天気のいい休みの日に、意味もなくこの植木やグランドを漁つていたの？」

なら、遊びに行こうよ。俺、バイトを誰かに代わって貰うし。部活、終わつたんだろ？

もっと重大な話だと思った達也が、香織の肩に腕を置く。何を探せばいいか分からぬなら、探す必要がないのだ。

「ううん。違うのよ。そうじゃないの」

「……どういふこと？」

「実は、美香が。あの合コンにもいたよ。頭をお団子にしている子」

「……ああ。なんか派手なパーカーの？ あの子がどうした？」

「行方不明なの。昨日の夜から」

「行方不明！？」

達也の、香織の肩を掴む腕に力が入る。美香のことは、おぼろげだが達也の記憶にもあつた。

「信じられないかもしないけど、本当の話だから。軽蔑したかつたら構わない」

達也には、この話し方が気に入らなかつた。要点を話さないのに、嫌われると心配されても仕方がないではないか。

「だから、何？ 美香ちゃんはどうしていなくなつたの？ 嫌われるかなんて分からぬだろ」

達也は大きくため息を吐いた。それを咎めるように、香織は一度達也を一瞥したが、すぐにこれまでの経緯を話し始めた。要点をかいつまんでも話したが、決して都合のいいよには言わないことを心がけた。香織が話し終わり小さく溜め息を吐くと、達也が言った。

「つまり、君たちバー部のメンバーが、愛情不足や勉強、部活への鬱憤を晴らそうと、美香ちゃんを部室のある建物に隔離したということ？」

達也は、初めこそ香織の心配をして緊張しているようだつた。そしてそれは変わることがなかつたが、それでもだんだんとその表情に疑心の色も混じつていつた。

「そう。計画を提案したのは若菜だけど、みんな同罪。今日の朝、美香は忽然と姿を消したの。で、変質者の疑いが濃い。なにか証拠となるものを求めて、あたしはその何かを探しているつてこと。ごめんね、巻き込むつもりはないから」

香織は、話し終えると、達也から一人が入れるほどの間をあけて座り直した。

「巻き込むつて……。そんなことより、香織はなんで俺のこと呼ん

だの？」

香織の耳には、達也の声が冷たくなったような気がした。一瞬、心が冷える。また、一人で夜を越える日々が来るのだろうか。しかし、それならば仕方がない。むしろ、この先を続けやすくなつた。

「達也を呼んだのは、別れ話ではない。でも、あたしの気持ちを話しておきたかったの。

この事件になる前に、部員のメンバーに聞かれたの。なぜそんなに刑事になりたいのかって

「それは、香織のオヤジさんは、心配なんだろう。だから、反対する。違うか？」

達也の冷静な分析に、香織は頷く。

「そうね。そうだと思う。普段夜に帰つても来ないのに、勝手だよね。それで娘がなりた

いつていつた職業を反対するなんて。でも、あたしはそれでもなりたいと思う。答えは、

イエスなの」

達也が戸惑つたように手を泳がせた。

「そのあと、その子は言った。それならこれから結婚する時は？  
それよりも前、今、達

也が反対したらどうするの？ ってね」

達也は、顔を下に向けたが、その両手は閉じられていく。口の出した答えが、二人のこ

れからを左右することもあり得るだろう。どちらかなど選べるはずがない。千夏の両親の気持ちと同じだ。どちらも大切。選べという方が難しい。父親も、達也も、これから将来も、どれも香織にとっては手放せないと思えるものだ。その気持ちを押しつけるのは簡単だ。しかし、それで相手に我慢させ、苦しい想いをさせながら

緒にいても、それはうまくいかないだろう。出した答えに、今度は相手の答えが欲しかった。

今、将来を変えることは出来ないだろう。それでも、もし今この手の中にあるものを失つても、受験までの長い期間があれば傷は少しでも癒える気がした。勉強をしていれば悲しみも紛れるはずだ。

「それで？」

達也が、顔を上げる。その瞳はまっすぐに香織を射抜いていた。答えを口にする強い氣

持ちが一瞬揺れる。

「変わらない」

香織の一言で、達也の瞳も一瞬揺れた。しかし、その動搖がすぐに消えたのを見ると、

彼も分かっていたのかもしない。ぐつと両手の拳を握りしめる。

「変わらないの。あたしは、たとえ達也が反対しても、必ず意志は通す。それが無理だと

思うのなら、達也が答えを出して」

ずるいと思った。自分が出した答えは、達也にとつては質問でしかないのだ。香織は、

それでも、そうするしかなかつたのだ。一緒にいてほしい。応援してほしいというのは簡単だ。しかし、彼のことを考えれば、それこそひどい女になる気がした。いつなれるのかも、なつたから安全だという保証もない。男でもないのに待つていて欲しいとも言えない。それに、彼は大学生だ。もっと遊べるはず。香織は受験で遊べなくなる。それが、心のどこかで申し訳ないという重荷だったのだ。手放すことは悲しい。けれど、しがみついていても前には進めない。

「……分かった」

達也が、唐突にその一言を放つた。

「え……？ そんなに簡単に？ いいの？」

香織が、ほっと息を吐こうとしたときだつた。

「待つて。これは答えじゃない。香織の考えは分かつたよ。……俺、

実際に今混乱しているんだ」

達也の方へと動かし掛けていた手を、香織はそつと引き戻した。こんな答えがくるのは、

ある程度分かつてのことだ。傷つかない。悲しくない。

「ちょっと考えさせて。いい?」

「……うん」

達也は、香織が頷いたのを見ると、満足そうに、半ば困ったように笑った。縁から立ち

上がり、ジーパンのお尻についた土を軽く払う。

「別に反対しているわけじゃないよ。俺たちまだ学生だし、ずっと一緒にいたいけど、い

つどうなるかも分からぬだろ?」でも、俺は中途半端に一緒にいるわけじゃない。た

とえ、香織が夜さみしきて俺のところに来ているだけだとしても、俺も遊んでいるわけじ

やないから。そうやってきちんと話してくれたからは、俺もちゃんと考えてみる。それ

で……どうなるかは、待って

達也の顔は、笑っている。しかし、それは未来に向かつての希望の笑顔ではないと受け

取れた。この場をやり過ごすための曖昧な笑い。香織が傷つかないようになると氣を遣う仮面

の笑み。恋愛など脆いもの。連絡をしなければ、それで終わる恋もある。相手のため。自

分のため。理屈をいくらへねても、結局は確実なものなどないではないか。

「もういいよ……。分かった」

香織も立ち上ると、達也を振り返ることはなかった。どうしてだろ?。こんなにも、

子供の世界にも壁はある。家庭の環境。学校のレベル。将来選ぶ職業。見えない壁で立ち

ふさがり、すべては価値観といつ一言で片づけられる。確かに、それは存在するものだ。

だが、自分に関係ないときや、自分が優位に立てる時だけそれは役に立つ。自分が下位になってしまえば、ただの腹立たしい無限のループに見えてしまつ。どうして境界線があるのであらう。どうして、分かり合えないのだろう。

「おい。香織っ。変質者が出るなら、送つていくって」

達也が、立ち去ろうとした香織の腕を掴む。それを、瞬間的に振り払つと、香織は言った。

「あ、ごめん。でも、大丈夫。まだ明るいし。達也バイトでしょ？」  
わざわざ来てくれて

ありがとう

その顔は見られなかつた。顔を少しでも上げれば、悔しさで涙が溢れそうだつた。何が

悔しいのか。認められない進路も。見つからない友達も。裏切られるかもしれない不安も。

分かつて貰えないと思うのなら。捨てられるかもしれない不安になるなら。いつそ自分から切り捨てたほうが楽だつた。優位にどちらが立つかわからないうなら、その席は早い

者勝ちだ。さきに、切り捨てれば勝ち。そんな気がした。出会いがあれば別れもある。そいい。香織は昔からそう思つていたのだ。それなのに、達也は強引に割り込んできた。いつもまにか居やすい場

所にならうとしていた。それも、もうおわり。実際に空はまだ明るい。変質者が本当に近くにいるという実感は強まつたが、今はそれよりも達也の隣にいるほうが怖かった。自分を否定されるのが怖かった。

「あ……つおい！」

後ろから達也が呼び止める声が聞こえたが、香織は振り向かなかつた。振り向けば、後悔するのが分かつてゐるから。しばらく歩いて、再度校舎の陰からやつと振り向いた時、

達也の姿はそこにはなかつた。追いかけてくれるとは思つていなかつた。しかし、こんな

にもあつさり手を離されるとも思つていなかつた。こうして、香織の恋は、作戦とともに破れた。

\*

ぽーんっ。ぽーんっ。体育館に、ボールの跳ねる音が響く。夕方の練習も終わり、体育館には誰もいないはずの時間だ。

「美香……」

しかし、祥子はひとり黙々と壁に向かつてずっとスパイクを打ち続けていた。ボールを高くあげ、落ちてきたところを打つ。ジャンプも踏み込みもしないので、これは手首の練習だ。床に落ち、壁にバウンドして舞い戻ってきたボールを、同じ形で打つ。その繰り返しである。うまくいけば同じ位置に戻るし、少しでも手首や捻りかたが乱れれば足が移動せざるを得ない。これは一人で出来るバレーボールだ。香織のように、いつもトスの練習をしていたわけではない。若菜のように、推薦を狙つていつも人の倍以上走り込みをして、

練習したわけではない。京子のような身長と、生まれ持った素早さがあるわけではない。美香のような柔軟性を持ったトスを上げられるわけでも、千夏のように俊敏にボールの下に入り込めるわけではない。祥子は、悔しかつただけなのだ。それが今、ボールと向き合つて分かる。自分は、逃げていたのだと。自分が必要とされないとを怯えていたのではない。周りが努力をしているのを横目で眺め、ただ自分は上手ではないと胡座をかいていたのだ。本当は、香織のようにトスを四六時中やり、若菜のように走り込むのは自分のやらなければいけないことだったのだ。それを棚にあげ、自分を可哀相だと思つていただけだ。祥子の打つたボールが、軌道それで、体育馆の入り口へと転がつていく。

「はあっ」

遣りすぎると、肩の筋肉が張る。それと同時に、腕も筋肉痛になるのだが、それでも祥子はやめようと思わなかつた。逃げることは簡単だつた。忙しい。大変。そう言葉で吐き捨てて、次には事情を説明する。それでも自分は精一杯だと思つていた。出来ないことを棚に上げて、周りをうらやんでいた。家族に対してもそうだ。なぜ、昨夜自分が情けなくなつたのか、今ならば分かる。祥子は、ずっと自分が逃げていると言うことを分かつてていたのだ。家族のせいにして、心の隅へ隠れていた。大したこととも、思い返せばしていない。

このままいけば、おそらく国立がござ受からなかつた時、すべてのせいにして逃げただろう。家族の手伝いをずっとやらされたから。部活が忙しくて、自分だけやめられなかつたから。その時、色んなもののせいにして、また仕方ない、その一言で気持ちにけりをつけるので。部活を辞める勇気もなくて。中途半端なことをしているのは、自分自身なのだ。その情けなさを認めると、涙が頬を伝つた。

「つづ……つ」

その悔しさをぶつけるように、ボールを打ち付ける。しかし、構え

もうまく出来てない今、祥子の打ったボールは言うことを聞かなかつた。拗ねるように、また先ほどと同じ方向へと逃げていく。それを追いかけていると、不意に足の力が抜け、踞つた。涙が止まらない。声が漏れそうになつて、両手で口を塞いだ。どうしても、美香を搜し出したい。変質者の魔の手に犯される前に。もし、彼女に危害が加えられたとしても、自分たちで助け出してあげたかった。そのあとは、美香をどう救えるのだろうか……。それを考えると、胸が苦しくなつた。自分たちは恨まれるだろう。バレー部は大会になど出られないかもしない。簡単に撒いたはずの罪が、何十倍にもなつて重くのしかかる。

「あら、なにやつているの。あなた、小笠原祥子？」

声のした方にはつと顔を上げると、そこに立つっていたのは、バスケ部の副顧問だった。

「清原先生……」

清原は、体育の教師であり、その中では唯一の女性の体育教師だ。ふくよかな身体は、

生徒に愛される肝つ玉母ちゃんの象徴ともいえる。この厳しい校則の中で、時々目を瞑つ

てくれるのも、好かれる所以である。だからといって、甘いわけではない。厳しい口調で

叱責するときもあるのに、なぜかそれは嫌味も恐怖もないのだ。

「なにしているのよ、こんなところで。バレー部は今日休みになつたんでしょ……。つて、

何。泣いているの？」

清原先生は、踞つた祥子の目の前に来ると、その顔を覗き込む。

「すみません。ちょっと色々あつて……」

祥子が立ち上がると、清原は、その頭に手を置いた。その手は柔らかく暖かい。

「バレー部、大変みたいだわね。早く帰りなさい。このあと、『西親たちが集まるみたい

だから

清原は、祥子の頭を撫でながら言つ。

「え？ 親が？ 本当ですか？」

清原は、祥子が知らないということに驚いた顔で見下ろした。  
「何、聞いてなかつたの？ 早川のお父さん、刑事さんなんだつて  
ね。連絡をとつたら、なんだか招集になつたみたいよ。私も一応参  
加するけど。今日学校へ来て驚いたわよ」

「そなんですか……」

祥子の足が、小刻みに震えていた。もつ、親たちに悪事がばれる瞬  
間はすぐそこに迫つているのだ。どうしようもない後悔が、怒られ  
る恐怖へと姿を変えていく。それをみた清原は、何を勘違いしたの  
か、祥子を抱きしめたのだ。ふくよかなその身体は、まるでソファ  
に身を沈めたような心地よさだつた。しばらく、誰かとこうして抱  
き合つことなどなかつた。こんなにも安心感をもたらしてくれるも  
のだつたのだ。

「……大丈夫。きっと美香のことは、先生達も探し出すから。あん  
たたちは心配しないで、大人しくしていな」

またその言葉で涙が出る。先生の胸のあたりで涙をしていくと、  
そつと離された時、そこに小さなシミが出来ていた。

「『めんなさい……。跡……』

祥子がそれを謝ろうとするが、清原は大げさに手を顔の前で振つ  
た。

「ああ、こんなの平氣よ。じゃあ、あんたはまつすぐ家に帰る」と。  
「いいね？」

清原が、人差し指を祥子の顔の前に突き出す。唇がきゅっとしまり、  
目が真剣だつた。

それに頷いて答えると、その頬がほつと緩んだ。やはり、これ以上  
被害を増やすことを

心配しているのだろう。香織の父親を伝つて、どれほど警察が介入  
していくのかはわからない。しかし、普通の家出ではないのだ。搜

査員が増えるのも時間の問題かもしれない。清原も警察やマスコミがくるのを恐れているかも知れない。もしもそんな大事になれば、自分たちの内申どころか、高校のイメージまで悪くなる。後輩が何代も推薦を受けられなくなり被害が広がる。今まで、この高校を卒業していたことを誇りに思っていた先輩の恥

になるかも知れない。考え出したらきりがない。この波紋は、どんどん広がっているのだ。

「じゃあね」

清原が、祥子の前を立ち去ると同時に、祥子もいきなり走り出した。全ての後悔と恐怖を振り去るよう、腕を一心に振り、全速力で自転車置き場まで行く。鞄を籠に突っ込むと、一息吐いた。足をペダルにかけ、座ると、一気に走り始めた。

今できることは、言われた通りに大人しくしていることだ。家に帰ろう。親が来るということは、怒られることが。まずはこの罪を認めよう。そう思えた。それからまた考えよう。どうして大人達はこんなに近くにいてくれたのに気づかなかつたのだろう。勝手に手を引っ込めていただけなのだ。それを伸ばせば、すぐにあんなに温かい胸があつたのに。

祥子は、清原に抱き留められた感触を思い出した。その時感じた懐かしい匂いに、祥子は自転車をこぎながら目を細めた。

\*

若菜は、覚悟を決めていたのだ。この作戦を提案したのは自分だつ

た。なによりも、安

易な考へで実行してしまつたこと。みんなが思うより、これを眞面目には一番考へていなかつたこと。部活に集中してほしかつたこと。すべて、言い訳でしかないが、若菜には大事なことだつたのだ。美香のことは心配だが、これで部活を諦めるつもりもなかつた。

「……それで、他のやつらの悩みは知つてゐるのか？」

若菜は、部室でみんなが解散したあと、一人体育教官室に來ていた。部活での報告があるとき、呼び出されるのは美香だつたが、彼女が休みの時や、用事のあるときは副キャプテンの若菜の役目だつた。ヒゲが、そんな若菜をじつと見つめる。

「知つてゐるものもいます。ただ、知らないものもいます」

若菜が、椅子に座る髪の前に建ち、下を向きながら言つた。部室でみんなが帰ると、若菜はひとしきり涙を流した。その跡は、今も残つてゐる。だが、決めたのだ。この責任は、自分で取ろうと。

「なんだ？ 中途半端だな。そんな気持ちでこんな騒動を起こしたのか！？」一人姿を消したんだぞ？」

若菜の喉がごくりと鳴つた。そんなことは分かつてゐる。だが、大人はいつもこうだ。

子供の悩みはたいしたことがないと決めつけてゐる。仕事で悩み、家族を守ることに必死になる自分たちが、一番正しくて悩み抜き、そして生きていると勘違ひしている。子供だつて親の顔色も窺えば、何かを手伝おうと必死になる。心配もするし、自分で生き抜こうと考へてゐる。それを、分かつていい。標的は、まだ目の前にいるのだ。自分たちの兵士を一人失つてもなお、敵は元気に生きている。そして、自分を責めているのだ。罪は認め、怒られるつもりだつた。しかし、それも見下されるような視線でぐらつく。それが視線に現れたのだろう。ヒゲが、若菜に顔をしかめたかと思うと、大きくなめ息を吐いた。

「そんな気持ちと、と言つたのは、悩みについてではない。事態についてだ。そして、無謀な行動についてだ」

ヒゲは、いつも怒鳴った。いつも怒っていた。若菜は、困った顔を見るのは初めてだつた。それが、今度は動搖となる。

「どういふことですか」

「お前達は、友達を一人犠牲にしても……その身までかけて、得たかつたものは、何だ？ それが悩んでいたものだらう？ それを解決するのに、あいつの命を捧げたようなものだ。それで、お前達は得られたのか？ え？ お前の悩みはなんだつたんだ」

ヒゲは、もう怒鳴つても怒つても居なかつた。ただ、切実に若菜に問いかけていた。若菜の欲しかつたもの。それは……推薦状だ。それもヒゲに書いて貰いたかつたもの。それで、大学へ行けたのだ。将来に必要な一枚の紙。それだけだ。そのためには必要な実力も、結果も残してきたつもりだ。それなのに、最後の大変な大会の前に、仲間も秩序が乱れ始めた。この提案をした時、若菜は確かに自分のことしか考えていなかつたのだ。自分が得ることが出来るのならば、多少の犠牲は仕方ないとまで思つていたのだ。まさかここまでとは思わなかつたが、大小は関係ないだろう。仲間が裏切つている気がしたが、実は、自分が裏切つていたのかも知れなかつた。

「欲しい者は、手に入つていません」

その続きは、若菜の口から出でこなかつた。どうすればいいのだ。失つたものは、もう元には戻らない。それならば、どう償えば……いいと説うのだ。ヒゲも教師とはいえ、その答えをくれることなく、ただじつと若菜を見つめていた。

＊  
「ただいまー」

千夏は、いつもと同じように玄関のドアを開いた。周りの空気といふのは、自分の感情次第でいくらでも変化する。昨夜、あんなにも暖かい色をしていたこの家は、今は寒々とした青い色が立ちこめている気がした。そこへ、母親がさらに青い顔で飛び出してきたのだ。ドアを閉めた千夏は、靴を脱ごうとして身体が止まつた。

「お母さん？　どうしたの？」

もう問題が知れ渡つたのだろうか。殴られるか、否か。ぐっとこれまでの戦争に向けて奥歯を噛みしめた時だった。

「千夏……。美香ちゃんが……」

母親は、受話器を片手によろよろと千夏の方へと歩いてきた。歩いてくる途中に、スリ

ツパが片方脱げ、もう一つも脱げる。口をあんぐりとだらしなく開き、千夏へ手を差し出す。なんだといったのだ。その手を思わず掴み、千夏は自分の肩へ回すように導いた。

「どうしたの？　お母さん、美香が何！」

見つかったのだろうか。しかし、この様子で明るい話題を提供してくれるとは思わない。

母の手から子機を取ると、千夏は耳に当てた。しかし電話の向こうには誰もない。それを放り出すと、母を抱えて居間にに入った。

「おかーさんっ。どうしたの？　何があったの？」

母をソファに座らせて、台所へ走る。水道の水を並々とグラスに注ぐと、今度はソファへ走った。

「電話があつたわよ……」

母親が、美香の手から取つたコップに口を付けてから言つた。おそらく学校からだ。千

夏は、顔を背けて頷いた。

「顧問の先生からよ。香織けやんのお父さんが、色々やつてくれたみたいなんだけど」

「……けど？　けど、何？」

母親は答えを知っているのだ。早く、早く教えて欲しかつた。美香は無事なのだろうか。

「血痕が、出たらしいわ

そう言い終えると、母親は泣き崩れるようにしてソファに顔を埋めた。肩が震えている。

千夏はそんな母親を宥めることも出来ず、呆然と宙を見つめた。血痕……血液ということ

は、美香が怪我を負つたのだ。

「そんな……そんな、美香。警察……」

「大丈夫。大丈夫よ。詳しくは帰ってきてから話すから」「帰つてきてからつて。どこかへ行くの？」

母親は頬を手の甲で拭うと、すぐに無理矢理微笑もうとした。

「さうよ。学校へ保護者で呼ばれたわ。血痕は見つかつたらしけど、美香ちゃん本人は

見つかつてはいないらしいの。だから、これからどういう措置をとるか、相談するらしい

わ。お母さん、なるべく早く帰つてくるから。お父さんが戻るまで玄関は開けてはダメよ。

それと」

母親の言葉に、千夏はひとつひとつ確認するように頷いた。これ以上悪いコースがあるのか。

「あのね、まだこのことを公にはしないらしいの。誰にも話しかやダメよ」

そんなことか、と千夏はうなだれた。言われなくても、話すつもりなどなかつた。自分たちの悪事から始まつたことだ。言えるわけがない。母親は、すつと立ち上ると、服を簡単に着替えて始めた。電話は、ヒゲから来たのだろう。それならば、千夏達が何をしてかしたのか母親には伝わつているはずだ。詳細までは知らなくても、悪事を企んでいたことは分かつてているのだ。母親の背中を見てそこまで考えてから、その思考は中断した。

美香の血痕が見つかつたということは、益々事件だと確信されたことになる。そうなれば、美香がなぜ校内にいたかは別としても、ま

さかメンバーも絡んでいると知らされていないのだろうか。本当に、ただ事件に巻き込まれたと、そう知らされたのかもしれない。それは、千夏にとつては有り難い話だ。せっかく大事にされているのを時間できた途端、再び迷惑な子供の烙印を押されてしまうのだから。それならば、美香には助かつて欲しいが、このままで悪くないと、いう感情が湧いた。しかし、本当に犯人はいるのだ。これから夜まで、この家にいなければならない。なぜ、変質者はF-1に美香がいたのを知っていたのだろうか。メンバーではない身内にも、犯人がいるのだろうか……。考えながら床の一点を凝視していると、視界に母親の姿が入った。ふと顔を上げると、彼女の目は先程の動搖が嘘のようにまじまじと千夏を見つめていた。

「…………何？」

思わず、声が裏返りそうになる。母親は、千夏の言葉に魔法が解けたように動き出すと、肩までの髪の毛を撫でた。そして小さく首を振る。

「ううん。何でもないの。ちょっと千夏が心配になっただけ。行って来るね」

千夏が頷くのを待つて、母親は家を出ていった。それを見送ると、千夏は一階の部屋へと移動した。部屋に荷物を置くと、ベッドの上に座り考える。香織も言っていたではないか。何かがおかしい、と。都合良く考えれば、確かに母親は全てを知らずにいるだろう。

しかし、そもそも誰かがあの狭い空間に美香がいることを知つていたら、どこかで計画を聞いていたはずだ。全員で計画していふとしたのは、部室だけだ。千夏は思い出しながら布団に潜り込んだ。一階に一人でいるのも怖かった。もし、バー部がなんらかの理由で狙われているとしたら、いつ自分に魔の手が襲いかかるか分からぬ。恐怖で叫びだしたかった。これなら、みんなと固まつていればよかつた。何をするにも怖い。外に行くなど以ての外だ。

「あ……」

千夏は、ひとつ思い出したのだ。香織と下校途中。あれは三日前だ

つたろうか。多少の興奮が身体を包み込みながら、一人で計画について話していた。その時、後ろを歩いていた男が一人いたではないか。あのときは気にならなかつた。しかし、いつの間にか後ろにいたあの男は、どこか拳銃不審だつたとも思える。

もしや、あれが変質者なのだろうか。姿はぼんやりとしか思い出せない。それでなくとも、夜だった。千夏は、我慢できずに携帯を手にした。他の者に話すなと言われたが、内部なら構わないだろう。それに、今の恐怖をうち消してくれるのは、やはり香織の存在しかなかつた。発信ボタンを押して数秒待つと、その音は途切れた。

「もしもし？ 千夏？ 大丈夫？」

携帯を持つ手が震えて仕方なかつたが、香織のその一声を聞いただけで、口が開いた。

「香織……」

電話の向こうは、まだ外らしい。千夏の声も、向こうの車の音にけされそうになる。この交通量の激しさだと、学校前の大通りだろうか。

「今……どこにいるの？」

千夏の声は、やはり聞こえなかつたようだ。

「え？ なに！？」

その声に従い、今度は幾分大きめの声で繰り返す。

「ああ。あたしはさつき学校を出たところ。千夏は家に着いた？」  
さつき学校を出たということは、一人で駅まで歩いているということだろう。やはり、香織は怯えることがない。だからこそ、香織に電話をしたかつたのだ。きっと落ち着かせて貰えると思つた。

「うん。さつきね。でも、お母さんが学校へ行つたから怖くなつて

……

「え？ 学校？」

香織は、保護者が呼ばれていることを知らないのだ。千夏に、事情を求めた。

「うん。みんな親が呼ばれたらしい。きっと香織のお父さんから説

明があるだろ？って。だつて……美香の……、美香の血痕が見つか  
つたっていうんだよ。信じられない……」

「血痕！？ どこに？！」

香織は、すぐにその話題に食いついた。しかし、千夏もはっきりと  
聞いたわけではない。

「ごめん、そこまでは……。でも、多分学校の中だと想つよ。それ  
に、それなりの……」

「変ね。おかしい」

「香織？ おかしいって何が？」

千夏が聞いても、香織は黙り込んだ。香織は、みんなと別れて何を  
していたのだろうか。

千夏の脳裏に疑問が浮かんだ時、電話の向いから再び声がした。

「千夏。明日も多分部活はないと思う。でも、話したいことがある  
の。学校へ……うつん。

部室に来て。」

「……話したいこと？ でも、家の親がなんていうか……」

「大丈夫。なんとかごまかして来てよ。犯人がいつ見つかるかもわ  
からないのに怯ええば

かりいたら、家から出られないよ。家だつて安全じゃない。平気。  
何かあつたらすぐに電  
話して」

「うん……。じゃあ、他のみんなには連絡しておく。香織……危な  
いことをするのは……」

「大丈夫！ もし、あたしに何かあつたら、すぐにヒゲのところへ  
行つてちょうだい」

「ヒゲ？」

千夏は、警察といわない香織に、若干の疑問を持った。なぜ、警察  
に頼らないのだ。香  
織が美香のように姿を消して、それでもまだヒゲを頼れというのか。  
ヒゲを頼つて……何

になるのだ。

「そうよ。いいから、警察よりも前に、ヒゲのところへ行くの。それに大丈夫。あたしのことば、心配しないで。じゃあね。また明日ね

慰めて貰うどころか、余計な疑問をもらつてしまつたようだ。香織は言うだけ言うと、

すぐに電話をきつてしまつた。

「あ……。男のことを見くの忘れた」

かけ直そつかとも思つたが、とりあえず言われた通りにじょうじつた。この行動が美

香を助けることになるのならば。千夏は、メンバーに連絡を取ろうと、携帯を再び開いた。

\*

おかしい。何か違和感が残る。だが、それがどこなのかが分からない。香織は、しばらく

く公園のベンチに座るとただじつと考え込んだ。ずっと握っていた電話をポケットに戻し、立ち上がる。まだ、帰れない。香織は学校へ戻ろうと思つた。公園には、数人の親子が遊んでいて、制服の香織のほうがおかしかつた。桜の花びらはとうに散つてしまつた。いつの間にか緑の葉を茂らせている。それを見上げながら、香織は考える。何かがおかしいのだ。どこから、おかしくなつたのだ。足並みが、だんだんと早くなつっていく。なぜ血痕だけが見つかるというおかしなことが起こつてゐるのだ。それに、それはどこに？ 香織は、達也が来るまでの間、来てからと、学校のあちこちに何かが残つていなかつと探した。それでも、何も見つけられなかつた。血痕はどこにあつたのだ。いや、香織が探したのは、おもに体育館の周りと、校門周辺だ。それ以外にあつたとしたら……一体なぜだ。夜は校舎に入ることも出来ない。窓ガラスを割つて侵入したのか？それならば、犯人は一度学校へ入つたというのか。いや、そう決まつ

たわけではない。ゆっくりと歩きながら、首を縦や横に振るのを見て、すれ違う人間達は、一様に不思議なものを見るような目で眺めた。それでも、疑問をひとつ浮かべてはうち消す作業を、香織は繰り返した。学校へ着くと、体育教官室に走る。まずはヒゲに、そしてもしかしたらもう父親が姿を見せているかも知れなかつた。校門脇に止めてあるその車は、香織も何度か見たことがある。父親が家に帰つてくる時は、これに乗つているときがあつたのだ。その車の中を覗いて見ると、何日も帰つていない様子が、さまざまと表れていた。この車の中で生活出来るのではと思うほどに、後部座席には衣類がある。そして助手席には、車の中で待機するときに飲むのか、ココアや水筒まであつた。他にも、何の料理をするのかという食材があり、香織がため息を吐いた。あの夜、久しぶりに帰ってきた父親は、香織が食べているコンビニのご飯に文句を言おうとした。それに恥じるほどの食事を自分もしているではないか。母親がいればこんなことはなかつたかもしれない。そう思ったところで、香織は首を思い切り横に振つた。こんなことを考へても、前には進めないのだ。香織は、無性にボールをつきたくなつた。

今日は、そういうえばトスをしていない。香織にとつて、そんな日はなかつた。ボールがないまま、上を見上げた。歩きながら、額の上に手をかざす。フォームだけをしていても、まるでボールがあるのでないかという感触に襲われる。ふ、と笑みがこぼれる。こんなにも、身体に染みついているとは。早く、チームでプレーがしたいと身体が疼いた。あんなにも練習は苦しいのに、もはや中毒だ。教官室に着くと、すでに親は数人が集まつているのが見えた。香織が、中へ入るうかと迷つていると、不意に肩を叩かれる。振りかえると、そこに立つていたのは、千夏の母親だつた。

「香織ちゃん、早く帰らなきゃ駄目じゃない」

「あ、すいません。こんなに」

久しぶりに会つというのによく覚えていたな、と内心舌を巻く。

思わず身体をするりと千夏の母親の背後に回したが、思いの外母親

は小さかつた。その後、ドアが開く。

「お、なんだお前。まだいたのか」

ヒゲが、ドアの間から顔を出した。千夏の母親の声が聞こえたのだろう。そつと外から聞き耳を立てたかった香織は、思わず顔をしかめた。

「香織、何をしているんだ？」

その太い声に嫌な予感がして顔を上げると、ヒゲの脇から顔を出しているのは、あろう

ことか香織の父親だつた。

「父さん。ねえ、美香の血痕が見つかつたって、本当なの？」

香織は、隣で千夏の母親が驚いた顔をしているのを横目で身ながら父親に言つた。父親は、最初大きなため息を吐いたが、諦めたように頷いた。微かに苛立つてゐる様にも見えた。

「本當だ。学校の裏で見つかつたさ。でも、今は人がいるから行くんじやない。お前はさ

つさと家に帰るんだ。外へ出るな」

大人達は、同じことしか言わない。中を覗くと、保護者が円になつて座つてゐる。きっとメンバーはみんな、家で寂しく不安な気持ちを抱えているのだろう。

「分かつた。美香は？ 無事なの？ 誘拐つてこともありえるの？」

香織は、それでも最後の質問だとばかり詰め寄つた。しかし、父親は軽く首を振つただけだった。それを、これから保護者に報告するのだろう。下唇を噛みしめ、香織は父親を睨み付けた。香織が何かをするのをとことん阻むつもりなのだ。

「もういい……っ」  
香織が背中を向けた時だった。

「早く帰れ」

父親のその一言だけが追いかけてきた。そして、その隙間から見えたのは、清原までも

が泣いていることだつた。普段は気丈な先生までが、ハンカチを目頭に当てていた。

すぐに、ヒゲは千夏の母親を部屋に入れ、そしてドアを閉めてしまつた。ドアに耳をつけたが、中からは何も聞こえない。清原が泣いているのは、香織の胸に深くトゲを刺した。

泣いている。なぜだ。警察は、もう美香の身柄を手に入れたのではないか。それも、最悪な形で。香織の足が、初めて震えた。本当に、失つてしまつたのだろうか。香織は、震える足で階段を下つた。裏庭へ向かう。確かに、さきほど香織は裏庭へは行かなかつた。なぜなら不自然だからだ。どうして裏庭なのだ。F1から校門とは正反対のほうにあるそれに、なぜわざわざ行かなければならない。香織の頭にはそれがなかつた。しかし、事件とはこうなのだろう。人間の感情が読めないと同じくらい、事件も先が読めないのだ。血痕がいつのものかは分からぬ。自分がもしも、もつと早くに裏庭にも行けば、何かが違つたのかも知れない。そう思うと、恐怖で吐き気までこみ上げてくる。裏庭へ付くと、そこには何人かの刑事がいた。背広を着て、踞つている。

「どうして……誰が見つけたの？」

聞いて、刑事が教えてくれるとは思わなかつた。香織は、身体を校舎の陰に隠してその様子を見守る。そして、角度を変えた時だつた。

「ひつ……」

裏庭の、芝生の一部が、赤く染まつているのだ。それも、大量といえるほどの量で。見たこともないような量の血が、そこら中に飛んでいる。そしてそれは、ぽつ、ぽつと方向を指しているようにも見えた。

「なに……あれつ」

口を開いた瞬間、吐き気がこみ上げた。くるりと後ろを振り返ると、全速力でその場を

去る。どこに行くかも決まっていない。ただ、あの血の塊が追いかけてくるよつて怖かつた。足が竦む。散々走り、氣づくとそこには演劇部が練習しているホールだつた。美香の事

件が知らされていない今、学校にはいつもと変わらないおだやかな時間が流れている。ホールの扉を開けると、中ではもつすでに一年生が中心となつて舞台の上で動いていた。

一年生がその周りでちよこまかと荷物を運ぶ。ここは、世代が入れ替わつたところなのだ。

こうして、人は入れ替わつていいく。生きるのも死ぬのも入れ替わり。会社の中でも、学校

でも。その場所には留まることが出来ないのだ。込み上がる吐き気で、身体が震える。少しだけ休もうと、ホールの一番後ろの端の座席に腰をかけた。舞台のほうしか灯りがつい

ていない今、たとえ後ろに誰かいてもさほど気にならないだひつ。そのうえ、三年生だ。

文句は言われないだひつ。舞台の中央に立つた生徒が、なにやらセリフを言い始めた。

まだ、代替わりをして間もないからか、声が後ろのままで届きにくいようだ。それで

も、目を瞑ると頭の刺激剤のよつになり、妙に心地よかつた。脇から音楽も加わる。場面

はもう途中のようで、その音楽は悲しげだ。と、すぐに車の急ブレーキ音が入る。車のぶつかつた音。

「おかああさんつ。おかあさん！」

その声に、香織が目を開けると、劇の中では、人間が一人に増えていた。先ほど話して

いた彼女は床に倒れ込み、脇ではもうひとりの女の子が泣いている。先ほどの車の音。事

事故の場面か……。香織の脳裏にも、昔のしまい込んだ記憶が蘇る。

「おかああああさんっ。おかああさん」

その声を、ぎゅっと目を瞑つて押し戻す。最近では、滅多に思い出すこともなくなつて

きたはずだつた。それなのに、こんなに些細なことで、嫌な記憶と

いうのは忠実に再現や

れる。楽しかつたことは、思い出したくともどんどん色あせていくのに、辛かつたことは

忘れない。これは、なんの仕打ちなのだらう。香織は、そのままぎゅっと目を瞑り続け

た。

「あの、もう締めたいんですけど、いいですか？」

不意に肩を叩かれ目を開けると、目の前には、一人の女の子の顔があつた。

「うわ……っ。え？」

香織が気づくと、そこは真つ暗だつた。いや、性格に言えれば外も真つ暗だつたのだ。そのまま、思い出をまた封印しようとして目を瞑つたまま、眠りについてしまつたのだ。

「あ、ごめん。今帰るから」

香織は、隣に置いて置いた鞄を取ると、急いで外へ飛び出した。そのまま校門まで一気に走る。その時だ。校舎の方から誰かが走ってきた。もう体育教官室の灯りは消えていた。それなら、生徒だろうか。それとも……。

一人、現れたのは香織のよく人物だつた。自転車に乗り、颯爽と

駆けていく。しかし、どこか周囲を窺っているようにも見えた。なぜ。香織は、その時、昼間見た血痕を思い出した。裏庭へ引き返す。血痕の周りには、黄色い規制線が引かれている。どれほどの刑事があれから来たのかと、香織は思った。そこはもう、調べ終わっているはずだ。香織は、暗闇の中、そつと近寄った。灯りがないとよく見えない。さつきは気分が悪くなつたが、夜の中、それはあまりよくみえないくらいで都合良かつた。携帯を開き、その灯りで地面を照らす。何か、何か分かることはないだろうか……。そう思った香織は、ふと違和感に気づいた。先ほどの自転車の人物。この血痕……。これは早く家に帰る必要がありそうだった。香織は、朝とは違う足並みだった。

「香織！ よかつたよ、生きていて」  
香織が部室のドアを開けた途端、千夏が飛びついてきた。今日は、一晩じつくりしたこと

を整理するためにも、香織はトスをしながらやって来た。そのボルが、衝撃で香織の腕から転がった。行く先はもうひと、部室の中。その跡を田で追いつく、どうやら全員が集まつていてるようだつた。

「香織。千夏から聞いたよ。どうこうこと？」

部室には、京子も若菜も祥子もいる。みな一様に青ざめた顔で、香織を見つめている。今日はお菓子も飲み物もない。美香が心配で眠れなかつたというのが、全員の顔に表れている。香織はといえば、昨晩インターネットや本を使って調べた結果、ある事実に直面

していた。部室に足を上げることなく、香織は言った。  
「謎がとけたの。あたしが正しければ、美香は生きているわ」「え？ それはどう……？」

千夏が挿もうとした口を香織が止める。

「その前にもう一度約束して。たとえ何を知つても、誰も責めないと。いい？」

香織の言葉に、戸惑いながらもみなが頷きあつ。

「よし。それじゃあ行こう。みんな、鞄持つて」

香織は、ボールを胸に抱えると、外へ足を踏み出した。

「ちょっと、どこに？」

「ついてきて。ここで待つっていても美香は帰つてこないよ。そう、見つけてあげるまでね」

香織は少しだけ肩を竦めた。

「あたしも実際なぜそうなったかは分からぬ。でも、いくつかを考えて答えがわかりかけているのよ」

「行こう」「

若菜の一言で、全員が立ち上がった。今日もバレー部は休みだ。後輩は、何が起こった

のかを心配しながらも、返つてくる言葉は喜びの声だった。香織達の戦いが、終わりを迎えている。それぞれのおもいを胸に秘め、最後の戦いが幕を開けた。

\*

学校を出ると、六人は話すこともなくただ黙々と歩いた。行き先を知っているのは香織だけなので、仕方なく他の五人は後を付いていくしかなかった。五人はどこへ行くのか気になつたが、香織のその足取りに迷いはなかつた。十分近く歩いた所で、不意に香織の足が止まつた。そして、全員が知つてゐる家だつた。

「ちょっと、ここって……」

京子が戸惑いの表情で香織の顔を見た。大きくはないが、一軒家だ。真つ白な壁には、

鉢植えが飾られている。その中では、色とりどりの花が咲いていた。そして、門の中にある物に、祥子が飛びついた。

「これ、美香の自転車じゃない！」

そのとおりだつた。美香の名前が、前輪を覆つ縁に書いてある上に、前籠は相変わらず

へこんでいる。間違いない。香織は、それを確認すると小さく頷いた。

「なんで！　ここは、前みんなで来たじゃない！　どうして美香

がここにいるの…」

若菜が言つ。そつ、こここの庭で、以前バーべキューをしたことがあるのだ。

「それは、本人に聞いてみようよ」  
そう言つと、香織はチャイムに手をかけた。チャイムの音が静かに、  
だがはつきりと響いた。門の壁には家の中に繋がるマイクが付けられていても関わらず、生の声が外まで聞こえた。顔を出した途端、その人物は微笑んだのだ。

「はーい。つて、あら。早かつたのね」

意外にも冷静な対応が、メンバーを反対に動搖させる。しかし、誘拐にあたるかもしれない

ない今、この態度を見て、香織の中の想定は確信へと変わつていった。普段の愛想を一切

消して香織が言つ。

「美香……美香に会わせて下さい。清原先生」

その人物の顔に、一同は呆気にとられたままだ。香織と清原を交互に見ると、千夏が叫んだ。

「なんで！？」

隣に立つ京子の袖を引っ張るが、彼女も自分の思考回路を保のに精一杯のようだ。千夏

の顔を見て、同じような声で言つた。

「知らないよ！　じゃあ血痕は？」

「血痕！　そうだ！　美香は怪我をしているんでしょう？」

「先生！　ひどい！」

京子と千夏が言い合つていると、一人祥子が呟いた。

「美香は……いるのね。生きて……いるんでしょ？」

その日からは、再び大粒の涙が流れた。休日に制服を着た六人が、こんな家の前で騒いでいても迷惑だろう。若菜が祥子の背中をさす

るのを横目で見ながら、香織はもう一度言つた。

「美香に、会わせてください。失礼します」

門を開いて中に入る。清原が顔だけ出した状態のドアを思い切り開ける。清原は、パジャマ姿だったが、香織の行動を止めなかつた。

「ねえ、どういうこと?」

後に続いてきた千夏が、香織の制服の背中を引っ張る。振り返ると、残りの五人は切実

な顔で香織を見ていた。祥子意外の目に涙はなかつたが、一様に眉毛が下がっている。だ

が、美香の姿を見るまで、香織は少なからず安心出来なかつた。  
「説明するよ。それには……、先生。もう一度言います。中へ入つていいですね?」

清原は、素直に頷くと身体を避けた。赤いパジャマは、この場の緊張感をどうも緩めて

しまう。そしてその身体も、うっかりすると玄関のドアを塞いでしまうほどだ。その脇を

すり抜けて、香織は中へ踏み込んだ。家の中は、コーヒーの香りが漂つている。一見、普

通の家庭の朝の光景と何も変わらないだらう。しかし、それはここに目的の人物がいない

時の話だ。何かあつた時のために、携帯電話を制服のポケットに移動する。

「そここのドアを開けて、リビングで待つていてちょうだい。ちょっと着替えてくるわ」

香織が頷くと、清原は玄関前にある一階への階段を上つていった。メンバーを振り返り、

香織は移動を促した。各自に顔を見合させながら、みんなが香織に従つ。しかし、美香の

姿は見当たらない。部屋の中は綺麗に片づいていて、棚の上には綺

麗な花瓶に花が生けら

れている。香織がそれを眺めていると、祥子が呟いた。

「先生が犯人ということだよね？ あたし達も危ないってこと？」

祥子がした質問に、若菜が素早く一瞥した。

「だつて……。怖いじゃん」

祥子が、面目なさそうに言ひ。

「確かにね。美香の自転車はある。それなのに、美香はいない。犯人は清原先生なんでしょ？ なんの目的があるの？ 身近な人物過ぎる。そりや怖くなるよね」

千夏が、祥子を庇つ。祥子の目には、再び涙の膜が張つた。色々な緊張で、涙もうくな

るのは分かるが、香織は慰める気にはならなかつた。家中の空気が、温かく歓迎している

ように見えて、いつ裏切られるか分からぬのだ。神経が張りつめる。美香が裏切つたのではないなら、なぜだ。そして、あの清原の態度だ。まるで香織が来るのを待つていた

かのような口振りだつた。美香が……話したのだろうか。

「そういえば、お腹減つたね」

京子が咳き、全員がため息を漏らした時だつた。居間のドアが開き、顔を出したのはもちろん普段のジャージに着替えた清原だつた。そして、ドアからはまた一人、一人と顔を出したのだ。

「お父さん！」

香織が叫ぶ。そう、清原の後から入ってきたのは香織の父だつたのだ。背広を着てネクタイを締めている。先日の夜とは違い、顎の下の無精髭も綺麗に剃られていた。驚くと同

時に、やつぱりという確信を掘んだ。香織はその結論に達すると、無意識のうちに笑みがこぼれた。なんといつてだらつ。騙したつもりが、騙されていたところのか。

「ちょっと、なにこれ……」

若菜も呆れたように呴いた。清原のあとから入ってきたのは、香織の父親だけではなかつたのだ。ヒゲも、千夏や若菜、祥子、京子の母親も続いた。一様に、大人達は笑つてい

た。こんなことをしでかしたのは、子供だけではなかつた。

「何つ！？お母さん！　お母さんがどうしてここにいるわけ？　みんな……みんなが犯人

なの？　どうして美香を誘拐したのよ！」

千夏がソファから立ち上がり、食つてかかる。千夏が言葉を発する度に、彼女の母親は顔色を変えた。ついに母親が口を開いた時、香織が言った。

「千夏。ちょっと待つて」

千夏は、一旦言葉を切ると、諦めきれないように母親を睨み付けた。そしてソファに座る。

「あたし、何かがおかしいって言つていたよね。初めから親も知つていたわけではないとと思う。親は美香がいなくなつた時は、何も知らないはずよ？　昨日の招集でしょう。そうでしょう？　父さん。だって、美香がいなくなつたことは、あたしが伝える役目だつたじゃない」

「そうだ……。でもなんで？　ここに親が集まるの？　え、どうして？」

千夏が呴ぐ。若菜も祥子も、居心地が悪そうに小さくなつている。

親が集まつた。全て

の悪事の計画は明るみに出てゐるのだ。その空氣の中、京子の腹の虫が小さく鳴いた。誰

も笑うことなどない中で、京子の母親が、京子を睨み付けたのが香織には見えた。

「美香は何者かに連れ去られた……。ううん違う。その時点で間違つていたの。そう、やつぱり。美香は、保護されたのね？おそらく見つかってしまったのよ」

香織は、父親の顔を見てはつきりと言つた。

「保護！？」

残りのメンバーが声を揃える。そつといえど、この部屋に美香も、美香の親もいない。保護とは、無事ということなのか。

「美香。大丈夫。あしたたちが悪かつたの。『めんなさい。出できて』

香織が、さきほどよりも少し大きな声で廊下に向かつていった。その時だつた。床を踏

みしめる音と同時に姿を現したのは、紛れもなくバレーボのキャプテン、美香だつた。何

事も変わらない。怪我もない。その髪の毛だけは、いつものようにお団子にまとめられる

こともなく下ろしたままだ。それでも元気だつた。立つてゐる。それだけで奇跡のように

思えた。失つたと思つたのに、生きていた。それだけがメンバーに安堵をもたらせた。試

合のために必要なのではない。美香という一人の人間が、いかにバレーボのメンバーの間でかかせないものだつたのかは、その姿を見た時の感情が表していだ。顔を見ただけなの

に、鼻の奥がつんと痛くなつた。口がわなわなと震え、知らぬ間に嗚咽が漏れる。すぐに

でも体中をなで回し、その存在を確かめたい衝動に駆られる。部屋には、ため息とすすり

泣きが響いた。親たちも、部屋の脇に一列に並んだ。

「ねえ、教えて。美香は、どうしてここにいるの？　まだ少し、分からぬことがあるの」

香織の言葉に、美香は、申し訳なさそうに頷いた。そつと周りを見ると、思つた以上に

若菜が嗚咽している。おしゃべりく、責任を感じて、罪の意識で押しつぶされそうになつてい

たのだろう。何度も目の周りを擦つてしているので赤くなつている。緊張からか額に汗が浮かび、前髪が張り付いてしまつていて。

「実は……」

美香が部屋の中央にやつてきた。美香の声に、若干周りの泣き声が弱まる。

「あたし、あの夜、みんなが帰つてから怖くて。すぐに眠りに着いたの」

親たちはこの話を聞いているのか、もつ驚いた様子もない。ただ、メンバーだけが動搖している。

「もうしたら、お昼に食べたものがよくなかったのかもしれない。

……お腹を壊したの」

「…………は？」

思わず言葉に、香織が聞き返す。周りの視線が香織に集中し、一言謝る。田で、美香に続けるように促した。香織がここにいるといふことは、美香が自分で抜け出したのだと思っていた。それも恐怖で。まさか、体調に異変があつたとは想像もしなかつた。

「それでね、トイレに……。あ、もちろんF-1のトイレに行つたん

だけど。お腹が痛くて頭が回らなかつたの「うんうん、と周りも頷く。美香らしい行動に、一同は涙も止まりかけている。

「それで、トイレにいたら物音がして、うーんつてひとしきり苦しんだあとに顔を上げたら……」

「私がいたつてわけ」

美香の言葉を清原が繋いだ。清原は、両手を広げて肩を竦めた。何を血迷つたのか舌までべろりと出している。

「でも、どうして？ どうして先生は美香がF-1にいるのが分かつたの？」

祥子がおずおずと聞く。にやりと頬を持ち上げると、清原が言う。「この子ね、お腹痛くて気が動転していたんでしょ。電気をね、つけたのよ。まあ、仕方ない話よね。あんな真っ暗な所じや怖くて仕方ない。私はちょうど教室に忘れ物をして取りに行つていたの。そうしたら電気が点いていて、消し忘れたのかと思ったわ。だから中に入つてスイッチを触つたら、個室から音がするじゃない。このつちの心臓が止まるかと思つたわよ。」

清原はその瞬間を思い出したのか、胸に手を当てて大きく息を吐いた。

「それで逃げようとするこの子を抑えて、まずは部屋で話を聞こうとした。でも、訳の分からないことしか言わない。家に電話をしても繋がらない。だからウチで一晩休ませたの。翌日自転車を取りに行つてあげたら、バレー部が騒がしいじゃない？ 先生にお話して、相談した結果、こうなつたのよ」

「電気……。それで、美香。お腹はもついいの？」

祥子がまたおずおずと聞く。美香は、ゆっくりと頷いて、言った。「「めんね。あたし申し訳なくて……。でも先生の顔を見たら逃げ出したくなつて、窓か

ら逃げよつとしたら押さえられて」

美香が言うと、清原が豪快に笑つた。

「だつて、この子下着も履かないまま飛びだそうとするのよ？止めるわよ。この子が捕まっちゃう。まあ、それで家に連れてきたの。ビラしても帰らないつていうし、でもあのまま放つておけないしね。それでも、この子は何も話をなかつた」

「美香……」

みんなの視線が注目する。

「あつ……」

京子が声を上げると、みんながそこを見た。

「あたし、次の日F-1の窓が開いているのを見つけたけど、あれは

外からの侵入者じゃな

くて、美香が出ようとしたんだ」

京子は、気づいた途端なーんだとばかりにため息を吐いた。

「あ……！」

祥子までが同じ声を上げる。

「今度は何……？」

千夏が言つ。

「あたし……次の日。昨日ね、清原先生に抱きしめられたの。ちょっと体育館で落ち込んでいて。じゃあ先生はあのとき美香がどこにいるのか知つっていたのね……」

清原がまた肩を竦める。

「それで……あの匂いは、美香の匂いだつたんだ」

祥子は、帰り際に感じた、どこか嗅いだことのあるような懐かしいあれを思い出す。美香の香水の匂いだつたのだ。本当に微量だつたので、そこまで気づかなかつた。

「あたしが気づいたのもそれ

香織が付け足す。

「まず、なぜ保護者が呼ばれた場所に、清原先生がいるのか、不思議に思った。でも、先生はバレー部によくしてくれるし、泣いている感じだつたから、それでも普通かもと思い直したの。でも、帰る

時。あたしちょつと学校で居眠りしちゃつて、暗くなつていった。その時、清原先生が通つたのよ。暗かつたから先生には気づかれなかつた。でも、確かに美香の匂いがした。そして、自転車が美香のだつたの」

「あら、あたしがやつちやつていたのね。でも、自転車はこの子が帰るとき困るかと思つたし、早く帰りたくてね。まさか見られると思わなかつたね」

清原は、周りの保護者に申し訳ないように会釈をした。

「それだけじやありません。血痕です」

香織が言つと、千夏も反応した。

「そうだ！ あれば？ あれば何！？ 血痕があつたんでしょ！ 美香は死んじやつた……つて、思つて、あたし……」

思い出して泣き始めた千夏の肩を隣からそつと祥子が撫でた。

「あれば、作り物よ。血痕なんて初めからなかつたの」

「えええ！？」

全員が顔を揃えて驚く中、香織の父親だけはまっすぐと香織を見つめていた。

「先生が自転車に乗つて帰つたあと、あたしは何かがおかしいと思つた。血痕を見に行つた。確かに規制線は引かれていた。でも、なにか粉つぽかつたのよ。暗かつたけど、近寄つてみた。そうしたら、よくみたら血じやなかつた。一見そつくりだけね」

「なにそれ？ どうしてそんなこと」

祥子が、親たちの顔を見回した。

「家に帰つて色々調べたら、ドラマや映画で使いでしよう。血糊。あれつて案外簡単に作れるのよ。で、作つたのは、父さん。そういう？」

香織の父親は、それでもじつとしていた。

「父さん。あたしを試そつとしたの？ あたし、親が呼ばれたつて聞いて、昨日、学校へ行つたでしょ。その時お父さんの車を見た。家にあまり帰つて来られないくらい忙しいのも知つてゐるし、車の

中に服や食べ物があつても気にならなかつた。でも、パソコンで調べて合点がいった。ううん、驚いた。だつて、助手席にあつた食紅や片栗粉、ココアはすべて血糊を作る材料だったから

「ココア？ ココアで血が作れるの！？」

千夏が、今度は小さなこゝろを突つ込む。千夏も母親に睨まれて、首を縮めた。

「美香がここにいるのは半信半疑だつた。何か別の理由があるんじやないかとも思った・・・でも、あたしたちのやつていたことは無意味だつたのよ。騙すつもりが、結局騙されていた」

「香織。みんな……」めん

美香の目から涙が溢れた。

「何を言つているの！ 美香のせいでもないよ！」

京子が言つ。

「『めんなさい！……あたしが自分のために……』こんな」

若菜が一際大きな声で謝つた時だつた。

「誰も、悪くないんじやない？ そして、誰もが悪いわ」

その言葉の先にいたのは、千夏の母親だつた。

「お母さん？」

「千夏。昨日、電話を学校からもらつた時点では、本当に何も知らなかつたわ。でも、先

生も落ち着いているし、まずは学校へ来て欲しいの一<sup>ト</sup>張りだつた。だから、学校へ行く

前に、実はあなたに聞こつかとも思つたわ」

「あ……」

着替えを終えた時の母親の視線。あれは、そつこつ意図があつたのだ。

「学校に行つたら、香織ちゃんのお父さんと先生に話を聞いて驚いたわよ。お母さんはあなたをすぐに怒るうと思つた。だつて、その前夜心配したことはすべて嘘だつたのよ？」

つちは、子供になにかあつたらどうじょひと『』が氣ではなかつたのに。生きていけないのに。その気持ちを、あなたはもて遊んだのよ

ふつと、頬を緩ませ千夏の母は続ける。

「でも、考えたらあたしとお父さんもあなたの気持ちを分かろうとはしていなかつた。お母さんも、悪かったのよね。でも、これだけは分かつてちょうだい。私たちは、あなたのことが大好きなのよ。こんなことをしてもね」

千夏が、涙を隠そそうと下を向いた。

「そうね。同感よ」

祥子の母親が言つ。

「私たちは、誰がこんなことを始めようと言つたのか、決めたのか、聞き出そつとはしない。ただ、怒るだけではダメだとおもつたのよ。若菜の母親の言葉に、若菜が頷いた。これは、隠された子供からのデモ活動であり、親からの答えだつたのだ。

「お前達は、分かつていなかつた」

次に言葉を引き継いだのは、ヒゲだつた。怒つてもいない。淡々とした口調だ。

「お前達は、俺の為にバーをしていたのか？」

ヒゲがメンバーを見回す。誰も、頷かない。

「親の為に、受験をするのか？」

「違います……」

昨日と同じだ。祥子が小さな声で呟く。その声は、小さくとも普段の祥子の口調と思えないほどはつきりとしていた。

「お前達は、自分のために、友達を犠牲にしていいのか？」

次の言葉がとどめだつた。全員の目から涙が溢れる。何が大切か、それが分かつた気が

した。人のためにする行動と、自分のためにする行動が間違つていた。どんなにか自分勝手な考へだつたのだろう。

「お前達がやめたいなら、俺は県大など行けなくても構わない。喜んで受験勉強の手伝い

だつてするさ。それなのなんだ？ 全てを人のせいにして、鬱憤を晴らそうとしたのか？

美香が……こいつが、あんな建物で、夜中一人で震えるとは思わなかつたのか？怖いだろ

うと心配してやらなかつたのか？」

泣き声が大きくなる。心配はした。それでも誰も様子に見に行くことも、助けようとも

しなかつた。一晩だけだから。同意の上だから。自分から名乗りを上げたことだから。どちらも答えにはならない。

「自分勝手もいいとこだ！」

ヒゲは、今までため込んだものを吐き出すように一言大きな声を出すと、その大きさに自分が驚いたように口に手を当てる。ヒゲを一撫ですると、咳払いをした。

「ごめん。ごめんね」

口々に、声が飛び交う。メンバーが美香に謝る。その中に野太い声が混じつた。

「すいません。俺も、いけませんでした」

次に口を開いたのは、香織の父親だった。

「父さん……」

「香織が刑事になりたいとの先生から聞いて、反対だった。だから、これに便乗したん

だ。香織がどういう反応を取るか

「どうして……そんなことを」

香織の父親は、軽く咳払いをすると言った。

「俺は、お前の将来を邪魔するつもりなんじゃない。この仕事が嫌いなのではない。ただ、

お前には辛い思いをしてほしくないだけだ

「辛い思いって何？」

「これは体力も精神も使う仕事だ。お前が、どれだけの気持ちで言つているのか知りたかった。いや、本当のところ、俺はお前まで失いたくないんだ」

「……」

父の言おうとしていることは、香織には分かった。母親を亡くしたことを見つて居る

だ。香織が小さい頃、母親は車のひき逃げの被害者になっていた。それを隣で見ていた香織は、まだその記憶を忘れるることは出来ない。だからと言つて、父親の言つように、大人しく家にいればいいとは思えない。香織がやりたいのは、母のような被害者を亡くし、父のような刑事になることなのだ。それを、伝えたかった。そう、香織も逃げていたのだ。反対されると決めつけて、話し合ひながら逃げていた。

「父さん。あたしは、父さんのような刑事になりたい。危ないことがあるのは生きていれば同じでしょう。あたしは大丈夫だから。何かあれば父さんにちかに話すよ」

香織の震える言葉に、父親は何も言わなかつた。微かに頷くと、居間を静かに出ていった。しかし、その後ろ姿はどうか悲しげだった。香織は、千夏と視線を合わせると、泣き顔のまま小さく肩を竦めた。

「千夏。お母さんも「めんね。お父さんともよく話しあおつね」「え？」

千夏の母親も、神妙な顔をした。

「祥子も、「めんね。お母さんも出来る限りのこと頑張るから。下の子にもよく話つ」

「お母さん……」

それぞれのメンバーが、それぞれの親と、話し始めた。香織も、どこか晴れ晴れとした

気持ちだった。

「ねえ、あんたなんの悩み？ 家に不満でもあるの？」

京子の親が、京子に聞く。京子の腹は、今も小さな鳴き声を上げている。京子の親は、

娘の悩みがさっぱり分からぬ、といつ顔をしている。

「あたしは別に。ちょっと毎日イライラしていただけ」

京子は、わざと冷たく言った。

「お前達。これからは意志を持つんだ。いつこいつ形ではない。自分が正しいと思うのは、

間違っていることではない。行動することも、必要だ。しかし、なにが自分のためで、何

がひとのためになつていて、それを考えてから行動するのだ」

ヒゲは、それだけ言つと、リビングを後にした。

「さあ！ それじゃあ、せつかくだから、お昼、食べていってくださいな。お母様方もね」

清原が両手を打つ。

「『めんなさい』

若菜が、戦陣を切つて頭を下げる。

「『めんなさい』

美香が、そして祥子と京子が続いた。

「『めんなさい。ありがとう』

香織が言つ。御礼は、父親に言つたものだ。聞こえてはいなうが、聞いたかったのだ。

「美香」

その時だった。玄関で、足音がしたかと思つと、居間のドアが開けられた。ここに唯一いなかつた人物が現れたのだ。

「お父さん、お母さん」

美香は、気づいたら彼女の胸の中にいた。

「ずっと連絡がつかなかつたんだけど。今朝、やつと取れたのよ」  
清原が付け足すように言つ。

「美香。『ごめんなさい』」

美香は、母親の腕をぐっと握つた。彼女の待つてていたものは、これ  
だつた。温かさが体  
中に広がる。太陽の日差しよりもそれは氣持  
ちよかつた。

「お母さん。どこに行つていたの？」

「美香。美香が夜帰つてこなかつた日、お母さん、メモを残して出  
かけていたの」

「俺の母さん。お前のおばあちゃんが倒れてしまつて。母さんが来  
てくれたんだよ」

父親が、抱き合ひ一人の背中を同時に撫でながら言つた。  
「休みに入るところだつたし、メモだけ残したの。だから、家の電  
話には出られなくて。

あ、おばあちゃんは大丈夫。それで家に電話しても繋がらなくて。  
携帯に電話したら、先

生が出られて

若菜は、昨日鞄をまるごとヒゲに渡していた。だから、母親は家の  
電話にてなかつたの  
だ。

「『ごめんな。こんなにお前を傷つけていたなんて』

父親も、涙混じりの声で謝つた。思わぬ産物も、あつたようだ。そ  
れをメンバーが見守

つていた。このデモは、間違つてはいなかつたのだ。京子は、それ  
を見ていたが、もう一度腹の虫がなつた。

「『ごめん。トイレ

そう言つて、一人その場から抜けた。京子の親は呆れた顔でそれ  
を見送り、周りに会釈している。しかし、京子にも成し遂げること  
があつたのだ。

「先生」

玄関を出ると、そこにはタバコをふかしながら佇むヒゲの姿があった。それを後ろから

声を掛ける。ヒゲは、誰がいるのか分かつていてるのか振り向かない。「先生。気づいているかも知れないけど、あたし、先生のことが、好きです」

「……」

「この作戦に参加したのも、もし誰かが危ない目にあつたら、あたしの心配もしてくれることなかつたの。今思つと、馬鹿みたいだよね」

「分かつてないじゃないか」

京子は見えないのをいいことに、その背中に舌を出した。

「分かつています。でも、それを分かつっていても、おさえられなかつた。あたしが、いくら行動を起こしても、先生は気づきながらも拒否していただしよう？」

「……」

「分かつていました。でも、これで踏ん切りがつきました。ありがとうございました。これから県大まで、頑張ります。癖も直つたし

「……」

「それじゃあ……」

京子が家の中に入ろうとした時だった。

「分からない問題は、いつでも聞きに来い」

京子は、返事をせずに、家に入った。これまで以上に涙が止まらない。でも、なぜだか晴れやかな気分だった。大丈夫、頑張れる。そんな気がした。居間に戻ると、そこには昼食の準備が進められていた。

「ほらー。あんたが一番食べるんだから、早く手伝いなさいー」

台所の奥から、清原の声が響く。笑みが漏れる。そう、ここに今、ちゃんと居場所はあるのだ。それだけで、幸せだと思えた。

「はーーーい

京子は、右手を挙げて答えた。いつして、戦いは無事、幕を下ろしたのだった。

月日は過ぎ去り、六人は今日、高校を卒業する。一年前と同じく、季節はいつの間にか変わっていた。桜の木は今年も見事に花を付け、卒業生の門出を祝う。進路指導室の前の植木は、今年も部屋を暗くしたが、例年に勝る合格率が教師陣を沸かせていた。それでも阿部が不意に校門の陰から飛び出してくることは変わらない。でっぷりとした腹を揺らし、首元の蝶ネクタイを自慢げに撫でる。結局、彼に進学率は関係なかつたらしい。

「香織ー。こんな時までトスやらないでよー」

卒業式が全て終了すると、バレー部員は体育館に集められた。香織はこんな時も、ボールをトスしないと気が済まないのだ。

「だつて受験勉強ばっかりやっていて、息抜き程度でしかやってないから鈍つちやつて」

まだ名残惜しそうにボールを見つめる香織から、千夏がボールを取り上げる。体育館でヒゲに呼び出された六人は、制服の胸元に花を飾っている。

「お前達は、最後まで俺に迷惑をかけたいのか？」

なかなか並ばないメンバーにヒゲの言葉は冷たくても、その目は笑っている。

「先生ありがとございました」

美香が頭を下げる。

「ありがとうございました！」

全員が声を揃える。この体育館ももう来なくなる。新しいところへ行くはずなのに、心が浮き立つよりも、うすら寂しい。ここで汗を掻いていた日には、一度と戻れないのだ。

「祥子、国立決まってよかつたねー」

京子が、祥子の肩を叩いて言った。

「何を言つているの。京子だって、専門に通いながらモテル業まつ

しぐりでしょ？ これからは、あんまりチョコレート食べるの控えなよー？ もうお肌も曲がり角なんだし

香織が言つ。京子が、あの戦いの日以来、資料室に通うことはなかつた。

「でも、大きくて黒いのには変わらないよねー」

「あ！ 千夏だって、小さくて黒いのに変わらないでしょー…」

「はいはい！ 最後までそんなことやらないのー！」

美香が、二人のじやれ合ひを止めた。美香の香水は相変わらずマーキングとして使用されているようだったが、もう派手なパークアーチを着る」とはなかつた。大学の令格発表へは家族三人で見に行つたといつ。

「千夏もさ、あんなに嫌がつていたのに、結局お兄ちゃんと同じ大学へ行つて、同じ家に下宿するなんて、物好きよねー」

香織が言つと、千夏は京子に腕を絡ませながら頬を膨らませた。「だつてー。あそこの文学部の教授、面白そうなのだもの。まあ、寺山修司の言葉にすれば『明日何が起つるかわかつてしまつたら、明日まで生きる楽しみがなくなるもの』って感じだよね。ね？』

そう言つてメンバーを見渡す千夏に、周りはクスクスと笑つた。

香織が笑顔を浮かべて聞いた。

「確かにそうかもね。それより千夏。あんた覚えている？ 去年の春に心配していたこと」

千夏は首を傾げた。結局は、悩みなど過ぎてしまえば忘れてしまうのだ。のど元を過ぎれば熱くはないのである。

「もう……。津波が向こうからやつて来るとかおかしなこと、言つていたじやない。今年はゆつくり辛いことが起つるつて。やつぱり、一年過ぎるのは遅かつた？」

千夏は、思い出したように両手を打つと、急に真面目な顔になつて肩を竦めた。

「つうん。意外と早かつたよ」

その答えに、今度はメンバーが声を出して笑つ。

「荒山若菜」

突如ヒゲが呼んだ声に、若菜は笑っていた頬を引き締めた。

「はい」

「お前が、バレー推薦で大学へ行きたいと言つた時、驚きながらも嬉しかつた」

京子が、からかうように若菜の腕を肘で小突く。それを、ヒゲが目で咎めると、京子は首を縮めながらあらぬ方へ視線を変えた。

「それでも、推薦を蹴り、結局は自力で試験を受けたこと。そして、強豪校に合格したこと、それをさらに誇りに思つ」

メンバーが大きく頷き、拍手が起る。その中を、若菜は照れくそそうに首を傾げた。

「お前達のことを、俺は特に一生忘れないだろ。……なんといつても困った奴が多かつた。あの戦いは……戦いだろ？　あれは、決して無駄では無かつたと思つ。むしろ、今だから言つが、よくぞやつてくれた。この先、辛いことはたくさんある。楽しいことはうが少ないはずだ。それでも、きっとお前達なら強く生きていけるだろう。忘れるな。お前達は、戦えるんだ。泣きたい時、苦しいときは思い出すんだ。この三年間に培つた努力を。負けて悔しかつた試合、勝つた時の喜びの気持ち、その一瞬すべてが力になつているはずだ。隣にいてくれたメンバーを、何が大事なのかを。何かあつたら、ここに戻つてこい。俺が話を聞いてやるから。……あと数年は転任もないはずだ」

髭の話で、次第に大きくなつたすすり泣きも、最後の一言で笑いに変わつた。

「先生。ちやんと居てくださいよねー」

「もー。空氣台無しじゃん」

「まあ、これがバレー部だよね」

口々に、涙を隠すように笑い合つ。それが体育館に響き渡る、最後のチャイムの音と重なつた。それが鳴り終わつた時、一瞬の沈黙が落ちる。やけに静かだつた。

「香織っ！」

この学校では珍しい、若い男の声に一斉に視線がドアに集中した。そこには、全員の視線を浴びて、一瞬たじろぐ男がいた。

「あ！ 香織、達也くんだよ」

祥子が言つ。その顔はとてもさっぱりとしていた。

「ああー。いいよなー。大学行く前から、あんなにかっこいい彼氏がいてー」

千夏がまたもや絡み始める。

「なんだっけ。刑事だろうと関係ない、俺が守つてやる。だっけ？」千夏の顔の前で、今度は京子が人差し指を左右にちょろちょろと動かして言つた。

「チツチツチ。違うよ。一生側にいてほしい。だよね？」

「はは。一人とも違うよ。俺の大学の法学部へ来い。でしょ？」

美香が京子の後を引き継いだ時、香織が大きく溜め息を吐いた。

「もう、やめてよ。どれも違うし」

そう言つて、達也の方を振り返る。

「校門で待つていてつていったでしょー！ ちょっと向こう行つて！」

香織の言葉を、まるで気にしていらない様子の達也は、軽く手を挙げると姿を消してしまつた。

「あーあ。香織、冷たあい。」

祥子が、少しだけ意地悪そうに言つた。香織は、他人事のようにツンと澄ましている。

「でも、大学へ来いつて言われて、本当にあの難関の法学部へ入っちゃうんだもんねー。さすが香織」

「だつて、あそこならお父さんもいいつて言つたんだつて。数年後には香織本当に刑事かもねー。そうしたら、拳銃一回持たせてね」また騒ぎ出した京子と千夏を、脇で若菜は呆れたように眺めている。香織は、反抗するように千夏に取られたボールを奪い返した。

「香織！ もうつ。あ、そうだ。この後、達也君も入れて何か食べ

に行こうよー！」

ええ！と香織の驚く傍ら、賛成の声が嬉々として上がる。それをずっと聞いていた

ヒゲが、体育館に響き渡る声で叫んだ。

「お前達！」

それは怒鳴り声にも近かった。いつも試合の時に響いていたその声は、すでに懐かしい。空気が一瞬で張りつめ、背筋を伸ばして全員が返事を返す。

「はいっ！」

「高校生活に、悔いはないか！」

ヒゲを放つてふさけ合っていたのを怒られると思つていたメンバーは、その言葉に一瞬顔を見合せた後、頬を緩ませた。

「はいっ！！」

全員が叫ぶように答える。この鮮やかな日々は宝だらう。一度とは手に入らない。永遠の戦場だ。ヒゲが、満足そうに頷くと同じ声で言った。

「よーし！解散！……行けっ！」

ヒゲの一聲で、六人は手を繋ぐ。そして、桜の舞つ世界へとかろやかに走り出していく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5494p/>

彼女たちの一歩

2010年12月27日03時42分発行